

天叡の城

with X'mas Present

しうや りふかふ



Christmas Market

クリスマス・イブの翌日が月曜日だなんて最悪だ。

『酷^{ひど}くない？　ありえないわ。だって何の意味があるの？　でもこれわ、

現実なんだわ』

Blue

最高に憂鬱な月曜日である。欧州豪州南北米などキリスト教圏ならともかくも、このZIPAG国ではクリスマスでも学校に行かなくてはならない。せめてもの慰めは冬休みが近いことか。と言っても彼女の住む芹奈市は二期制だから二十七日にならないと休みが始まらない。隣の



うとも

鵜那市では今日からが冬季休業だと云うのに。

『しかも楽しみにしていたクリスマス・プレゼントはGPS機能つきで位置情報がわかるお子様用のセルラー・フォンだったわ！ 私は最新のDocomo、じゃなきやプレイステーションを、ってお願いし続けていたのに。信じられるかしら？ こんな裏切りつてあるの？ こんなにも凄惨不幸って本当にあるものなのね！ マジで笑えるわ！

そうよ。おとうさんは私のことが気に入らないのよ。だっていい子じゃないものね。お姉さんのことばかり可愛がっているわ。そりゃあ、お姉さんはよい子よ。でもあんなに高い電子ピアノをプレゼントするなんて酷くない？ わかっているわ。もうどうだっていいのよ。私のこと

なんてどうでもいいんだわ！ 勉強なんて二度としない。勉強したい人なんているの？ 信じられないわ。莫迦じゃないかしら！』

母親の出してくれたきつね色のトーストを憂鬱な眼で眺めた。食べた
くない。食欲なんか湧くわけじゃないじゃん、そうおもう。休みたいわ、学
校なんて気分じゃないもの、ああ、こんな制度を設けた政令市長に裁き
を！

パステル・カラーのランドセルを母親が背負わせてくれる。祖母が買
ってくれた高級な水牛革素材のものだ。行つて来まあす、を言わずに
杏佳は玄関あなかを出てからも不貞腐れていた。

『おかあさんもおとうさんも私が死んじやったらどうおもうかしら？

いやよ、きつとあの人たちは笑って楽しく暮らすんだわ。邪魔者がいなくなったら、ってね。冗談じゃない。

でもこんな口惜しさも哀しさも懊惱おーのーも生きているうちよね。死んじゃえばなくなっちゃうんだわ。ないってゆーのわ、どうなのかしら？ 莫迦ムカみたい。ないってことも生きているうちのことじゃん。おもわなけりや「ない」ってゆーのもなしなんだわ。しょーもない話よね。もしも死んじやったなら、ただ毎日ではないこの月曜日みたいな無味乾燥で非情なものでしかないはずよ。でしょ？ 私ってヤバイくらい頭いい。

って言うか、どーでもいいけど何て寒い。死んじやうじゃない。私、不幸なんだわ。不幸せな子は凄く寒い日に外に出されて震えているもの

なのよ。そう云う運命なんだわ。コゼット（だったかしら）もそう。心から同情するわね、可哀想なコゼット！

ああ、それにしたって、何なのよ、この寒さわ。こんな日に十歳の女の子を登校させるなんて児童虐待よ。どうして児童相談所はいつも無能なの。それとも権限を与えない政府が悪いわけ？

信じられない、明日も行かなくっちゃならないのよ。ほとんど永遠だわ！』

シヴィロ大統領は民族主義を謳い、独立運動を弾圧しました。彼は僕

らが攻撃を始めると宣伝し、人々を煽りました。そんなことが可能かどうかともわからないのでしょうか。少なくとも僕や僕の家族にはできません。それがいい。それなのに。

確かに僕らの祖先が宗教の異なる彼らの祖先を蹂躪した時代がありました。しかしそれは僕らがやったことじゃない。僕らに対して報復する理由になるのでしょうか。人々を虐殺し、幼いこどもをさえも凌辱する理由になるのでしょうか。

平和な時代もありました。一部の狂信的な人間にとっては表面的な友好だったかもしれませんが。けれども大多数の人々にとってはこれが現実で、ほかの国々と変わらず、普通に学校で学び、普通に仕事をし、普通

に暮らせる、僕は何も知らず、当然のごとく信じていました。幸せな日々がずっと続くものだと思ひもなく、信じ切っていたのです。

もちろん、本当に理解し合い、隣人として暮らす地域もありました。そう云う地域では異教徒間の結婚さえあったのです。

しかし実際には彼らスロヴィ人の多くは僕らクレストス教徒、コシイヴオ人を疑い、憎んでいました。もう何百年も前から彼らリセヤ聖教の信徒たちは僕たちを憎しみ続けていたのです。コシイヴオ人も同じ不信を擁いていました。僕がそれに気がついたのは随分後になってからです。スロヴィ人への強い不信を多くのコシイヴオ人の大人が擁き続けていたことを知ったのは内戦が烈しくなってからでした。

村の誰かが殺され、猟銃を手にして興奮ぎみに復讐を誓う男たち、初期の頃によく見かけた光景です。やがてそう云う男たちはいなくなりました。替わりにたくさんの人たちが殺された痕跡を見るようになったのです。虐殺だけではなく、民族浄化と云う恐ろしい言葉も聞かれるようになりました。彼らはかつてクレストス教徒が優勢の時代にスロヴィ人の少年らを家族から引き離し、教化して支配者側に取り込んだことを民族的な種族の根絶化と捉え、僕たちの民族の女性を強姦し、スロヴィ人が孕ませることで報復すると主張しました。つまり生まれてくる子はスロヴィ人だと言うのです。

今振り返ればそれはただ高揚した攻撃性と人間の底に潜む獣的な欲

望との解放としか感じられません。僕の個人的意見ですが、少なくともそうとしかおもえません。かつて民族性を無みすために行なわれた同化政策と『民族浄化』を称した大規模なレイプとが同質とは僕には感じられないからです。

それからはもうこれ以上は悪くはならないだろうなどと考えていればいとも簡単に覆され、常に事態は最悪の方へ転がって行くばかりでした。大人たちはエウロペア連合とヴィーゴ連邦とのランヴィでの協議に期待していたようですが、事態は収拾するどころか、反って悪くなったのです。

その日、僕はユニセフの人たちが既に仮設してくれた臨時の教室での

勉強を終えて家に帰り、いつものように家の手伝いしようとしていました。そのとき、いきなり烈しくドアを叩く音がしたのです。父は既に殺され、いませんでした（僕が最後に見たのは道路に貼りついた父の血まみれの頭皮だけでした）ので母が出ると、銃を構えた警察官が立っていました。二人でした。

「表に出ろ。駅に行け。すぐここを出て行くんだ」

母は言いました。

「なぜです。いったい、どう云うことなんですか」

「知る必要はない。早くしろ。俺たちは村の全てを回らねけりやならないんだ。行かないのならこどもを撃つ」

「やめてください！　少しだけ時間をください。急いで荷造りしますから」

「ふざけるな、待っていられるか、今すぐだ。そのまま出ろ」

「待ってください。身支度もせずには出られません。下の子はまだ三歳なんです。今は冬です。風邪をひいているんです」

「冬さ。それがどうした？」

「僕らは駅に行きました。妹はあり合せの布に包まれ、母に抱かれていました。鼻を吸りながら、」

「おかあさん、寒いよ。寒いよ」

「そう言い続けていました。僕はたまりかねて母に尋ねました。」

「かあさん、僕らはどこに行くの？ どうしてこんなめに遭わなければならないの？」

「ジャコ、何も言わないで。もうこれ以上、母さんを哀しませないで」
母は父が死んで以来、すっかりふさいでしまっていたのです。

たくさんの村人が凍った道を歩いていました。大人たちは口々に「ラ
ンヴイでの交渉が不調に終わったせいだ。エウロペア連合軍が空爆を強
行する。これは報復だ」と言っていました。

僕らはプリス駅で無理やり列車に詰め込まれました。妹はずっと苦し
がっていました。僕は最初、涙が止まりませんでした。が、やがて辛さの
せいで何もわからず、早くどこでもいいから到着してくれ、それしか考

えられませんでした。それは凄まじい状態でした。離れ離れになつてしまった親子もいました。あの子たちがどうなつてしまったか、もうわかりません。マドニケに着いたのは夜でした。

僕が眼にした光景を今でも忘れられません。途方もない数、恐らくは何万人もの人々が冷たい雨や凍えるような冬の風をさえぎるものもない野原に、何も持たず、集つていたのです。食べ物も飲み物もありませんでした。震え、せめても体を寄せ合い、顔をこわばらせて寒さを凌ぐようと、哀れな年寄りやこどもや女の人たちばかりが風雨に晒されていたのです。

二日間、そこに留め置かれ、後は徒歩での強制移動でした。靴は破れ、

餓えと寒さで途中何人もの人が倒れましたが、とても助けることなどできませんでした。彼らは獣の餌になってしまったかもしれません。

妹はほとんど意識がありませんでした。震えて歯の根が合わず、食べ物も食べられないまま、とうとう死んでしまいました。暖かい服や食物や飲み物が少しでもあれば生きていられたに違いなのです。でもそんなものはどこまで行ってもえられませんでした。母は雪の上に泣き崩れてもう歩くことができませんでした。ただ妹の亡骸を抱く力は強く、僕が埋めようと言ってもけして離してはくれませんでした。僕は母が凍死するのを黙って見ていることしかできなかったのです。母を助けることは不可能でした。あんなに幼かった可愛い妹があんなにも可哀想な死に

方をしてしまったのです。哀しみが母を殺してしまいました。考えてもみてください、妹にどんな罪があつたのでしょうか。もしあなたにも兄弟やこどもがいたならば想像してみてください。

烈しい憤りが襲う。僕らはこんな目に遭わされ、ただ為されるがままになっっているしかないのでしょうか。

いったい、彼らにはどんな特権があつて僕らをこんなにも不幸にすることが許されているのでしょうか。

「ヨセフ、お茶の時間ですよ。

四時にはヴァイオリンのオスカー先生がいらっしゃる日ですからね。

さあ、ご本をしまつて。一緒にリヴィングにいらっしゃい」

ヨセフは秀でた白皙の額の下にある蒼碧の双眸を伏せて溜息し、皮革装丁本の『善惡の彼岸』を閉じた。同時に閲覧していたロマン・ローラの『ベートーベンの生涯』に名残り惜しそうに眼をやる。

ヴィーナ音楽学院附属学校に通う十二歳の少年だった。見事な寄木細工の書物机を前に坐っていた繻子張りの椅子から立ち上がる。居間に行くとテレビがフランス2を映じていた。三ヶ月ぶりで帰国した父親は純羊毛の生地で作ったイギリス風のスーツを着て、アメリカ合衆国の新聞を広げ、ロシア連邦大統領のKGB時代や日本の円安の特集記事を読

み、父の不在中に兄が買ったドイツ車（メルセデス・ベンツ）の調子を訊きながらキューバ産の葉巻に火を点け、イタリアのコーヒーを啜り、今度は株式市場欄に眼先を移して歎息する。

ヨセフは横目で一瞥して、俗物め、と舌打つ。

「ごきげんよう、坊や。今学期の成績はすこぶるる良かったようだね。最近はどうな研究をしているのかね、我が親愛なる教授殿」

父の顔を見ずにソファに腰を下ろしながら応えた。

「第九の構成について、です」

「ベートーベンだね」

「ええ。」

声樂の入りがとても興味深いですから。人生は悲惨で苦しみに満ちていて人間には芸術がどうしても必要なのです」

父はおかしそうに眼を丸くして微笑んだ。

「これは、これは、小さな厭世哲学者だな。今度ゆっくりおまえの哲理の全てを開陳してほしいものだ」

ヨセフは鼻尖で笑っただけだった。

イスペゴ連合邦ロギアアイランド州。ハデイ河を見下ろす瀟洒な屋敷の二階のベッドの上で上半身を起こし、豊かな秋の風景を眺めていた。

「ニコライ、お薬の時間よ」

母が薬袋と水の入ったコップとを盆に載せて部屋に上がって来た。

「おかあさん、いつか僕も起き上がれるようになるのかな」

母は一瞬、悲しげに表情を曇らせたが、すぐに微笑を作った。

「なるわよ。ダグラス先生も努力すれば必ず報われるっておっしゃって
いたわ」

「早く学校に戻って、皆と一緒に勉強がしたいよ。もう二年もずっとこ
うしているんだ。普通に暮らしたい」

母は何と云う不幸な子だろう、と涙がこぼれそうになった。ほかに幸
せそうな子どもたちがたくさんいるのに。なぜ家の子が。彼の余命は数

ヶ月だった。母は涙を見せまいとして一階のリヴィングに戻ると遺影を見上げて祈った。

彼女の夫は数年前に起こったクレストス教の大規模なテロによる二百数十人の死者のうちの一人であつた。

ルワーダの内戦地に派遣された狭川俠子は強制的に兵士にされた少年や少女らのカウンセリングをしていた。だがアゼン將軍による軍事政権の搾取が烈しく、救援物資もままならぬ状況下、反政府軍が物資の獲得と政府軍の（不正な）食糧補給に少々でも打撃を与えようと、国際支

援やボランティア団体の施設をも襲うようになり、身の安全が保障されず、遂には撤退を余儀なくされた。

彼女は帰国後、自らの手記を元に二十七の物語を綴って秋談英出版から上梓した。

その中にエステーラと云う少女の物語があるので、引用したい。

『……少女は水を汲んで帰って来ました。

水場から家までは一キロ余りあります。しかしこの地方ではこの程度で不平は言えません。川は少なく、窪地にできる湧き水が非常に貴重なものだからです。

家はある合せの物で建てたバラックで、木戸を開けて家に入ると、足

下はそのまま地面でした。家具などないに等しい。エステーラはひびを粘土でふさいだ素焼きの甕に注ぎ、休む間もなく、わずかな麦を臼で挽きます。一ヶ月前に米軍が配給した物資のわずかな残りでした。火を熾し、全部自分でするしかないのです。

母親は病気で一年以上も臥せていましたし、父親は兵士に殺されてしまっていました。弟は余りに幼く、兄は攫われてしまったのです。恐らく少年兵にされたに違いない、彼女はそうおもっていました。

あちこちでそう云う話を聞くからです。少女たちが奴隷同然か、慰み者にされるように。

それも生きていればの話でした。人が殺せなくば生かされない。少年

兵については怖い話を聞かされたことがあったからです。捕らわれた九歳か、十歳くらいのこどもはまず小動物を殺すことから強制されます。いきなり人をナイフで刺すなどできないだろうし、すぐには貴重な銃を任せられないからです。動物が血を流して慄き暴れるのを見て恐ろしくなつて手を引っ込めてしまおうものなら棒で打たれ、「刺せっ！」と脅かされるのです。少年はどうしてよいかわからず、パニック状態になる。この段階で精神的におかしくなってしまう子もいるそうです。言うことを聞かなければ耳を削られる。少年は叫ぶ。血が迸る。掌にあふれる自分の血に烈しいショックを受け、半狂乱になる。追い込まれる。遂に殺す。殺さずば生きられない。異常な状況の中で精神の均衡を失い、その

眼差しは生命を失います。ついには人を殺せるようになるのです。

そんな噂でした。本当かどうか確かめなくとも彼女には充分理解できました。この殺戮の大地ではどんな野蛮も平気で起こりそうだったからです。

エステーラの兄はかつては気弱なこどもでした。生きていないかもしれない。そうおもうと涙があふれ、恐怖に身が震えるのでした。あの優しく大人しい兄がそのような目に遭っているなどと考えるだけで堪えられなかったのです。そんなときはおもわずとも空を見上げ、神様に祈りました。何度祈りを日々重ねても、何の兆しも現れませんでした。そうせずにはいられなかったのです。そうするしかなかったのです。

彼女の状況は絶望的でした。でもそんなことは余分には考えない。考えては生きていられない。考えてはならなかったのです。

エステーラのような少女たちはけして無知ではありませんでした。

「將軍は通過する全ての村を焼き払い、男を殺し、女を凌辱する。自分の権力を護るために殺戮を繰り返す。たとえ何万人の命であろうと平気で奪う。

彼らの快樂を満たすために凄惨なことが行なわれ、多くの人が犠牲にされた」

水場で女たちがよくそんな話を疲れた表情で顔を顰めながら話すと
きがあるからです。情報が少ないながらも民衆の間では流言蜚語も真実

も雑でて色々な話が出るのです。彼女は学校に一度も通ったことがなかったけれども、現実的な知識は持っていました。

民主主義の旗と最新兵器とを掲げて介入したイスペゴ連合邦はクーデターで樹立したアゼンの軍事政権を打倒したものの、電撃的にパイプラインを押さえるほかは無策で、イスペゴ主導で樹立された独立政府はたちまち崩壊し、アゼンが復興、それを旧政権の残党が組織した反乱軍が攻撃し、事態は收拾するどころか、悪くなる一方でした。たちまち内戦状態に戻ったのです。イスペゴ軍がライフラインの復旧と物資の補給とに力を入れていればこれほどまでに反政府軍に協力する者らが現れなかったであろうことは断らかでした。しかしその反政府軍も今や幾つ

もの勢力に分裂しています。そもそもこの国が安定しない理由は独立基盤が脆弱であるからでした。

経済的に自立する蓄積がないからです。それはかつてイスペゴやエウロペアの列強国が白蟻のようにやって来てこの国を食いつぶしてしまつたからなのです。

しかもこの五百年來、武力による侵略を行ない、虐殺略奪を繰り返した戦争犯罪国らは未だかつて罰せられたことがなく、無辜の民のごとくに自分たちをおもい、理性と正義と民主主義との権化であるかのごとく振舞っています。

或る夜、彼女は物音で眼を覚ましました。外に誰かいる。身体が震え

ました。とつさに母を見ます。外界のこと一切を関知せず、ただ苦しげな息を立てているだけでした。数時間前まで空腹を訴えていた弟も今はすやすやと眠っています。彼女はそつと寢床から出ました。もし兵士だったらどうしよう。戸締りなんてあつてなきがごとくです。扉が開きました。暗い闇の中でもエステラの眼は或る程度ものを見ることが出来ます。ぼろぼろの服をまとい、痩せこけて肩が尖った小柄な男が立っていました。襷がけにした帯に銃をかけて背に負っています。兵隊でした。もう逃げられない。しかし不思議なことにその影はどこか空漠としていて幽霊のようで、獐猛な野戦兵の生臭い気配を発していませんでした。

「誰？」

勇気を奮って言葉を出しました。少しの沈黙の後、聞こえた声はかすれてはいるが懐かしいものでした。

「僕だ」

「兄さん？」

「ああ。かあさんは無事か？」

「ああ、本当なの？ 信じられないわ。逃げて来たの？ 生きて戻って来られたのね！」

涙があふれます。兄が生きて帰って来たのです。

「ねえ、おかあさん、おかあさん、起きて、お兄さんよ、戻って来たのよ」

だが母は虚ろに眼を細く開いただけでした。少女は諦めました。弟もまだ起こさない方がよいだろう、そう考えました。

帰ってきた兄は別人のようでした。やつれたせいもありますが、虚ろで無表情、どこか空恐ろしい雰囲気醸していました。何も語ろうとしないのです。

「兄さん、ねえ、今までどうしていたの？ 心配していたのよ。少しでいいから話して。安心させて。ああ、でもきつと疲れているのね？ ごめんなさい。お腹は空いている？ でも食べるものが今はないの。ねえ、兄さん。」

一つだけ教えて。兄さんは兵隊にされたの？」

兄は熾した炉の傍に坐つて黙つたまま、彼女の方を向きませんでした。水を沸かしてブリキのコップに注ぎ、兄に差し出します。何も言わず受け取つて啜り、伏せていた眼を上げてじつとエステーラを見つめる。ぞつとしました。

「たくさん人を殺したよ」

「兄さん」

「兵士になった。いつも前線に立たされた。隠れて敵の兵隊を撃つた。歩けなくなつた友達も殺した」

「そんな」

「仕方なかった。僕らのためにも、彼のためにも」

「辛いおもいをしたのね。かわいそうなお兄さん、とても苦しかったでしょう。兄さんは優しい人だったから。ああ、それなのにそんなに目に遭わされて、さぞつらかったでしょう。いつまでこんな酷いことが続くのかしら。なぜ部族が争い、アゼンのような男がこの国を踏み躪ってられるのかしら」

だが兄は微笑した。

「なぜだとおもう？」

「なぜって、それは」

しかしそれ以上言えませんでした。何か怖かったからです。黙り続けていたエステーラの言葉を待たず（いいえ、最初から待ってなどいな

かったかもしれません）、兄は厳かな口調で自らに応えました。

「平和な国があるからだ。豊かな国があるからだ。繁栄して幸せな国があるからだ。彼らのためには働いても幸せにならない貧しい国がなくっちゃならない。いつも国が乱れて立ち上がれない国がなくっちゃならない。僕らがこんなに苦しんでいるのに平気で笑っていられることもたちが世界中にたくさんいるからなんだ。

イスペゴ連合邦やエウロペア連合の国々やリセヤ連邦やZIPAGがあるから僕らは不幸なんだ」

エステーラは身体の震えを止めることができませんでした。兄の眼差しが闇でも皓々としていたからです』

その後、村は反政府軍に協力した疑惑が持たれ、アゼン將軍の親衛隊によつて焼き払われた。動けない母を連れて行こうとして兄は逃げ遅れ、殺された。エステーラは弟を抱いて逃げた。母と兄とを見捨てて逃げるしかなかった。死ぬよりも辛かった。

漸く逃れ、食物があると云う噂を聞き、人々が飢えて集まった場所に着く。辛うじて形を留めて食ひ繋いでいる村があるにはあつたが、自らを護るのが精一杯で、堅く守りを固めて難民たちを寄せつけなかった。彼女らのような難民たちは次々と集まつたが、集まることで余計状況は厳しくなるばかりだった。

或る夜、難民たちの群れに武装した村人らが襲いかかった。既に抵抗

することもできない人々は次々屠られた。政府軍が飢えた難民が村を襲うと云うデマを流し、武器を貸したのだ。

エステーラは無我夢中で逃げた。大混乱の中でどこをどう行つたのか憶えがない。しかし翌朝、奇跡的に命は助かっていた。弟も生きてはいた。だが衰弱し切つてほとんど意識はなかった。彼女の抱く腕にもはや力が入らない。どこに行くべきか。村は次々と襲われて燃え、人々は自分のことで精一杯だ。足枷のような小さなこどもを負い、慈悲のない兵士に囲まれ、たとえ命辛々逃がれたとしてもそこには食糧がない。水もない。過酷な乾燥した大地があるばかりだ。

「ああ、どうしたらいいの？　神様は私たちに死ねとおっしゃっている

んだわ」

敬虔な少女も遂に叫ばずにはいられなかった。

弟は二日後、凄惨な逃亡生活の中で熱病に罹り、遺骸となってしまう。内乱に生まれ、何の幸せもない生涯だった。いったい、彼は何のため生まれたのか。どんな哲学がそれに答えられるのか。

答えられる哲学が必要であり、答えるべき義務がある。

杏佳は学校から帰ると「ただいま」も言わず、二階にある自分の部屋に上がり、ランドセルを擱いて、ベッドに横たわった。

「ああ、ずっとこのまま寝ていよう。もう何もしたくないわ」

だがテレビが見たくなつて一階のリビング・ルームに行くことにした。階段を下りると階段下の小さなスペースを使つて作られた父のプチ書斎がある。小さな机と小さな棚とスタンド・ライトにノート型パソコンとプリンターだけの簡素なスペースだ。当然、父親は仕事でいなかった。

「ふうん。おとうさんもおかあさんもパソコンがあるし、お姉さんは今度中学生になったら買つてもらつて言つていたわ。わたしだつて欲しいのに。」

パソコンがあればわざわざリビングまで行かなくたって、自分の部

屋で好きな番組が幾らでも見られるし、録画もできる。友達とメールもテレビ電話もできるし、ブログにだって書き込めるわ。そうしなくっちゃ、時代に合わないじゃない。本当にこどもを立派に育てたいなら、そうすべきなのよ。そうやって勉強させなくっちゃいけない、そうでしょう？

もう時代が違うのよ。中学生になるまでなんか、待っていられるわけじゃないじゃない。どうしようもなく古い考えの人たちばかり、どうして、わたしばかりがこんなに不幸なのかしら。

不公平だわ。もっと理解のある、お金持ちの家に生まれていれば全然違う人生だったのよ。神様は本当に不公平だわ」

パソコンのスイッチを入れた。

Y o h o w ! Z I P A G のホームページが立ち上がった。

<http://www.godgive.me.theforceofjudge/>と入力する。しばらく当該のホームページを捜すために空白が続いた。一分が過ぎる。

「あるわけないわよね。

英語も間違っているとおもうわ。当然よ、まだ習っていないもの。これだけでできれば大したもんだわ。それに本当なら最初の g は大文字の G でなくちゃ、失礼なのよね。それぐらいわわわっているわ」

彼女はリビングに行ってテレビを観た。お笑い番組を見て大声で笑う。空腹を覚え、キッチンに向かって声を上げた。

「おかあさん、今日のおやつはないの？」

その頃、漸くプチ書齋のパソコンにホームページが立ち上がり、ディスプレイには次の文字が映った。

最高裁判員委嘱状

貴下に最高裁判員の職を委嘱する

なお、委嘱の期間は適宜必要を以て終了とする

究極真実奥義サティア

杏佳の家の前に大きなピンク色のキャデラックが停まった。プレス

リーが降りて来そうな贅沢なクラシック・カーだ。帽子を被った白手袋の運転手の後に坐っていた男が降りて葉巻を踏み消す。ムートンのライニングをつけたコートは袖を通さず肩にかけ、ストライプの入ったフライングの濃紺スーツ、白い中折れの帽子、サングラスをかけた昔のギャング風だ。

悠々と歩いて段を上がり、呼び鈴を鳴らした。

冷たい残酷な雨だった。ジャコは少しでも凌げるように人々の集団から離れ、森の奥へと入って行く。より大きくて葉の繁った木を捜した。

疲労と空腹とで意識は朦朧としている。監視は珍しくこの逸脱行為に気がついていないらしい。

「なぜだろう。懐かしい感じがする。お伽噺を読んでもらった昔の、あの感じだ。少しいい気分がする。たぶん、この木の香りのせいかな」

ぼんやりそうおもった。汚れ破れやつれ痩せ細った彼は惹かれるように進んだ。漸く大きな繁った木が見つかった。何と云う種類か見分けがつかなかった。初めて見るような木だった。幹に大きな洞がある。

「すごいや。これは最高だ」

それは彼のおもう最高を遙かに超えていた。木の洞は深く、暗くて初めは気がつかなかったが、内装に金糸の刺繍のある深紅の絹が張られ、

足下は深いベルベル絨緞だった。飲み物の瓶やきれいなグラスもあった。小さなマホガニーの卓が置かれている。

「こんな莫迦な。こんなところに。」

それとも誰かここに隠れて住んでいるのか。いや、そんな。考えられない」

早く出た方がよい。そう直感した。だが遅過ぎたようであつた。出ようとしたとき、洞の外に二人の人間の腰から下が見えた。とんでもない大男だ。監視に見つかったのか、最初はそうおもつた。違う。この氷雨降る荒れた山地で二人ともフロック・コートを羽織り、上品な礼装姿であつた。

ジャコは恐る恐る出るしかなかった。

「お時間でございます。お迎えに上がりました」

口髭をチックで固めた大男がシルクハットに手をあててお辞儀をし
ながら言った。

「さあ、お乗り物のご用意もできておりますので、最高裁判員殿におか
れましては速やかにお越し願いたく存じます」

髭のない大男も慇懃にそう言った。

ジャコは眩暈を感じた。

バイオリンのレッスンを終えてヨセフは独り、音楽室で半ば無意識の瞑想に耽りながらピアノを弾いていた。

小さな照明を灯しているだけで部屋は薄暗い。

静かな夜想曲だった。

「あらゆる思想や哲学は全く批判されることのない諸々の考概を無条件に前提として成立している。そうしなければ僕らは何一つ結論に至れないばかりか、思考そのものが運用できない。だがこの批判自体が無条件な前提の下に成り立っている。批判されない無条件な前提がいけないと云う考概が前提として無条件に是認され、その前提の上にこの批判が成り立っているからだ。しかしそれを是認しなければそもそもこの批判

が成り立たない。ところが是認すればそのテーゼに相反し、自家撞着する。

だが自家撞着であると云う批判を成り立たせるものも批判されることのない様々な前提に拠って成り立っているのだ。

僕らはこれを逃れられない。僕らはそうではない思考を想像することさえできない。

全ては絡繰りのようなものだ。構造があるばかりで本質がない。虚しい、空ろで廃墟のような構築物だ」

そのとき扉が開いた。母だった。

「ヨセフ、お迎えですよ」

「お迎え？ それは何ですか、おかあさん」

だが母の表情はぼんやりしていて、何の答も引き出せそうになかった。

「いったい、どうしたんです、おかあさん。変ですよ」

母の後ろに父もいた。

「ヨセフ、お迎えをお待たせしては失礼じゃないか」

しかしその叱りの言葉にも何の力も入っていなかった。

「しかし、おとうさん、僕はどこへ行くんですか」

二人とも何の返事もしなかった。

まるで夢の中でもがくような気分になってきた。

「お迎えって、何ですか！」

ヨセフは大声を上げて窓に走り寄った。

窓の下、館の正面に咄々とランプを灯した壮麗な馬車が停まっている。御者は大きなカフスを附けた細身の色鮮やかなシルクのジユストコルを身に着け、カールした銀色の鬘の上に飾りつきの大きな帽子を被っていた。

エステーラは遺骸を埋めたところで力尽きた。土の上に歎き伏す。

『ああ、もう私も死ぬんだわ。私たちがこんなに苦しんで、絶望して、悲しみで一杯になって、虚しく惨めに死んで行くのに、アゼンは食べて

飲んで楽しんで、私たちを踏み躪って虐殺し、笑っているんだわ。反政
府軍もアゼンに反対しながら同じことを繰り返し、女を辱めて殺し、男
の子をさらって前線に立たせ、罪のない村人を殺して食糧を略奪し、酒
を飲んで笑って暮らしている。同じ国の人間なのに、同じ人間のはずな
のに！

本当にお兄さんの言ったとおりだわ。それでも外国では幸せなことも
たちは笑っているのよ』

薄れ行く意識の中で彼女は傍に誰かがいることに気がついた。夜の闇
がそこだけぼんやりと明るくなっている。その足は革のサンダルを履い
ていた。

「誰？」

「エステーラ、来なさい。あなたは扱ばれたのです」

「誰なの？ 扱ばれたって、何？」

見上げるとそこには豊かな髪と鬚を蓄えた青年が立っていた。

「神様？ あなたは神様なの？ ああ、私は天国へ行くのね。せめて天

国には行けるのね。

皆にもそこで会えるかしら」

白く長いキトンを着た青年は微笑んだ。

「エステーラ、哀しむのは止めなさい。

今泣く者は幸いなるかな。その報いは天の国にある」

しかしエステーラは泣いた。

「ああ、神様、ありがとうございます。私は幸せです」

青年は身をかがめ、今度こそ真に力尽きて意識を失った少女を抱き上げて言った。

「そして今笑える者は災いなるかな」

深い黄昏だった。

暗い、漆黒の闇が周囲を縁取り、残照とその照らすところだけが異様な濃さの黄金色に生々しく燃えていた。雲もその一部を炉のように燃や

している。

憂鬱な面持ちのその頬を照らされ、ニコライは今日もベッドから上半身を起こし、窓の外の風景を熱を帯びた遙かな眼差しで眺めていた。部屋は暗くなっている。

「今日は特に凄いな。

牽き込まれそうだ。意識の縛めが解かれ、彼方へ惹かれるような、そんな感じだ。まるでこの世の終わりか、冥界の光景のようだ」

太陽は見る見る沈み、イモリの背のような黒が次第に全てを圧して行く。その黒は底が深く、どこかまどろみのような奥深いものがあつた。風が過ぎる。枝が揺れた。ふと背中に怖気が走る。

「今、死を感じた。」

僕は今日、もしかしたら死ぬのだろうか。このまま意識が永遠に失われてしまい、彼方の世界へと牽き込まれてしまうのだろうか。

そうであつても少しもおかしくはない。生々しくも鮮やかなこの残照の景色を眺めていると」

そのとき部屋の扉が開いた。ニコライは烈しい愕きを感じたが、すぐに自制した。違う。おかあさんだよ。もう薬の時間なんだ。そうおもつてゆつくり扉の方を振り返った。

一人の男が部屋の暗がりには立っていた。黄昏に照らされた足だけがくつきりと見えている。よく眼を凝らせばそれは闇のように漆黒の長衣を

羽織った細く背の高い男だった。暗がりには溶け込むような黒い鍰広の大きな帽子を被っている。ニコライはまたも烈しく動揺した。

「誰？ どうやって入って来たの？」

死神のような男は厳かな声で応えた。

「お迎えですよ」

ニコライは心臓が止まりそうだった。そうか、やっぱり僕は。

「そら、ご覧なさい。あちらに閣下のお迎えが着いております」

指差す方に首を廻す。

それは窓の外だった。穹だった。

「あっ！」

ニコライは驚愕の声を上げた。

黄金の雲の群れが尾を曳きながら天上から降りて来ていた。雲の上には金色の輪光を放つ数多の聖人たちが乗っていた。さらにその周囲にはかしずくかのように控える翼の生えた少年や少女たちがいる。黄金の装甲に身を固め、炎となつて輝く流旗を持った獅子や壮麗な白い鎧に包まれた軍馬や七色に移ろ^{あき}う鱗の龍や燦然たる穂尖の槍と楯とを持った驚や像や牛、光芒を放つ戦車に誇らしげに立っていた。

大きな翼の龍が白く爽らかに燦めいてその周りを自由に楽しげに飛んでいる。

ニコライは恍惚とし、死への畏怖を忘れた。

「ふうん」

杏佳はしげしげと前列で運転手の隣に坐る男の、中折れ帽を被った後頭部を眺めた。

「おかあさんの知り合いにあなたみたいな人がいたなんて知らなかったわ」

そして心地よさげにキャデラックの眩いくらい白いシートを掌で撫でた。

「素敵な手触りね」

「子羊の革だ。非常に繊細で柔らかい。

身に着けるにはいいが、椅子に加工するにはちよつと不向きな素材ですね。一年に二回張り替えている」

「贅沢ね」

「何しろ、VIP専用だからな。最高のものを載せるには最高の器さ。莊嚴しなくっちゃな。惜しまず贅を尽くすのさ」

杏佳の鼻が膨らみ、自然と笑みが泛んだ。

「今日は私がそのVIPと云うわけね」

「そのとおりさ、閣下」

「わるいけど、その呼び方は止めてくれない。何か鬚が生えそうだわ」

「OK」

車窓から見える景色は次第に古い街並みとなっていた。柔らかな車のサスペンション越しにも路面の凹凸が感じられる。石畳に変わっている。街を行き交うのは大人の男女ばかりで全ての表情が憂いを含んでいるように見える。街は永遠に灰色の霧雨に蓋われていたかのように組石造の建築物の石の一つ一つに風水の憂悶が染みついて深く繊細で、複雑な変遷を示す掬えがたく微妙な、逸品の茶陶の景色のような言語に尽くしがたい味わいを醸していた。

「変なところね。こんな場所があったのかしら。ここはどこなの？」

「ラヴィリユントス。智慧の迷宮と言うんだ」

「何、それ。どう云う意味なの？」

「意味なんかない。智慧では理解できないことだ。まあ、路傍の石だともおもっていれば間違いない」

「余計わかんないわよ。でも随分、遠いのね。おかあさんは今まで私がいこんなに遠くに独りで行くのを赦したことはないわ。」

あと、どれくらいかかるの？」

「もう少しだ。心配は要らない。帰るときは同じ場所の同じ時刻に戻れる。家族は何も気がつかず、心配もしない」

「何言っているんだかわからないよ。それって、つまり」

「十二月二十五日の午後四時に家に帰れるってことさ」

「何言っているのよ、じゃあ、今何時なわけ？」

「さあ。無窮の時間の中では時刻など意味がない。そうら、もうすぐ叡智の限界、次が天叡の城砦イデアンブルグだ」

「ねえ、わたし、帰りたくなったわ」

「心配ない。閣下に褒授される栄誉は今まで人間に及んだことのない最高の栄光だ」

城砦の門は驚異であつた。

ジャコが乗せられた車は幌型で、鍍金されたカンテラ式のランプが操

縦席の左と助手席の右との眼の高さのところについた旧式のもの、彼はそのクラシカルなベンチ・シートからおもわず身を乗り出さずにいられない。

烈しい不安と感歎と絶望と恐怖とに震えた。今まで懼れのため、一言も口が利けなかったが、遂に切れた。

「いったい、僕はどうされるんですか。どこへ行くのですか」

それはまるで死に向かう人間の怯えのようであった。

口髭の大男が応えた。

「何も心配なさらないください。閣下は最高のもてなしを受けます。ましてや身の安全など慮る必要は一切ございません。どうか、ご安心を」

「けれど、僕にはさっぱりわからない。これがどう云うことなのか」

近づくとも顎を突き上げなければ見上げられない。砦の壁は渋い色の玄武岩で組み上げられているが、門の左右の胸壁はラピスラズリ色であり、邸のように大きな濃卵黄色の旗が靡き、旗には左右に立ち上がった獅子、中央に向日葵のような太陽の象徴が織られていた。

門はアーチ型で全体が深紅、金色の唐草模様が万遍なく蔽い、アーチの頂点には巨大な扁額があり、そこには解読不能の文字が雄渾な筆致で縦書きに記されている。扁額は絡みつく龍神で装飾されていた。

門に入ると壁の厚さを知らしめるかのごとき大アーチ道となり、下は粗い石敷に変わって外の石敷とは年代が異なることが感じられた。門衛

らしき者はいない。中では篝火が高いところ低いところと幾百箇所にも燃え、通り抜けるには人の足で二百歩余り進まなければならない。壮大な洞窟のようでもあり、また太陽の差さない一つの市街のようでもある。なぜならそこには高層住宅のように内壁に無数の窓や欄干があり、階段があり、胸壁すらもあつたからである。かなり上の方でも多くの人々が動いているのがわかった。

城砦とは言え、内外への往来は自由のようである。しかし交通する人は少なく、乗り物も見られない。ジャコの手車とその前方に小さく見えるピンク色の車だけであつた。

「イデアンブルグは正義の城砦にして聖都です。東西南北の四方を一辺の長さが千kmの城壁で護られ、その威容は秩序あり強くもある正方形を倣しています。

もしそれを俯瞰するならば人の世にはありえないような壮観に驚愕されるでしょう。畏怖すらお覚えになるでしょう。

見渡す限り広がる都市は統一されています。五階建以上の建物が一般に禁じられ、全ての薨が整然と、風の大洋のように平らかに並んでいます。しかしながら寺院についての規制は全くありません。ご覧なさい。あれが聖アガルタ寺院ですが、海に泛ぶ白鯨のように身廊を聳えさせて

います。尖塔に至つては天にも届かぬばかりでしょう。

しかし最大のものは何と申しまでも、天叡の城です。それこそがこの聖なる聖砦の心臓であり、まさしく奥義なのです。これを見ては何人であろうとも崇高の念に打たれないと云うことはないであります。まさしく雲を従え、尖塔の屋根や高層部の薨に雪をまとい、靄霞を裳裾に靡かせ、山脈のごとく燦然たる偉容を聳えさせています。その光輝を見てはいかようなる言葉もその意義を失うでしょう。實在する眞実に對していかに言葉や考概が虚しいかを知らしめすでしょう」

「まさしく驚嘆すべきことばかりだ。色々なことを伺つたが驚かないと云うことが一つもない」

ヨセフはそう言いながら彼にイデアンブルグについて説明する大男を見やった。赤く長い髪と赤い顎鬚とを編み、革製の鎧を身に着け、まるで古代蛮族の族長のようだ。サテン地のクッションの置かれた贅沢な馬車の席に坐っているのがいかにも不釣り合いである。しかも御者はロココ時代の貴族のような格好なのだ。アンバランスである。

「是非一度は観てみたいものです。とは言え、これほど広い都市です。僕はそこへも立ち寄ることができるのですか。また行くとすればどれほど時間がかかりますか」

「立ち寄るも何も、閣下におかれましては明日にもそこへ赴いて戴きます。時間もそれほどは要しません。しかしながら先ずは仮の宿泊所へ入

って戴きます。そこでしばし休憩してください。身支度も改めて戴きます都合もございます」

歎息し、そして言った。

「いったい、これはどう云うことだろう。僕には皆目わからない。しかし強く関心を惹かれる。何かが僕の魂に適合するのだ。僕はこの世界を自分が望んでいた世界のように感じ、不安に襲われながらも引き返したいと云う気持ちにならない。

ああ、それに忘れられないね。あのラヴィリユントスと云う都市では僕はまるで自分の胸の奥の淵を覗くかのようにだった。

なぜならば僕らが生きる現実には聞くもの見るもの全てに抛りどこ

ろがない。与えられた感覚があるばかりでその本質が見極められない。それは現象であるばかりで一向につかめない。捉えられない。読み取れない。脳裏に映じて砂丘の砂のように目的もなく、流れ行くばかりだ。乾いた無味な物質性があるのみだ。理性を以て何か潤いを求めても霧ばかりで手ごたえもなく、上下を分かつこともできない場所に建物の基礎を確立させようとするかのおもいしか残らない。

これら現象は何なのか。解し究めようと欲し、表層の一枚一枚を剥いて迫つてもラツキョウのように何も残らず、あるものと言えただそれをそうだとおもい込んでいるおもいばかりだ。

結局、全ては人間の一途なおもい込みでしかない。確乎たる根拠はな

い。人間の魂にあつて眞実か否かを支える価値基準も全く慣習的で、任意のものだ。言わば無作為に定められた路程標だ。ただ感情だけによつて支えられている。動物的で、無根拠だ。

だが現実には常に選択を迫る。僕らは根拠がなくとも僕らの直観として現に映えているままにこの現実を生きなければならない。畢竟、そう強いられているんだ。それしか許されていない。

本質性はなく、ただ実存だけがある。

全て考概は純粹な論理で晰らかにされ、了解されたものではない。ただ感覚に泥んで磨り合わせがなされ、納得と云う感覚に至ったものでしかない。理性に拠つて睿らかな理解がなされているとおもわれているよ

うなことも納得と云う心的な現象に過ぎないのが実態だ。

それならそれでそんなことなど気がつかず、何も考えずにすめばよいのに、僕らはそれを気がつかずにはいられない。気がつかせさせられている。そう考える生き物としてしか生きられない。僕らはいつも焦燥をせざるを得ない構造のうちにある。

ラヴィリユントスとはそう云う土地だった。渴き求め疲れても方角すら見出せない者が亡霊のようにさ迷う憂鬱の街だった。焦慮の街だ。

僕は今日、様々なことを聞かされ、見せられ、知らされた。新たな知識と見解とを獲得した。だがそれが何であろうか。

幾ら問うてもあなたは僕がどこにいるか、どこへ向かおうとしている

か、何をさせられようとしているか、一切答えない」

男は微笑んだ。

「おこがましいことを言うようですが、人生とは只管ひたすらそう云うものではないでしょうか。

さあ、どうか今はしっかりとおつかまりあれ。この先には城砦都市の内部を縦横に貫く専用高速路があります。そこでは全てが思考のように早く走ります」

眼下に広がる城砦都市は信じがたい大きさに広がっていた。それは地

平線の彼方まで続いている。地平線はどこまでもどこまでもあり続け、日の傾きかけた穹までもあり、それでもまだ終わっていないかった。すなわちここは地球のように球体ではないのである。また空気によって遠景がぼやけることもないのである。涯がないという光景を初めて見るのだ。ニコライは驚嘆の声を上げた。

「これが本当に現実の世界ですか。」

本当に僕は死んだのではないのですか」

黒い男は応えた。

「確かにこれは閣下の言うような意味についての現実ではありません。しかし実在するのです。むしろこれこそが実在です。閣下は今、至高の

聖城砦都市イデアンプルグをご覧になっておられるのです。

真央に山脈のごとくにあるのが天叡の城です。あれこそがこれからお連れいたします目的の場所なのです。

閣下、よくご覧になっておいてください。近くに行けば到底見渡せませんから。

天叡の城は城と言っても大聖堂をも兼ね、聖域として森羅万象の崇敬の的となっております。なぜならばそこに住まう主こそは宇宙の膨張をも推し進められるほどの力を持ち、なおかつ崇高にして聖の聖なるお方だからです」

聖衆を満載して光り輝く雲は急降下を始めた。

「うわあ」

ニコライはおもわずつかまえどころのない雲にしがみつこうとした。そうせずにいられない。見る見るイデアンブルグが迫る。涯のない滑走路のような路が街の中枢を貫いているのが視認できた。降下角度を緩め、その路に旅客機のごとく着陸しようとする動きを見せる。しかし滑走路のごとくほかに何もない路ではない。幾十台もの乗り物が凄いスピードで疾駆している。声を上げずにはいられない。

衝撃も衝突もなく、雲は路に着陸し、そのまま滑るように路を猛烈な速度で走る。その加速で後に引かれ、腰が泛ぶ。

黒衣の男が乾いた笑い声で肩を震わせた。

「失礼いたしました。」

先ほどまでの閣下は御身の死を覚悟されておられるかのようにお見受けいたしましたものですから」

ニコライは赤面した。

「そして頬を赤らめになってさえおられます。本当に生を諦めた人であるならば、いったい、何を恥ずかしくおもうことがあるでしょうか。」

閣下は間違いなく生きようとされております。生を捨てることは諸細胞がなかなか許さぬものなのです。

ああ、自然の摂理とは何と真実でありましょうか。閣下、私はいつも感謝し、その現実的な **FORCE** に感銘するのです」

遙か遠くに黄昏を浴びて濃い黄金に燃える山のごとき偉容が見えていた。

エステーラは気がつくと輿に乗せられていた。

「ここは」

そこは壮麗な白い建物の前で、四人の男たちに担がれ、輝く大理石の階段を上がるところであつた。

「これが天国。

ああ、死んだらもう意識はないと言う人もいたけれども、やはり違う

んだわ。私も信仰していたけれど、少し怖かった。この意識が永遠になくなってしまふなんて想像もできなかったもの。生まれてからずっと私はあり続けていたのに、それがなくなってしまうなんて、考えただけでも物凄く怖かった。ああ、でもよかった。そんなことはないんだわ」

隣を見るとあの青年がつき添うように階段を上がっていた。

「眼が覚めたようですね」

「あら、私がこんなところに乗せられて、神様が歩いていらっしやるなんて。どうか降ろしてください。そして、どうぞ神様、お乗りください」

青年は笑った。

「閣下、私は神ではありません」

「閣下ですつて。 閣下？ 閣下つて何でしょうか」

「それについては然るべき者がご説明申し上げます。なにとぞごゆっくりお乗り遊ばしてください。私はお迎えの榮譽に預かりました高等事務次官のナガと申します。

どうか心お静かに」

「だってここは天国じゃないの、天国じゃないんですか」

エステーラの表情が急に悲愴さを帯びた。

ナガは再び快活に笑った。

「ここはイデアンブルグの神聖迎賓館です。お部屋までご案内申し上げます」

「イデアンブルグって、いったい」

しかしそれらを問い尽くす猶予はなかった。輿はうやうやしく下げられ、ナガが丁重な礼をして手を差し出す。

そこは真言の彫られた金の手すりのある階段を上がり切ったところだった。正面には檜の木材を磨き上げた大きな扉があった。扉は開いており、鮮やかな赤に金色の飾り紐と青い帽子、白い手袋に黒い鞄の長剣を佩いた門衛四人が立っている。最敬礼を受けながらエステーラは入った。エントラスである。

「うわあ」

彼女は簡単の声を上げた。おもわず退いてしまう。

その豪壮なことと言ったら喩えようがなかった。砂まみれ、疲れ果てて幾日も野で暮らし、餓え渴いていた彼女がその場にいることがいかに奇妙なことであつたか。

葉飾りをつけた縞目模様の大理石の円柱が所々に装飾的なアーチを造り、床の幾何学模様は全て貴石によるモザイク絵であつた。アポロンが豎琴を弾き、デュオニソスが杯を掲げ、マイナーズらが踊っている図柄だ。それに組み合わせて光輪の中で炎舞するシヴァ神やガルーダ天、クジャク天などの図がある。

家具は嵌木細工や色大理石や古代の陶器や蒔絵や漆細工などであつた。シルクで織られた深い絨緞が眩いばかりである。

「では、閣下、私はここまででございます。長旅、お疲れ様でございます。この後は吟味され、専任された執事や侍女がご案内します。

ではこれにて。幸多きことをお祈り申し上げます」

微笑とともに外の階段を下りその姿は見えなくなった。

執事が現れ、辞儀とともに名乗り、侍女を紹介したが、一度に二十人もの女性の名を憶えられるわけがなかった。

「先ずは湯浴み室へお出ください。お着替えの後、お食事を運びます。お食事は補佐官と秘書とご一緒にご用意させて戴いております」

「だけど、いったい、これは」

そのとき龍の香炉が運ばれ、芳しい馨りで彼女の身体を撫でた。執事

が何かを口ごもるように唱えると侍女らが高らかに美しい和声を做して讃美の言葉を謳った。それは胸の奥を和らげ、広がりの感覚を与え、自分が深く肯定されたことを強く確信させるものである。烈しい感動のような、澄み渡った恍惚の光が胸中から光芒した。

「偉大なる、択ばれたるお方に讃えあれ、永遠の栄光あれ、全てはサテイアの御名の下、しかあれし」

執事が最後に明瞭にそう唱えたと謳いは終わった。

エステーラはわけもわからず、あ然として問うこともかなわず、なすがままされるがままに厳かな襷をつけたペプロス（ただし毛織ではなく縐子のもの）を着用した侍女らにかしずかれ、分厚い絨緞とタペストリ

―の大回廊を抜け、幾つかの部屋、通廊を過ぎ、瀟洒な装飾が彫られ、樹木のように蔦を絡ませてうねる小さなアーチをくぐり、浴場の入口に着いた。入口には儀式用の長いキトンを装った衛兵が黄金の矛を握って毅然と立っている。

その誇らかな様子を見ると、自分の心にも矜持が湧くのであった。そのときちょうど一人の少女が出て来た。驕慢な古代神のように高らかな面持ちを露わに、錦織のガウンにくるまれ、やはり侍女らしき多数の乙女たちにかしずかれていた。違いと言えば、向こうの女たちが皆クリノリン・スタイルのシルク・ドレスを着ていて眩いほど華美であると言ふことだけであつた。

エステーラはその少女の得意げな、生意気な表情を見ると烈しい不快を感じずにはいられなかった。二人は一瞬、眼を合わせたが、エステーラは少女がこちらの感情を素早く読み取ってあからさまな嫌悪の表情を表わし、顔を背けるとおもわずとも双眼が厳しく細まるのを止められなかった。

『彼女も私のようにどこから連れて来られた子なのかしら。ナガのような聖なるお方が憐れんで救ってくれた人なのかしら。でも全然違うわ』

檜で組まれた暖かな脱衣所を通り、大理石の円柱に支えられた大アーチをくぐる。

風呂は蒸し風呂で、湖のように広い温水と冷水の浴槽とがあつた。あちこちで香りのよい木が薫じられている。天井から円柱へ、そして壁面から床まで全てが鮮やかなモザイクと彫刻とで装飾され、濛々たる湯気に向こうで巨怪な幻影のような一大世界を做していた。

湯船にゆつくり浸されてから引き上げられ、一粒一粒が燦めいている清らかな塩で身体を優しく擦られ、浄められる。

香り高い杉木にふんわりとした綿のタオルを敷いたベッドに載せられ、オリーブと月桂樹とから作られた石鹸が泡立てられ、侍女らの柔らかな指を以て身体を洗われた。高雅な成分が肌から内部に磨り込まれ、肉に泥んで浸透する。

素晴らしい香油を塗られて揉まれ、清浄なお湯で清められ、強い香水を噴霧され、様々な香木を焚き込めて匂いをなじませた清潔な衣を着せられ、自分は神々しいほど荘厳されている、そう爽らかに感じた。

あらゆる思考の経緯を超越し、一足飛びに一切を凌駕して直観が何の根拠も全く必要としないまでに強くエステーラを捉え、全てを剥奪し、躍るような真新しい生命を与えた。まさしく自分は扱われ、肯んぜられて今ここにいるのだと。一切の疑念を払拭してそれが磨り込まれた。彼女は了解し、納得した。考概とはこのような源をして構築されるのである。

まるで過去は嘘のようにおもえた。

杏佳は興で担がれ、階段を上り、五階にある部屋へ連れられる。ふかふかした大きなクッションの上に下ろされ、着替えをさせられた。そのように丁重に扱われることに深い満足を覚え、触感を堪能しながら先ほどの湯浴み室での快さをおもい返し、反芻する。

「素晴らしいわね。本当に。今までの暮らしが間違った、悪い夢のようだわ。」

「これこそが本当の自分だったんだと云う気がする」

彼女は銀器に載せられた立派な食事が次々運ばれるのをうつとりと

眺めた。部屋は高いところから吊るされた緞帳のようなカーテンと細密な模様の絨緞と深い艶を湛えた嵌め木細工の家具と繻子で輝くソファやクッションで高貴な薫りを漂わせている。奥には天蓋つきのベッドのある寝室があり、そこもまた王侯のためのような部屋であつた。

ノックの音がし、執事がすかさず扉を開る。颯爽としたスーツ姿に椿油でオールバックにした青年が現れた。執事が告げる。

「閣下、秘書のヒューレー殿にございます」

杏佳はわざと唇を尖らせ、簡単には満足しないわよと云う表情を作ってみせる。

「ふうん、もっと凄い人が来るのかとおもっていたわ。まるでエリー

ト・サラリーマンね」

ヒューレーは朱色の唇で美しく微笑した。

「私は実務の人間ですから。閣下におかれてはご機嫌麗しく、誠に慶賀の極みでございます。さて、早速でございますが、間もなく、閣下専属の補佐官でありますエイドスがこちらへ参ります。食事をしながら簡単に今後の打ち合わせをさせて戴きたいのですが宜しいでしょうか」

「結構よ。仕方ないことね。

私にはとても立派な使命があるようだから。どうぞそのようにしていいわ」

三人は華やかな燭台と眩いナプキンとの席に着いた。湯気を上げる去

勢された若鶏のトリュフ詰め蒸し焼きなど、贅沢な料理を囲んで食事を始める。

エイドスは櫛目の通った髪を肩まで垂らし、口髭を整えた思慮深い青い眸の青年だった。彼が言う。

「閣下の調査研究機関アンズ・アカデミアは調査部及び研究部で構成され、既に人選も終わっています。調査部は対象の素行及び関係する歴史を調べ上げ、研究部は調査結果を分析し、その質を解析して適用すべき処置をご進言いたします」

ヒューレーは笑った。

「エイドス、君は相変わらずだな。閣下にはまだ一切レクチャーしてい

ないのだ。いきなりそんな話にしても戸惑われるばかりだ。

スケジュールからお話しましょう。先ずは明日、眼の前にあります天叡の城に赴いて戴き、城主である聖サティアにご面会して戴きます。そして今回の任務に関する委嘱状を拝受し、その後は所定のお仕事に取り組んで戴きます。今はこんなところまでしかお話できません。

しかし閣下、あなたは扱ばれて天の行なうべき要職に就かれたのです。詳細は天叡の城で説明されるまで一切言えませんが、どうかご了承ください。そして閣下の委嘱される任務は非常に重要なものではありませんが、我々が全力を尽くしてご協力申し上げますので、なにとぞ心安くしていただくようお願い申し上げます」

杏佳は緊張を感じたが、敢えて鷹揚に微笑してみせる。

「ええ、わかったわ。何も心配なんかしていないわよ。ともかくも明日、お城に行けば何もかもがわかるのね。楽しみにしているわ。

さあ、何を着て行こうかしら。あなた方は私のためにどんな素敵なお洋服を用意してくれているの？　これからそれが見たいわ。いいかしら？」

ヒューレーが言った。

「もちろんですとも。

しかし閣下、着衣は厳粛な規程によりしかるべく定められたものでありますから、必ずしも閣下のご希望に沿うとはお約束できませんが」

「いいわ。それも仕方ないことね。扱ばれたんだもの」

「素晴らしいお言葉です」

「ねえ、それよりさつきね、下で侍女に囲まれたみすばらしい嫌な感じの女の子を見たんだけど、彼女も私と同じなわけ？」

「おもうに閣下がご覧になられた方は間違いなく仰るとおりのお方かと存じます」

「ふうん」

杏佳はまたも唇を尖らせた。

「ご不満ですか」

その面持ちが面白がっているかのように感じられたので、逆襲したく

なる。

「別に。ねえ、扱ばれる理由を訊いても、たぶん、あなたたちには答えられないんでしょうね」

黙っていたエイドスが静かに言った。

「そう、ご察しのとおりです。我々は一切答えるべき答と云うものを持つておりません」

杏佳は、何よ、おもわせ振りに、と心中難じ、無視するように話題を転じる。

「ほかにどんな人がいるの。それともこども二人だけ？」

ヒューレーがやや難しい顔で応えた。

「半分はYES、半分がNOです。こどもたちだけですが、お二人ではありません」

「ほかにいるのね」

「はい。そうです」

「どんな子？」

「ほかに男のお子様が三人いらっしゃいます」

杏佳は相手が困ることを予想して言った。

「会ってみたいわ」

ところがヒューレーの応えがあっさりしたものだったので落胆した。

「どうか御意のままに。」

早速、連絡を取りましょう。ほかの四人のお方のうち、お一人の方のお部屋はすぐ近くですから」

きつとこう云う事態を想定していたんだわ、そうおもうと会いたいと云う気持ちは次第になくなって行くのであった。

ジャコはご馳走に眼を丸くしていた。生存への意志がこの機会を逃すまいと渴きと飢えとを訴えるのだが、喉がおもうように食べ物を通してくれない。事態がどうにも了承できないのだ。湯上りのハイな気分は早くも失せかけていた。

「なぜ僕があのような、山のような見たこともないお城に呼ばれるのか
わからないよ。」

そうさ、この街が天叡の城砦ですよと言われても全く何もわからない。
天叡の城砦と云う名称なのはわかる。実物を指されてその名がこれこれ
と言われればわかることはわかるさ。しかしそれでは何もわかったこと
にはならない。ただ、そうか、と頷いて一応の了解をする、それまでの
ことでしかない」

ウェーブのかかった鬘を被り、背中の辺りでリボンで結び、太った、
しかし足が細くぴったりにしたズボンを穿いた男、それが補佐官のルネだ
った。

「そのとおり。そのとおり。閣下は聡明でいらつしやる。叡かな智をお持ちでいらつしやる。」

そして時がくればやがてそれにも慣れ、どこからか理解の芽が生えてくる。芽が出れば光を浴びて悦び、心が安らぐ。それが理解です。

いやいや、時はそんなに遠くではございません。明日です。朝に天叡の城で聖なる暁の光を浴びれば」

ノックの音がした。

寡黙な秘書のイマヌエルが立ち上がった。痩せた顔色の悪い男で神父のような黒い服を着ている。

「どうやらお客様ようです。行って見てまいりましょう」

すぐに彼は戻って来た。

「閣下、同じく扱われたお方が閣下を表敬訪問したいといらっしゃっております。

いかがいたしましたでしょうか」

ジャコは眉を顰めたが、

「ああ、構わないよ。

僕も色々訊きたい。

イマヌエルさん、悪いけど、案内して上げてくれないかな」

「畏まりました」

すぐに騒々しい音と二人の男を従えた女の子がやって来た。

男の一人がヒューレーと名乗り、言った。

「こちらは我らのお仕えします最高裁判員、杏佳閣下です。特別のお志ありまして同じく最高裁判員でありますジャコ閣下にご挨拶に伺いました」

イマヌエルも慇懃な挨拶で返す。

待ち切れないように女の子がジャコに向かって何かを捲くし立て始めた。笑っているようなので怒っているのではないと推測されたが、剣幕は怒っているかのような勢いであった。ジャコは言葉がわからないので、戸惑ってルネを見上げる。その様子を見て急に女の子は不機嫌になり、今度は本当に怒ってヒューレーに何か喚き始めた。

「我らが杏佳閣下は」

ヒューレーがすまなそうに言った。

「言語が同じでないことを非常に遺憾におもっておられます。そう云うわけで、不肖このヒューレーが通訳をさせて戴きます。

よろしいですか、ジャコ閣下」

「構わないよ、ヒューレーさん。どうぞ、何でも言ってください」

「ありがとうございます。ジャコ閣下は寛容でいらつしやる。

では」

そう言つてヒューレーは杏佳の方を見た。彼女が再び捲くし立てる。

「我らが閣下は、ジャコ閣下がどちらからお出でになったか訊いておら

れます」

「僕は」

ジャコの双眸が哀しみを帯びる。

「僕はマドニケの山地を歩いていました。そして迎えの人が来て、ここでも丁寧によくしてもらいました。僕はそのとき凄く酷い惨めな状態にあったのです。」

僕が暮らしていたのはマドニケではありません。僕はプリスと云う村にいました」

杏佳が通訳するヒューレーを激しくさえぎって何か言った。

「杏佳閣下は、プリスとはいずこであるか伺っております」

「ああ、あんな悲劇のあつた村でも知られていないんだね。世の中にこんな酷いことがあつていいものかとおもうような悲劇のあつた村であつても外国の人にはわからないものなんですね。

プリスはコシイヴオと云う国にある村です。コシイヴオは知っているかな」

「残念ながら存じ上げていないそうです」

「エウロペアの中にある国です」

「エウロペアはたぶん、わかるとのことですよ」

「そう。本当に世界は広いんだね」

ジャコは寂しげに言った。妹の顔が泛び、母の歎きがおもい出され、

下を向いたままもう何も語りたくなかった。涙がこぼれた。

杏佳はこちらの様子を見て困惑し、ヒューレーを問い詰めているようだ。彼女には何が起こっているのかわからないのであろう。それは理解できた。だがジャコの胸には自制しがたい烈しい憤りが湧き起こっていた。

ヨセフは早朝、天蓋つきのベッドから飛び起きた。窓の外を見た。夜明け前の街には霞が漂って静かである。空は澄んだ薄明かり色を做していたが、どこも建物の高さが同じくらいなので遠くまでは見渡せなかった。

た。周りはバルコニー付きの豪華な建築物ばかりである。

通りを見下ろした。誰もいない。石畳が沁みるような沈んだ色をして
いた。

「これは、これは、閣下、もうお眼覚めですか。

あと三十分もしたら起こしにまいるつもりでおりましたが」

「氣にするな、ミカエロ。僕はもう眼が覚めた。とても眠ってなんかい
られないね。支度をしてくれ」

豊かな巻き毛の凛々しい青年秘書に向かって快活に言う。

「畏まりました。朝餉のお召し物をすぐにご用意させます。先ずはお食
事をしてください」

「もちろんさ」

「では、しばしお待ちを」

「ミカエロ」

「はい」

「昨晚の会談は有意義だったよ。外国語は少しでも多く知っておくべきだね。片言でも充分に通じた。聞くほどに彼女の運命は悲惨ではあったが、それでも向学心の豊かな人だよ。彼女のような悲惨な境遇にある人が少しでもエゲレス語がしゃべれるなんてね。実際、奇蹟だよ。」

ああ、僕にはまだまだ知るべきことがたくさんあるんだな。エステーラは非常に意志のはっきりした利発な、そう、僕に言わせれば『生きて

いる人』だった。もつとも最初は用心深かったけれどもね。それに僕は君のことも、そして補佐官のレオナルドのことも気に入ったよ。初対面の彼は随分と気難しそうな男に見えたけれどもね。

ああ、本当に僕はこの仕事に気が入りそうだ。少なくとも音楽の探求以上にスリリングではある」

午前七時に三匹の龍が牽く車が迎賓館の前に停まった。車輪が大きく、坐面が非常に高い。天蓋はなく、後部がせり上がり、座席は美しいプリーツの入った桃色の革製で縐子に華やかな神獣の絵柄の縫われたクッションが数多置かれていた。

ヨセフは秘書に伴われ、正面玄関に現われた。その出で立ちには翼のあ

る獅子の縫われた踝丈の長いチュニック、その上に翼龍の図柄が織られた、チャジュブルと云う高位聖職者が礼拝用に着用する貫頭衣、カロットと云う小さな円形帽子、深紅の革靴、首や手首には金の鎖が奢られ、手袋も赤、黄色い房飾りが両端についたエトワールを肩から垂らしている。

その後から来るレオナルドは髪も鬚も白く伸ばし、眉毛の長い哲学者の風貌を持った老人であった。ヨセフは左右それぞれに大きな旗を靡かせる龍車を見ると怖れるふうもなく、感歎の声を上げた。

今朝は緋色地に金糸と紺糸で蔦模様の織られた絨緞が彫刻の居並ぶ壮麗な純白の階段に敷かれている。そこを走り下りた。ヨセフは御者の

手を借りてまだ誰もいない席に上がる。それを見届けると随行者二人は後に停まっている箱型馬車に乗った。ヨセフは深々坐るとほかの者たちを悠々とした面持ちで待った。

現れたのは予想に違わず、エステーラである。彼女は金と赤と緑と黒の刺繍のされた膝丈のベストの上に虎の刺繍の蒼いジユストコルを着て、首に高々とクラヴァットを巻き、青い三角帽を被っていた。最初、龍を見て怯えた表情を做したが、ヨセフの姿を見ておずおずと近づいてきた。

「おはよう、ヨセフ、元気ですか」

「おはよう、エステーラ、元気だ。あなたは？」

「私も元気よ」

ヨセフは彼女にも理解できるエゲレス語で次には何を言うべきかを考えた。そうしている間に一人の少年が金髪の巨漢に抱えられて現れた。白地に袖と裾とに赤い染め文様を施したダマルティカ、その上に茶色の毛皮のガウンを着て、白い房飾りのついた大きなモスグリーンのベレー帽を被っている。やはり龍の異様な姿に愕いていたが、彼の場合、是非もなく運ばれるのでやや青ざめながらも、懸命に笑みを作った。

エステーラの隣に乘せられると少年はイスpeg訛りのエゲレス語で弱々しくおはようと言う。

ヨセフはエゲレス語で話しかけてみた。

「そうです。僕はイスpeg人です。ニコライと言います。お会いできてうれしいです。あなたたちも扱われた人なのですね」

イスpegと聞いてエステーラの表情が複雑になったのを見たヨセフは彼女の手の上にそつと自分の手を置く。そしてニコライに応えた。

「そうです。そう言われました。僕はヨセフ。アウストリア人です。彼女がエステーラ。エステーラはエゲレス語が少ししか話せません」

「あなたたちは既に知り合いなんですね」

「ええ。昨日からですが。僕らのほかにあと二人いるようです」

すると今度は迎賓館から一人の巻毛の少年が現れる。一瞬、龍を見て足が止まったが、秘書とおもわれる痩せた黒い僧服の男に促され、龍車

に歩み寄る。彼はちらりとこちらをみただけで何も言わず、その秘書らしき者に言われるまま、御者の手を借りて坐席に上がり、黙って俯いたまま前列の席に独り坐った。黄色地に碧い文様の入った豪華な貫頭衣型のカンデイス、古代の王が身に着けたパルダメントウムと云うマント型外套を羽織り、黄金の冠にはコブラの模型がついている。

「おはよう」

ニコライが声をかけた。しかし少年は一度驚いたように振り向いてすぐに背を向け、何も応えなかった。

「彼はエゲレス語ができないのよ」

エステーラが弁護するように言った。

「わかるさ。少し」

振り向かず口ごもるように少年が応えた。

「彼女はエステーラ、彼はニコライ、僕はヨセフ。君は」

「ジャコ」

「ジャコ、会えてうれしいよ。君も扱ばれた人間だ」

彼は応えなかった。そのときである。

二人の男を従え、大騒ぎして少女が独り現れる。エステーラが露骨に嫌悪の表情をした。

少女は艶深い黒のヴェルヴェットのチュニツクの上に緋色地の男性用サーコートを着て、刺繍の入った繻子の尖頭靴を履き、聖職者用のミ

トルを被っていた。サーコートとミトルとは金糸の刺繍で龍が描かれている。サーコートの上には緑の龍が縫われた金色のコープ（半円形マント）を着けていた。コープには大きな蒼碧の襟がついている。孔雀の羽の扇で気取っていた。

繋がれた三匹の龍に讃嘆の声を上げる。ヨセフ同様、怖れも愕きもなく、不思議な生物の存在を受け入れているようであった。

次に鷹揚な表情で得意げに先に坐っている四人を見廻す。ジャコと眼が合うと表情を曇らせて顔を逸らし、逸らした眼がエステーラの双眸と合うとあからさまに眉根を寄せて頬を膨らまし、唇を尖らせてぷいっとそっぽを向いたまま、つかつかと龍車に歩み寄って御者に手を出し、乗

せてもらおうとつんとして蒼穹をにらんだまま、ジャコの隣に坐った。

ヨセフは声をかけた。

「おはよう。僕はヨセフです」

少女は心外だと言わんばかりの愕いた表情でヨセフを凝視した。そして随行者の馬車に援けを求めるように視線を投げる。ヨセフは彼女がエゲレス語を理解しないことを察した。どこの国だろうか。

「僕はアウストレアから来ました。あなたはどこの国からですか」

彼女は怒ったようにまたそっぽを向く。ヨセフはエステーラに告げる。

「どうやら彼女はエゲレス語がわからないらしい」

「私もそうおもうわ。彼女は全く話せない」

ジャコまでもまじまじと少女を眺める。ヒューレーが慌てて飛び出して来た。

「閣下は、杏佳様はエゲレス語がわかりません。申し訳ありませんが、しばしご辛抱されてください」

ヨセフは微笑んだ。

「もちろんさ、エゲレス語が全てではない。彼女はどこから来たの」

「ZIPAGでございます」

エステーラの眉が大きく上がり、次に前よりさらに陰しくなった。母国語で呟くように言う。

「平和な豊かな国に生まれたのに、勉強ができないわけがないわ。贅沢

にわがまま一杯に育つてきつと何もしていないのよ。この人がこんなふうになるために私や家族は踏み躪られていたんだわ」

その言葉の意味を理解しなかったが、察してヨセフはエステルをたしなめるような眼で見つめる。視線を転じていかにも驚いたと云う口調を作つてヒューレーに言つた。

「ZIPAGの人は英語を学習しているとおもっていた」

「いえ、お国では閣下の年齢ではまだ習う歳ではないのでございます」
「エステルなんか、国中のほとんどの学校が崩壊しているのに少ししやべれるんだよ。おかしいじゃないか」

「仰せのとおりかとはおもいますが、ヨセフ閣下、私にもいかんともし

がたいことでございます」

「そうだね。」

しかしこれからコミュニケーションを取りたいときはどうしたらいい？」

「それはこれから解消いたします。ともかくも天叡の城へお出かけください」

「ああ。わかったよ。さあ、出発しよう」

龍車は動き出した。三匹の龍はほとんど脚を地につけずに飛ぶように駆ける。五人を乗せた車は軽やかに石畳の街路を疾走した。大きな通りに出るとその路は一直線に巨大な城に向かっていた。

幾重にも屋根を聳えさせる門があり、見上げるような鉄柵を数人の壮麗な衛兵が開く。

龍車は一気に駆け抜け、三つの盤を重ねた滝のような噴水のある広場を通過し、岩山のような城の最初の階段を駆け上がる。ファサードの扉が開かれ、驚いたことに車はそのまま絨緞の敷かれたエントランスに入った。屋内の大階段を上がり、踊り場を曲がり、通廊を駆け、次々階を上がって行った。

城の内部の大きさと荘厳さは驚嘆すべきものであった。複雑極まりない彫りものや絵画や金銀やステンドグラスや星霜のような燭台、無数の香炉、物語の描かれたタピストリーや鮮やかな文様の絨緞、どこにも衛

兵が並んでいて最敬礼をする。黄金の喇叭が高らかに鳴らされる。

やがて窓の外に雲が過ぎるのが見え始める。窓に雪が積もり、氷が張りついているのがわかった。

燦然たる光をそのまま象って精緻に彫ったかのような繁き装飾の大回廊に着くと龍は緩やかに誇らしげに進み、大きな扉の前で停まった。衛兵や高官とおもわれるきらびやかな人々が待っていて厳かに扉を開く。

「最高裁判員殿がお出でになりました。栄光あれ」

吹奏の高らかな響きとともに聖なる歌が神々しく湧き上がる。五人は車から降ろされた。躊躇しながらも歩む。

そこは巨大な広間であつた。

天井は水色や緋や黄白色で彩られた数千のフレスコ画で飾られ、フレスコはそれぞれ金色に染められた漆喰で象られた葉飾りに縁取られ、壮観な大蒼穹のように遙かな高みにある。床は緑や桃色や青碧や白や黒の縞目の大理石でモザイクされ、地平線のように広がり、壮麗。深紅の大円柱には黒いアラベスク模様が走り、精緻な龍の彫像が絡みついている。奥に玉座があつた。

座はピラミッドのように聳え、四方が古い巨石による石段で苔生し、所々が自然に缺け、周囲の鮮やかさに対照して異様であつた。坐の上には天蓋があり、瓦が葺かれ、鷲翼のように東西南北に反り上がっていた。

四隅はマンモスの牙のように尖り、獅子と青龍と朱雀と鯨とが躍っている。

玉座は種類の知られぬ荘嚴な漆黒の巨磐で、黄金と蒼と赤との繊細な細工が神聖な經典の荘嚴な書体を象っていた。

白い髪と白い鬚とを床にまで垂らし、黄白色の燐光を放つ白金色の長衣を階段下にまで延べた金色の双眸の青年が坐っている。皮膚は白、赤、黄、黒、茶色の五色に滑らかに變じて同一と云うことがない。顔や喉や身体的全てに焰のように光の動く金色の刺青が真咒を做して飾られ、頭の後に燦々たる太陽の輝きの円盤があり、身体の周りを虹の色をした半透明な神聖文字を象る光が囲み、背後に紅緋の炎の光背が九重に燃え、

炎の中には幾千もの真理の言葉が点滅していた。

「よく来てくれた。」

余が聖にしてその上にも聖なる究極真実奥義サティアである」

その言葉はどこの国の言葉でもなかったが、誰もが理解できたようであつた。

「先ず言葉の枷を外そう」

サティアが軽やかに手を振るとヨセフは身体の一部にふわつとした感触を覚え、胸が梳かれたようにすうつとした。

「さあ、これで制御は解かれた。諸卿は互いの言語を理解するであろう。

それで自由に質問し、またほかの者たちの見解を聞くがよい。

さて事情を説明する。

この度、余は最高裁判長職にあるサン・パラからの勧告を受け、一般人から募った最高裁判員制度を設け、人間についての裁きを委任することとした。そう云うことだ。

諸卿にあつては委嘱状によりこの任に就くことを受諾されたい。

いかがか」

ヨセフら少女少年たちは息を呑み、互いに顔を見合わせ、言葉が出なかった。ヨセフが漸く口を開く。

「それは、いったい、どういうことですか」

「諸卿は人間たちの罪を裁く権限を委嘱されたのだ。

先ずは根源から話そう。よいかな。

ここに一つの法則がある。因果の法則だ。

原因があつて結果が生じると云うことだ。原因に應じて裁かれ、その報いが生じると云うことである。すべては何かに因んでそれに縁りすがつて生じる。

原因とはあらゆる現象を指す。全ての事象であり、全ての行為であり、全てのおもいが現象だ。全ての事象、全ての行為、全てのおもいは次に起こる現象の原因となるのである。

すなわち結果もまた現象を指して言う。全ての事象・全ての行為・全てのおもいは以前に起こった事象・行為・おもいに因んでこれに縁りて_よ

生じているのである。

それはあたかも細胞が一つの細胞から分裂して新たな細胞を生むように、現象はその次に起こる現象を生む。脳神経細胞（ニューロン）がイオンの流入を受けて正負電荷の逆転（電氣的発火現象、インパルス）を起こし、それが次の脳神経細胞のイオン流入を惹き起こすように、一つの現象は次々と新たな現象を誘発する。

一つの現象がなぜ、どのようにして新たな次の現象を惹き起こすのであろうか。諸卿はそれをあたりまえとして疑わないかもしれない。だがどうしてあたりまえか。答えられるか。答えられようはずがない。ならば言おう。

これは茫渺たる虚空に打たれる道標、毅然として定められた法である。すなわち法を説いて曰く。

現象が惹き起こされるのは惹起すべきと決せられるからである。それが現象として象^{かたちな}倣すのは惹起の仕様が定められるからである。仕様の定めとおりに現象が起こるのは力で強いられるからである。

だがそれらはどのようなようにして決められているのであろうか。簡単である。無数の裁判によつて決められている。裁判とはどう云うことを説明すればこうだ。

すなわち一つの現象がその質を裁かれ、裁くことで質が決定され、質に縁りて次にいかような現象を起こすべきかを強い^し裁かれ、裁くことで

決せられたとおり現象が執り行なわれる。これが裁判である。摂理と言つてもよい。

人が種を蒔いたとしよう。これは一つの現象だ。その現象が惹き起こすであろう次の現象を何にするかを決め、裁判官はこう言うだろう、『種が蒔かれた。ではこの現象に報いて発芽を起こそう。種蒔きを原因として発芽と云う結果を生じさせよ』と。この決定が裁きだ。

世界は裁きで成り立っている。細かな無数の裁きが複雑系的に絡み合い、集積したものが世界だ。原因は結果を招き、結果は再び原因となる。無限に連鎖し、遷移する。遷移は時間性で表現され、以て無限に時間が生じる続ける」

サティアの全身が烈火のごとくに燃え盛る白熱の光で燦々とした。額に白毫が現れ、強烈な光芒を放射する。ゆっくりと一人一人を眺めた。「これで裁判とは何であるかがわかったであろうか。

裁判には様々なレベルがある。

先ほど挙げたような事例は小さな裁きであり、極小裁判にあたる。小裁判があり、中裁判があり、大裁判があり、最も重要で高尚な案件は最高裁判で審議される。小さな裁判は人間にはほとんど自然現象として捉えられ、その数も膨大な件数である。裁判官の数も涯しのない数である。では諸卿が携わるであろう最高裁判に当該する案件とはどのようなものだろうか。

たとえば聖者の功績を褒め称え、天上に招き、天の栄華を与える。または極悪者の罪科を責め、これに永劫の罰を与える。これが最高裁判による裁きだ。最高裁判は人間に対して行われる。人はビッグバンに始まる全世界の進化の最先端に位置する存在だからだ。

しかし一口に人への裁きとは言っても人間の身体における物質的な諸現象は物質に対する裁きと同様に極小裁判で裁かれる。まさしくそれは物質の営みだからだ。また日常的な諸事は小裁判で裁かれる。大概の人間行為の営みは中裁判で裁かれる。主要な事件は大裁判で裁かれる。行為のうち特に著しいもののみが最高裁判で裁かれる。命を賭して正義を護ったり、無償の行為に全生涯を捧げたり、何百万人もの人間を虐殺

したりすればたちまち最高裁判だ。

人は為した行為によって随時裁かれ、その運命を紡ぎ上げて行く。しかしこれは言わば概算の状態だ。まだ最終的な結果ではなく、その都度為した行為によって裁きが革まるからである。生きて行為し続けていれば常に遷移し、まだ善くなることも悪くなることもありえるからである。最後に死に際して総決算がなされる。言わば精算だ。

原則的に善を為せば善き報いを受け、悪を為せば悪しき報いを受ける。このことに理屈はない。ほかのあり方がないからだ。

諸卿は習慣的な思考になじみ、ほかのあり方がないと云う事実を理解しないとおもうが、実際、選択肢や可能性と云うものは存在しないのだ。

それについては後で話そう。ともかくものである。

諸卿は最高位にあるこの最高裁判の責務を委嘱されたのだ。

人間の世界にも裁判官がおろう。だがそれは真実の裁きではない。悪を逃し、善は必ずしも認められるわけではない。しかし人の世で罰を逃れる者や善行を見落とされる者であつてもこの真実の世界においてはその行為をダイレクトに反映した、わずかの歪みもない裁きを、真の現実の裁きを受ける。ただし配慮によつて善き報いも悪しき報いも猶予されるが多々ある。その具体的なケースについては後に実践で自ずとわかるだろう。今は略す。

さて、諸卿は一切現象の運用である『裁き』のうち最高位にある最高

裁判の業務を委嘱されたわけだが、これについて受諾するか否かを今応えてほしい。

ちなみに余は人間の意志を支配する。人間には本来、彼らが考えているような意味での自由意志はないのだ。しかし最高裁判員についてはその委嘱に係する期間中は特にこれを解く。

よって諸卿はこれによつて余の意向を気にすることなく、自らが紡ぎ出した倫理により生きている人間を裁くことができるわけだが、今既に余は諸卿の意志への支配を解いてある。受諾の判断は既に委嘱に係する期間に含まれるからだ。

諸卿は余に操られることなく、自らの真の自由意志で受諾か否かを決

することができる状態にある。その上で決めてもらいたい。

いかがか」

ヨセフが重ねて訊ねた。

「事情がよく見えません。そもそも真実の世界と言われても、いったい、ここはどこなのかですか。

いえ、わかっています。ここは天叡の城です。イデアンブルグです。それでもなおかつ僕は問う。名称を聞き、景観を見ても何の理解も援けないからです。

いったい、ここはどこなのかですか」

「なぜそのように言うのか。

では卿は母国にいるときには何をわかつていたのか。卿はアウストリアにいた。ヴィーナに住んでいた。卿が生きていた諸々と絡んでそれは記憶され、心に生きていた。

だがただそれだけのことだ。言わば感情でしかない。

ならば理解せよ。ここは心だ」

「心？ 心、って、たとえば僕らの中にある心のことですか」

「心は諸卿の中にあるのではない。心は生命だ。諸卿が心の中にいる。それが実感ではあるまいか。全ての現象は心が現象する。諸卿の思考や存在や歓びや煩悶も現象の一つではないか。そう見えるはずだ。なぜならそう見えるように創られているからである。諸卿はともに心の中に生

きている」

「しかしそれではおかしい。人はそれぞれに異なる心を持っています」

「見たことがあるのかね」

「ありません」

「見てもいないことをどうして確信するのかね」

「人ともに生きていて晰らかにそうと感じられます」

「だが憶測だ。たとえば見たとしても卿の眼が正しく捉えて理解に反映しているかをどうやって証するのか。ましてや見てもいないならば論外である」

「では心は一つでその中に生物も非生物も皆がともに生きているので

すか」

「余は心が一つとは言っておらぬ。よいか。心は数えられない。鑑みよ、一人の人間が幾つもの心を持つように見えても境界が定かではないように、心は数に捉えられるものではない。心とは複数でもなければ単一でもない」

エステーラが躊躇しつつも訊いた。

「あなたは、あなたは神様なのですか」

「余は神ではない。余は真実である」

ヨセフは再び問う。

「それは、真実と云う言葉はわかりますが、しかし真実とは何なのでし

ようか」

「卿には真実と云う言葉の意味がわかっておらぬ。真実とは現実だ。現実とは心だ。だがこれら説明は同義反復でしかない。実在するとも本質がない。諸卿が言うところの無と云う考概に相当する」

ヨセフは独り呟くように繰り返す。

「無なんだ。やはり無なんだ」

気にするふうもなく、サティアは続けた。

「しかし言おう。無とは何か。諸卿の考概の一つである。無と云う考概である。すると諸卿の考える無と云う考概の定義とは矛盾しまいか。諸卿の定義に従えばいかなる考概もあつてはならぬ。

ならば無と云う考概を定義に沿って認識するためには何の考概もない状態の脳裏にある考概をえなくてはならない。それが無と云う考概である。余はおもう。まさにそうであり、それに相違なく、実にそのとおりである、と。

だが難しいことではない。全て現実と同義反復だ。人は慣れているからそれを生きていられるに過ぎない。鑑みられよ、現実には答がない。現実には道理が通じるか。現実が諸卿を哀れんでその手を緩めたであろうか。現実に対して理屈を言っても始まらなかったであろうぞ。これを余はこの他者性及び非情性を現実と呼び、現実が真実であると言う。諸卿の心ですら他者だと敢えて言おう。諸卿は自らに異物感を感じないか。

意識上に現象するとは異物感の表明にほかならない。考えてもみよ、異物感なくば存在は存在性を失うであろう。そうなのだ、自らの心すら異物である。

よつて万象は真実である。真実とは現象するものである。存在するところが真実の証である。遠慮会釈もなく唐突に、無機質に迫真する。無の証である。色即是空、空即是色とは卓見なるかな。

見よ、よつて何人も万象を了解しない。自分がどこにいて、何を為し、何を了解しているか、知る者はいない」

ヨセフはまだ納得が行かない。皆も同じだった。

「あなたは、つまり全てなのですか」

「全てとは何か。心を誰が数えるのか。余は只管真実である」

もう誰もそれについては問えなかった。

杏佳が咳払いし、訊く。

「で、どうして私たちなわけ？」

「扱われたのだ。先ず遠慮なく、おもったままに人間本来の素質から心のままに叙べられる者、かつ異なる様々な、或いは対立する境遇にある者。そのように扱われた者たちが協議することにより一般性の高い、客観的な、新たな見解がえられる。そう云う試みだ。

むろん我々は完璧だ。従前のままで全く過ちや遺漏はない。だが敢えてそうするのだ。完全であっても常に自己超越を試みるのだ」

ヨセフが反論を唱えようと言いかけた。

「けれども、もし」

もし全てが無ならばなぜ裁くのか。だがそれを訊けなかった。このよ
うの全ての根底が覆される気がしたからである。ジャコが堪りかねた口
調で問う。

「でも、もしも僕らの裁きが誤っていたら」

サティアは燦然と微笑んだ。

「問題はない。一切は幻影なるがゆえ」

ヨセフはそれを聞いてやはり訊ねずにはいられなくなった。

「では全てが幻影であつても裁くのですか」

「然り。斯くあるがゆえに斯くあり」

唐突にエステーラに生々しく過去の記憶が甦った。

「そんな。私たちの苦しみも幻影なの？ 私たちを苦しめた者たちの罪も幻影なの？」

「然り」

ヨセフも再び強く問わざるをえない。

「ならば裁くことにも意味がないのではないのでしょうか」

「然り」

エステーラがうめく。

「そんな。それじゃあ、何のためにさせるのですか」

「何のために、と問うか。余は言つたはずだ。自分が何処にいて、何を為し、何を了解しているか、知る者はいない。当然だ。初めから何もないからだ。わかるわけがないであろう。よつて問うことは虚しい。

問い質せないならば、このことに關しては選択肢がない」

ずっと黙つていたニコライが呟くように言つた。

「僕は拒否します」

ヨセフは驚いた。ほかのこどもらも眼を丸くする。サティアが再び黄金の微笑をした。

「それでもよい。

ただし卿は報奨を取り損ねることになる」

杏佳が大きな声を上げた。

「報奨って？」

「世界に類のない責務を負うのだ。最高の報奨を用意してある」

「何をくれるの？ もったいぶらないでよ」

「望むものは全てだ」

エステーラの顔が輝いた。しかしサティアは冷厳に叙べた。

「ただし死者は甦らせない。既に起こってしまったことは変えられない。諸卿はこの世には常に可能性と云うものが存在していると考えさせられている。あるときこうしなければそうはならなかったに違いない、よくこんなふうに考えるのではないか。」

だがそれは違う。

あのときしなければ、と言う。だが諸卿はそれを確かめたか。それを見たか。誰も見たことがない。起こらないからだ。

ほかの存在は全くないのだ。存在とは常に一つだ。未来へと向かう幾つかのルールがあつてその都度一つのルールが自動的に選択されているのではない。ルールは常に一つしかなく、ほかの在り方はありえなかったのである。

起こってしまったことが起こるのはほかを選択肢がなかったからである。よつて過去は変えられない。ほかの状況がないからだ。時を溯つて変えることはできない。

だがまだ起こっていないことについては今の状況がいかにもそうなる
しかない状況であつても変更できる。起きてしまったことを変える以外
なら全てを変えよう。いかなることでも可能である。

どうかね、ニコライ卿」

「では僕の病を治せるのですか。おかあさんは何も言わないけれども、
わかるんです。僕はきつともうすぐ死ぬんだ」

「もちろん治せる。

卿は死病に憑かれた。だがまだ死んではない。奇蹟の余地はある」

「僕は。治りたい」

「よろしい。

一つ附言しておこう。もし卿がそれで癒されるなら、最初からそれ以外の選択肢はなかったのである。つまり結果で初めてわかることであつて、運命などと云うものは実情的には存在しないのである。それを義しく弁えたまえ。

諸卿、いかがか。

おお、それからもう一つ、言っておこう。報奨は委任期間の最後に与える。そのときに願いが変われば変えてもよい」

ジャコが考え考え尋ねる。

「まさか、不死は。それを願うのも無理だよね」

ゆつくりサティアが首を振る。

「可能だ」

ニコライが眼を丸くする。

「そんなことが可能なんですか」

「むろん可能だ。過去を変えない。

私は不死だ。人間がいずれそうあつても不思議はない」

ヨセフが懐疑的に言う。

「何か落とし穴があるんじゃないでしょうね。

肉体が滅んでも魂は永遠である、とか。つまり肉体はどんどん腐り落ちて、透明な魂だけの存在で永遠に生き続ける、みたいな」

「それが望みならそうしてもよい。老いながらも永遠に生きてもよいし、

老いずに永遠に五体満足なまま生きてもよい」

ジャコの弦きが洩れる。

「信じられない」

杏佳が言った。

「ふーん。今後願う全ての願いをかなえて、でもいいの？」

「むろんだ。起こってしまったことの変更を除けばだが」

ヨセフはおもわず声を上げた。

「僕も一瞬それを考えたけれども、さすがにそれはだめだろうとおもった」

サティアがヨセフを凝視した。

「ふ。それで卿は、究極の真理・哲理をください、とても願う気だったかね」

ヨセフはサティアを見据える。

「僕らの気持ちが見えるんですね」

「いや。既に余の制御下からは解いてある。単なる憶測だ」

少しの沈黙。エステーラが漸く言った。

「そう、残念だわ。でも、それでもいい。それしかないなら。」

私も杏佳と同じにする。お話を聞いても何をしたらよいかよく飲み込めないけれども受諾します。

私も報奨は彼女と同じにしてください」

皆一様に頷く。まとまりそうなこの瞬間、またもニコライが問うた。

「一つ言わせてください。

もし全ての人間の心があなたの支配の下にあるなら、全ての罪はあなたに帰するのではないのでしょうか。だとすれば、僕らは何を裁くのでしょうか」

ヨセフは血の気が引くのを感じた。サティアが高らかに笑った。

「ならば余を裁くがよいではないか。

裁くことについては全権を委任する。無際限に。諸卿は史上初めて自由意志を持った人間である。栄えあれ。

さあ、これでよいかな。詳細はサン・パラから説明がある。それから

最高裁判所執務官のアパロンが具体的な運営を補佐する。

以上だ」

衛兵が二人現れた。羊の大角を附けた兜を被り、典雅な黒に艶光する装甲に身を固め、紺色のマントを引きずっている。言う。

「ご案内申し上げます。

閣下らにおかれましては先ず最高裁判所内の専用会議室のご集会戴きます。裁判所は城内にあります。龍車で移動して戴きます」

一同きこちなく、それらしい重々しさで頷いてみせるのであった。

「では講義する、卿ら、耳ある者は聴くがよい」

サン・パラは女性であつた。深紅とラピスラズリ色とのサリーをまとい、頭には光輪のような形の繊細な金細工を被り、その被り物の前後には步揺がついていた。サリーにも步揺にも天叡の言葉と謂われる経文の真言が6ポイントくらいの大きさで細緻に画かれ、彫られている。

「最初に言う。

ここは真実の世界だ。真実を語れ。遠慮はするな。言いたいことは言え。浅ましい恨みを持つ者はいない。もしいるとすれば諸卿だけだ。

質問は随時してよい。

私は天叡のサン・パラ。天叡そのものである。眞実を語る者だ。実在する叡智である。実践する叡智である。諸卿にはここでのことが繁文縟礼におもえるかもしれない。

しかしそうではない。秩序は何もないところに打たれる杭であり、その位置の正しさを示すのはただ正義の精神でしかない。

正義の精神とは義しいとおもったことを為す、それでしかありえない。よつて虚礼に見えることにも意味はなくとも意義があるのだ。これが秩序の美である。

『世に不正と知られるいかなることであらうとも、

それがために不正を為すなかれ』

古来、聖者が斯く言うも道理である。

さて、悦ばしき序言の後には義しき言葉が相応しい。私は諸卿へ世界の運営される真の仕組みを説いて上げよう。

幸いあれ」

サン・パラは独白する俳優のように抑揚ある語りで朗々と語ると両手を差し上げた。そして続けて言う。

「世は裁きにて活命し、生きて動くものである。すなわち現象する。

裁きは先ず照覧に始まる。観自在の者が一切を観てこれを捉える。次に捉えたるものを調べ究めて解く者がいる。解き終わることを了解と云

う。すなわちわかると云うことである。ここで現象は初めて現象と云う面目をえる。その性質を附される。

最後に解き終わりて性質を附されたる者をその性質に従い、分類し、運用し、その全体で世界を築き上げる者がいる。それこそが道を敷く者、法である者である。

この中で最も尊い者は法を定める者である。すなわち今私は照覧し、了解し、道を敷くと言ったが、これは実際の運用の順に叙べたまでであつて、本来の順序は逆である。

先ず道（法）があつてこれを先天的な基礎として考概のうちに持ち、調べ究め解く者は調べ究め解くのである。また照覧する者は道が先天的

にあつて調べ究め解かれることをあらかじめ先入観に含んで照覧しているのである。

これが原理である。よろしいか」

こどもたちはぽかあんとしていた。ヨセフでさえ晦渋な面持ちだ。

「照覧する者は神軍である。神軍の兵は八十八ナユタ（千兆の千兆乗）の勢を以て森羅万象を照覧する。そしてこれを捉えて差し出す。明るみに出す。顕かにする。」

了解する者は善智功德院を諮問機関とする検察省である。捉えられた者を検める。分析する。究明する。

法定する者は裁判所である。分析究明を糺し、しかるべき方向にそれ

を促す。世界を義しく運営させる。

よいか」

こどもたちは黙っている。杏佳は眠りそうになっている。サン・パラは顔を顰めた。漸くヨセフが尋ねる。

「先ほどのサティアの話と総合して考えると」

考えをまとめようと意を凝らす。

「つまり水が冷たさで氷になり、氷が熱さで水になるような因果関係での遷移においてもそのような煩雑な手続きが踏まれていると云うことですか」

「そのとおり。賢しき子だ。」

水は水として捉えられ、水とは冷温で凍るものと研究され、現実には冷温で氷となるのである。

水が冷温と云う原因によって氷へと遷移すると云う結果になる因果関係はこのように支えられている。

これを本来の順序で説くならばこうだ。

まず水が冷温で凍ると云う考概の原理となる『動機』が考概のうちに既に直観としてあり、水が冷温で凍ると云う解釈が天啓し、水が冷温で凍ると云う現象が意識されるのである。

そう云うふうでなければ何もなしに杭を打つことはできない。たとえばこう考えてみるとよい。

物事に『これはしかじかのものである』と云う本質がなかったとしたらば強制的に本質を措定し、そこから最初の一步を踏み出す以外、いかなる手段もない、と。

定めがないならば『これは水が冷温のために凍っているのだ』と云う解釈を力で措定し、そう解釈し、そのように観るしかないではないかと。

このように喩えればわかり易いか」

杏佳が不服そうに言った。

「そう。難しいわね」

エステーラが驚いた。

「あなた、わかるの？」

「全然。全く効果のない喻ね」

サン・パラが咳払いする。

「実際にやるうちに徐々に理解するであろう。

よろしい。

では実際の最高裁判の業務を説く。

既に聴いておるかもしれないが、我らが最高裁判所は通常の世界運営に関することは取り扱わない。高度で特出した案件のみを扱う。

よって人間の問題をのみ取り上げるのが常だ。

しかも人間行為のうちでも特に著しい案件しか扱わない。

それが大前提だ」

質素な会議室の円卓に坐っている少女少年らを前にサン・パラは歩きながらしゃべり続けた。

「裁きは先ず人選から始まる。

人選は神軍の仕事である。人間の行為を観察する担当の神軍兵が人間行為を観察し、毎瞬、検察省へ情報を送致する。検察省の調査官はこれを調査し、地域を所管する極小裁判所に情報送致する。（裁きには一定の地域的差異や地域的特色が出る）

極小裁判所は内容に高等な事項が含まれていれば所管の事項のみ扱い、それ以外は小裁判所に送る。同じように内容によって順次、小から

中、中から大、大から最高へと送られる。

このように人の行為は日々裁かれ、死後にいずれかの裁判所で総決算をされる。

ちなみに死は物的現象が基本なので極小裁判所か、小裁判所の裁きで時期が決する。せいぜい中裁判所止まりが常である。特例を除いてだが。

最高裁判所で裁くとは著しい善悪に関する勸善懲悪を行ない、善悪の区別を義しくし、美しい秩序を作ることだ。

悪を為したか否か、善を施したか否かを判じ、善を奉った者に善き報いを、悪を作した者に悪しき報いを与える。その報いの内容も与え方も時期も裁判所が決める。それも裁きのうちだからだ」

エステーラが言った。

「私たちは今まで死んだ後で裁かれて天国に行くか、地獄へ堕ちるか、それだけだとおもっていたけれども、それが全体じゃないってことなのね」

「そのとおり」

ジャコが頷く。

「そう云うことか。そこだけ少しわかった」

なおもサン・パラは続ける。

「ただし善行者は徳が篤ければ大いに評価されるが、必ずその場で報いを受けるわけではない。その場で与える必要があつたならその報奨を受

ける」

エステーラが眉を上げた。

「必要があつたなら？」

「まだ生きている途中では決定ではないのだ。後に悪を為すこともあるし、驕りを生じさせることもある。死の総決算まで放置することも珍しくはない。」

同様に悪行者は罪あらば罪を着せられるが、必要なくばその場では罰を与えない」

ジャコもうめいた。

「どうして？」

「愚か者、今説明したではないか。善者が悪に堕ち、悪者が善に改まる
ことがあるからだ。最後まで見届けた方がよいと判断される場合に賞罰
を控えるのだ。

ちなみに善行や罪科が裁判で認定されなければ元いた場所に無事に
帰してから引き続き観察して日々の裁きによる活命をさせる。

しかしながら」

サン・パラはこどもたちを見回した。

「我々には過ちと云うものがない。何も評価をすべき事項がなく、その
まま帰すことはありえない」

ジャコがぶつきらばうに言う。

「なら裁判なんか必要ないのでは」

「そもそも裁きとは空論なのだ。世は無空ゆえに。ただ秩序の美のために為す。美のための様式なのだ」

「それだけのため！」

「それだけのためだ。」

どのような報奨をどのくらい、いつどこでどのように与えるべきか、どのような刑罰をどのくらい、いつどこでどのように下すべきかを定め、秩序の美を演出する。喩えれば空架の虹のように」

杏佳が不平そうに言う。

「なら初めからそう言えばいいのに」

「演出だ。身も蓋もないことを言うな。

さて、続きだ。話を戻そう。

ここでは善の推挙も悪の検挙も同じく公訴を以て行う。公訴の提起を起訴と言い、これは所管の各裁判所に審判を請求することを言う。

よいか」

ヨセフだけが応える。

「はい」

「起訴がなされると裁判所は起訴の内容を審議するため、被疑者を法廷に召喚する。結果、法廷で認定されれば善者は生前か死後かいずれかで至福を受ける。悪者は死後、もしくは強制的に生命を奪われた後、この

眞実の世界で死のない永劫の罰を受ける。生前に罰を受ける者は少ない。なぜなら大罪者が多く、永劫の罰が相応しいからだ。そして永劫の罰は死後でないと与えられない。永遠の命が人間の世界にはないからである。よつてその場で罰を与えなければならぬ者については強制的に最高裁判所の権限で命を奪う。

この場合、最高裁判所はほかの裁判所の所管に踏み入ることができる。これは幾つの特権のうちの一つだ。

なお、刑の執行については専属の執行官がいて、決せられた刑罰を決せられた期間だけ受刑させることとなっている。

そう云う仕組みだ」

ニコライが不安げに問う。

「恩赦や救済はないのですか」

「ない。」

そもそも恩赦とは何か。裁きへの愚弄である。

よって救済もない。

そもそも償えるような罪の者が最高裁判にかけられることは稀有なのだ」

ニコライはなおも問うた。

「しかしこんなふうになっていることを知っていれば罪を犯す人がいるでしょうか。」

善を行なうことが修辭学的な行為だとおもわれ、非現実的な奇麗ごとだとおもわれているから誘惑や困窮に負けて多く罪を犯す者がいるのではないでしょうか。

ならば慈悲の余地があつてしかるべきでは」

「古来、善悪にはその賞罰があることについて言われ続けている。なのに善を為さず、悪を為す者が罰を受けることは自業自得ではないか」

「しかし善を行なった人が必ず報いられ、悪を行なった人が必ず罰せられていようには見えませんでした」

「それについては先ほど説明した。

いずれにせよ、深く煩うなかれ、所詮一切は無空である」

ニコライとヨセフの声が重なった。

「しかしそれでは、いったい」

「全ては秩序の美のためである。

すなわちこのように精緻に組まれた構築美が秩序であり、美が目的である。美とは善義なるかな。霧深い無の沼沢に打たれた正義の精神である。

さて、ここまではよろしいか」

杏佳が言った。

「ちんぷんかんぷんだわ。全然わからない」

「あとで実践がある。練習だ。そのうちにわかるようになる」

「はいはい。わかったわ。続けて」

「卿に命ぜられるまでもない。

さて、今教えた以外の手続きがある。

通常の裁判所とは異なり、先にも言ったように最高裁判所には特権がある。自ら善行者や悪行者を択び、法廷に召喚することができる。ただし最高裁判にふさわしい徳行、罪状でなくてはならない。

もつとも諸卿には何の拘束もない約束であるが」

ヨセフが反論した。

「しかしそれじゃあ、公正じゃない。

善智功德院や軍や検察省や裁判所がそれぞれ分権している意味がな

い」

「分権などしていない。全権は最高裁判所にある。分権とは誤りや権力の集中による過ちを犯さないためにあるのだ。我々にはそのようなことがない。

よって分権など必要がない。ただ秩序の美として様々な組織があるのだ」

ジャコが呟く。

「やはりわからない。間違いがないなら何で裁判が必要なんだ。何で裁判員を委嘱する試みが必要なんだ。全然わからない」

杏佳が彼の方を向く。

「でしよう？ 全然わかんないわ」

ジャコはそっぽを向く。

「君が言うのとは違うよ」

杏佳が顔色を変えたので、ヨセフが間に入った。

「ジャコ、まだわからないのか。そんなことを言ってもサン・パラは秩序が美だからとしか言わないよ。

僕らは誰も皆わからないことだらけなんだ。君にだって杏佳を批判する権利なんかないはずだよ」

杏佳が得意げにジャコに言う。

「そうよ。あんたって最低。」

ねえ、ヨセフ、あなたは最初におもったよりいい人だわ」

サン・パラが声を上げた。

「諸卿よ、質疑ならぬ私語は慎め。意義ある発言がなくば黙って聴くのだ。

よいか。

よって諸卿は善人もしくは罪人を扨んで裁ける。そのために諸卿には補佐官と諮問のための調査研究機関とをつけてあるのだ。

わかったか。ならば早速、実践だ。アパロン、来たまえ、君の出番だ」

金髪碧眼の青年が扉を開けて現れた。眼の周りに金色の蔦模様の刺青がある。唇は朱色で歯並びは寸毫の狂いもなく綺麗に揃い、雪よりも純

白であつた。四肢はしなやかな筋肉質で、胸筋や腹筋の浮き彫りがある。革製の鎧を着け、象牙の角のある青銅の兜を被っている。純金製の槍と象牙の楯を持つて人のよい微笑を浮かべた。

「さあ、では法廷にご案内します。どうか整然として一列にお並びください。さあ、まいりましょう。」

真理は莊嚴されなければなりません。今日から閣下らは真理自体となつたのです。一切の者が平伏します。閣下らが威嚴を失えば世の秩序は乱れるのです。さあ、どうか、清冽に凜として崇高に行きましょう」

別の扉から出るとそこは広く長い廊下であつた。天井も秘蹟を画いたフレスコ画が霞むくらい高い。

中央に絨緞が敷かれ、左右には白い甲冑で武装した衛兵が居並んでいる。喇叭の高らかな吹奏とともにアパロンが歩き出した。ヨセフが進んだ。その表情は苦々しげであった。

「僕はできることなら行きたくなってきたよ」

エステーラが言った。

「ヨセフ、あなたがそんなことを言わないで。私も不安になってくるわ。でも私たちもう受諾しちゃったのよ。報奨も約束されてしまったのよ」

その後で衛兵の押す金細工の車椅子に乗ったニコライも憂いの面立ちで言う。

「僕もヨセフと同じだ。

ここは本当に真実の世界なのか。疑問におもう。僕らには何も確かめられない」

ただ独り得意満面で衛兵を眺める杏佳はジャコに言った。

「ねえ、あんた、もつと楽しそうな顔をしなさいよ。どうしていつもそんなに愛想がないの？

ねえ、凄いいじゃない。まるでマリー・アントワネットだわ」

最後尾のジャコは俯いて鼻で笑った。

漸く法廷のある場所に着いた。彼らは法廷の東側の側廊を回って正面に到達したのである。全ての扉は閉まっていた。

法廷の正面には広い下り階段があり、階段は踊場で左右に分かれ折り返していた。これが一般の傍聴人などが法廷へ上がる正面大階段なのである。

衛兵が大扉を開いた。

扉は鉄製でレリーフが施されていた。テーマはどうかやら天国と地獄のようであった。複雑な幾つもの物語がはみ出さんばかりに泛び上がっている。正面入口は大人が二十人並んでも通れそうな幅であった。その左右にもそれぞれ扉があった。それは中央よりは幾らか小さい。

こどもたちは案内されるがままに法廷に入った。

その全体はオペラ座のようであった。丸天井はその頂上から光を差し

入れさせ、高さは想像がつかないほどである。傍聴席はどれも棧敷席だった。十二層の棧敷には各々にランプが燃えていたが、天井からの光に比べ、今それは弱々しく棧敷の位置を知らしめるようにわずかに調度の一部を照らすだけであつた。それでも座席の全てに深紅の繻子が張られ、深い木目と金の飾りとが奢られているのが判別できる。どの棧敷にも濃い桃色に蜂蜜色の刺繍のある幕が垂れていた。

棧敷席に囲まれた法廷の底にはただ一つ、召喚された者が坐る席が高く細い壇の上にあり、昇るための階段がついている。その壇を中心とする一帯が天井から差す光に泛び上がっていた。

少女少年らが立った位置は棧敷の階層の三階部にあたり、ちょうどロ

イヤル・ボックスのような位置にあつたが、そこから見下ろすと古代のコロシアムのフィールドを眺めるかのようにもおもえた。

彼らのいる場所に対面する奥正面は巨大な祭壇になっている。その基部の下には真一文字の机壇が召喚された者を睥睨するようにあり、厳めしい椅子の背もたれが五つ並んでいた。

「あれが閣下らのお席でございます」

アパロンが指差してそう言った。

机壇から見えている檜の木製の椅子の背もたれのシルエットは厳格な立像のように高く聳えて見える。

その厳めしさにも増して裁判員席の後の大祭壇は段状を做して荘厳

に高まり上がり、段の頂上に光芒の形を模した円形の象徴を掲げ、その円の中央に燦然たる黄金の炎に燃え滾る卍を持ち、圧倒的な神厳さで威圧していた。

「あれは正義です。正義それ自体です。正義の本質です」

アパロンがそうつけ加えた。

「いったい、こんなところに召喚された人間はどんな気持ちができるだろうか」

ニコライがおもわずうめく。

「生きた心地なんかしないわ」

エステーラも同意した。

「さあ、どうかこちらへ。お席までご案内申し上げます」

アパロンは澄ましてそう言った。彼が進むと裁判員席まで虹の橋が渡った。

「凄おい、きれい！」

杏佳が声を上げる。しかしほかのこどもたちは躊躇していた。アパロンが言う。

「どうしたのですか。至って安全ですよ。ご安心されてください」

手すりもない半透明の橋に乗ると動く廊下のようにたちまち少女少年らは机壇の後に滑るように音もなく着いた。

「お席は決まっております。お名前のあるところにお坐りください」

それぞれの席に腰を下ろす。ジャコは疑わしげに、ニコライは戸惑いながら、エステーラは力んで毅然とし、ヨセフは不承不承、杏佳は相変わらず得意げな満面の笑みで坐った。

「よろしいでしょうか。

では今日は練習用の罪人をご用意しております。ええ、練習用などと申しても眉根を顰める必要はございません。そんな乱暴な言い方も当然の男ですから。さあ、ご準備はよろしいですか。

すぐにでも始められますが、先ずその前に閣下らの補佐官及び秘書に入場して戴きましょう」

ジャコが後を向くとニコニコしている補佐官のルネと陰鬱な秘書の

イマヌエルとが立っていた。ほかのこどもたちも同様に自らの背後に補佐官と秘書との姿を見出し、若干の安堵を覚えている。

「しかし今日は飽くまで練習ですので、敢えて彼らには援助を求めず、また彼らも援助いたしません。よろしくご了承ください。

では本日の悪逆非道の罪人を牽いてまいりましょう。まさしく悪辣と云う言葉がこやつのためにあつたかのような男でございます。

イスペゴの大量殺人犯ゴドブリン、来い、犬畜生、血も涙もない殺人鬼！

衛兵よ、牽いてまいれ」

突然、銅鑼が連打され、同時に賛美歌のような歌声が聖歌隊席から湧

き起こる。裁判席に対面する棧敷席の真下にあたるフィールドの扉が開き、二人の神軍兵に両脇を抱えられた無精鬚の筋肉質な男が現れた。愕いたような憤ったような表情を泛べ、卑しく血走った獐猛な眼を大きく見開き、自分が今連れ出されようとしているフィールドを見回している。そして裁判員席と大祭壇を見上げて眼をひん剥く。服は破れ、腕に傷があり、ここまで相当抵抗した様子だった。

神軍兵は赤い獅子の紋章が浮き彫りにされた黒鎧を着け、白い三枚の翼を背に持っている。翼を広げて飛ぶと叫ぶ罪人を一気に席まで連れ上げた。男は息を切らせて壇上にしやがみ込む。アパロンが雄叫ぶ。

「被疑者よ、罪を叙べよ」

ヨセフが驚いて言葉を挟んだ。

「すぐに被告の供述なのか。

検察省の者が起訴内容を陳述するとか、そう云う冒頭の説明部分がなくて、いきなり被疑者の話から始まるなんて」

アパロンが軽やかに笑う。

「ご心配召されるな。

ここは真実の世界です。被疑者は嘘を吐けません。全て真実を語ります。むろん、本人にわかっている真実を、です。

すなわち必ずしも事実ではないが、少なくとも被疑者には本当にそうだとおもわれていることを語ります。妄想であろうとおもい込みである

うとも、それで本人の真意がわかります。

その方が正しく動機を検め、裁くことができるのです。そうではないでしょうか。

いや、もちろん、最高裁判員閣下が異議を唱えたとあれば裁判の手法は幾らでも変えさせて戴きます。

いかが取り計らいましょうか、ヨセフ閣下」

ヨセフはうなるように言った。

「わかった、アパロン、そう云うことなら異存はないよ。

進めてくれ」

アパロンは大仰に微笑むと再び被疑者を向いて音声した。

「さあ、しゃべれ」

雷霆に撃たれたように被疑者は背を伸ばし、怯えと怒りの混じった眼で裁判員席を凝視した。杏佳は背筋がぞつとした。ジャコも顔を引き攣らせる。

「いったい、これは何だってんだ。

俺は死刑囚だ。マーチュツトの刑務所にいたんだ。ここはどこだ。また言わせるのか。どうなっちまってんだ」

「つべこべ言うな。あつたことを語れ」

アパロンがなじる。

ゴドブリンは嘲るように言い放った。

「ああ、言うさ、俺はこどもを百人以上はさらった。外国のマニアに売ったり、殺して臓器を売ったり、拷問にかけてそれをビデオに撮り、スナッフ・フィルムのコレクターに売るためだ。臓器売買にはルートがあった。俺たちは組織で動いていたんだ。

デルタ地帯に葦草に隠れた基地があつてホバークラフトじゃないと近づけない。ボスはそこでいつも十歳前後の女の子に囲まれて暮らしていた。

俺はピードットと組んで車で自由に横断し、あちこちでやったんだ」
アパロンは満足げに振り向いた。

「さあ、いかがでしょう、最高裁判員閣下。

どうか、お裁きを。

なお誤審などありえないとはおもいますが、おわかりのとおりこの男は既に人間世界においても審判が下されております。もはや死刑の決した者ですから遠慮はいりません。誤って極刑を与えてしまうのでは、なにと云う心配がいらないと云う意味です。もはや極刑なのですから。しかも言っていることに偽りはありません。これほど安心確実なことがあるでしょうか。迷う余地もないかとおもいます。

どうぞ存分にお裁きください」

杏佳が震える声で言った。

「考える必要なんてないじゃない。

死刑よ、だって殺したんでしょ、たくさんのかどもを。こんな恐ろしいことがあったなんて想像もしなかったわ」

ジャコも言った。

「言っていることが事実そのままならそのとおりだ。しかし僕は驚かないよ。こんなことは幾らでもあったんだ。僕は見てきた。

そして同じようなことをしながら英雄になった奴も栄華を誇っている奴もたくさんいる」

エステーラも声を上げた。

「そうよ。杏佳は何も知らないんだわ。こんな男、ほかの大悪人に比べたら虫けらみたいなものね。

ともかく死刑よ」

アパロンがお辞儀をする。

「では、いかに処しましょうか」

ニコライが尋ねる。

「いかにつて？」

アパロンがなおも微笑む。

「どのような刑を与えましょうか、と云う意味です」

杏佳が問う。

「だから死刑でしょう？」

アパロンが大きく頷く。

「そうです。しかし閣下の言う意味は極刑と云うことでしよう。この真実の世界では極刑はいわゆる死刑ではありません。死すら許されない永劫の責め苦のことです。死と云う赦しすらない刑罰のことです。

その責め方をいかがいたしましたでしょうか、とお伺いしておるのです」

ヨセフが興味深げにじつと観察しながら言った。

「被疑者ゴドブリン、君には何か弁明がないのか」

獣のように息を荒げて喚く。

「弁明だと？ ああ？ 弁明をしろつてかあ？ ああ？

黙って聴いてりやあ、好き勝手なことを言いやがって。

いったい、このおふざけは何だ。よく見りやあ、おめえら、皆ガキじ

やねえか。

ガキどもにいいように捌られてっつかあ？　ざけんなよ。

裁判所だってもっとましに扱ってくれたぜ。俺にだって人権ってもんがあらあ」

ジャコが冷たく言い放った。

「おまえに人権があるのか。

人の人権を踏み躪った奴になぜ人権があるんだ」

一同が一瞬、静まった。何か決定的な瞬間だった。

しばらく考えていたヨセフが厳かに言う。

「確かにそのとおりだ。

人は生まれや育ちで貴賤が決まるのではない。これは僕の普段からの考えだ。人の貴賤は行為で決まる。その人その人の限界の範囲の中で何を為したかによって人の貴賤や意義や価値は決まる。

おまえは賤しいどころではないよ、ゴド布林。

僕らはおまえを人間として認められない。これは詩的な比喻の意味ではなく、おまえはその行為から考えて晰らかに事実として人間ではない。よっておまえには人権などない」

ゴド布林は眼を剥いた。

「何だと、貴様、やい、下りて来やがれ、ぶっ殺してやるぜっ、畜生、何でこんな言われたい放題にこの俺が言われなきやならないんだ。莫迦

野郎どもが、人間じゃないだと、じゃあ俺のお袋は何だ、俺は生まれたときから人間だぜ、能なしども、人権つてのは『生得権』つてもんなんだぜ」

ヨセフは眼を細め、言った。

「いや。」

生まれただけなら蛋白質と塩水の塊さ。おまえのその怒りも浅ましい考えもその化学反応に過ぎない。胃酸が出たりする生理現象や摩擦で熱が生じたり、水蒸気が冷やされて雨になったりすると変わらない。どこに思想や本質や根拠を証明できるような正当性があるか。人が人であるためには自らが人に相応しいと考えることをするしかない。

人として生まれ、それに従って人として生きるならば、たとえ善を為せなくとも人だ。人にあらざる行為に及ばなければ人だと言える。

だが人にあらざる行為をする者は、その生まれに従わざる者は、すなわち人ではない。自ら人権を放擲する」

ゴドブリンは叫んだ。

「ふざけるな、どこの世界の法廷でそんなむちやを言うものか。そんなのはでたらめだ。聞いたこともない。人間ではないだと？」

そんな乱暴な、残酷なことはどんな国でも言わない。非人道的だ」

エステーラが言い放った。

「残酷ですって？ あなたが言うの、残酷だって？」

では罪もないのに拷問されて死んだこどもたちはどうなの？ そんなことをするのは残酷じゃないの？ あなたは誰のことを言っているの？

非人道的ですって！

お金が欲しくてこどもを殺して臓器を売るのが非道じゃないって言うの！

いい加減にしなさい」

ジャコが言った。

「こいつが殺したようにこいつを罰するのが正しいことだとおもう。

この男を彼自身がやったのと同じ手段で永劫に責めるべきだとおも

う」

「何だと！ 冗談じゃねえ！」

ゴドブリンが絶叫する。

それを無視するようにエステーラはジャコに同意した。

「ええ、そうだわ、ジャコ。」

そうするべきだわ。

私は死がどれほど怖く辛く悲しく悔しいかを知っている。この男は何の罪もないこどもたちにそれをやったのよ。ああ、どんなにかに怖かったでしょう。辛かったでしょう。悲しくて悔しかったでしょう。

絶対に赦されるべきじゃない。

永劫の責め苦が正しい。それが正義よ」

「やめろ、やめてくれ」

ゴドブリンは突然畏怖に襲われたかのように半泣きで叫ぶ。

ヨセフはエステーラとジャコの意見を制した。

「待ちたまえ。」

君たちはすぐこの男を永劫の苦しみに陥れるべきだとおもうのか。いや、それが妥当じゃないとは言わない。

アパロン、もし僕らがすぐ不死の極刑を執行しろといった場合、今生きているこの男はどうなる」

微笑んで応えるアパロン。

「不死の極刑を与えるためには先ず死と云う形で人間世界を逸脱させる必要があります。

ご理解戴けるとおもいますが、永劫の刑は人間の世界では物理的に不可能なので、死後にこちらで刑の執行をすることになります。すなわち人間世界においては速やかに屍骸となってもらう必要があります。

たとえば処刑の日を待たず、獄中で心臓麻痺のため骸になっていたとか。むろん、いかような設定で死ぬかは最高裁判員閣下のご指定があればそれに従います」

ヨセフはやはりなと云う顔で頷く。

「どうだい、ジャコ。それでよいだろうか。僕はよいとおもわない。

この男は人間の世界で死刑が決定している。こちらでの刑の執行はそれから後でも充分じゃないか。

人間の世界での償いをしてからでも」

エステーラは黙っていたが、ジャコは同意した。

「それもそうだね。

自然死したら事情を知らない被害者の家族は無念におもうだろう」

エステーラが主張した。

「でもこのまま帰したらここでのことは夢だとおもってしまうでしょうね。今責められたことも忘れてしまうでしょう」

ヨセフが笑った。

「ならば奴の身体に人間の世界には余りないような徴をつけよう。そうすれば戻ってからもこのことが夢ではなかったと悟るに違いない。

そして死刑の執行を怯えて日々暮らしながら、なおかつ死後に永遠の責め苦が待っていることも怖れて暮らすのだ」

「莫迦な、そんな莫迦な、これは夢だ、悪夢だ、どうかご慈悲を」

ジャコが言った。

「おまえは殺されたこどもたちがそう言っ泣いてもけして赦さなかつたんじゃないのか？ それなのに、おまえは自分のときには赦してもらおうとするのか。赦されると本気でおもっているのか。

ああ、ヨセフ、君の言うとおりだよ。

人間はその行為によって決まる。行為が人間を生まれたときとは別の何者かに倣すんだ。行為とは常に明日の自らへの裁きだ。

きっと人間には形なんかないんだ。行為はその都度自分を創る。行為と未来とは同義語だ。悪を為す者はその行為で自らを殺すんだ」

ヨセフは一同を見回した。

「では、それでいいかな、エステーラ。

ニコライ、杏佳、君たちも同意か。今言ったように決してよいか」

杏佳は余りのことに恐ろしくて声が出せなかった。震えて頷く。

ニコライはすぐに返事をしなかった。

「どうしたんだ、ニコライ。何か意見でもあるか」

黙っていたが、遂に言った。

「いや。」

君たちの言うとおりで正しいとおもう」

ヨセフが手を打った。

「よし、決まった。」

アパロン、どうだ。ゴドブリンはこのまま帰す。死刑の後、自らが為したとおりに為されて永劫に責められ、苦しむ。このように決した。

そのように執行してくれ」

アパロンは大仰にお辞儀をした。

「畏まりました。そのように執行官に通達いたしましょう。」

最高裁判かくのごとく決せり。さにしあらばさのごとくしあれ」

泣き叫ぶ罪人は翼ある神軍兵に牽かれて出て行つた。

「さて」

アパロンが言った。

「いや、素晴らしい。見事でございました。予想を遙かに上回っております。

今の裁判が幾つかの判例となり、今後に活かされるべき幾つかの原則を生んだようにおもいます。

一つ、人にあらざる行為に及んだ者は人ではない。よつて人権は認められない。

一つ、行為はそれとおりに報いを受ける。

偉大なる原則です。閣下らはやはり扱ばれたるお方なのです」

ニコライは問うた。

「しかしどうして彼は嘘が吐けないのだろうか。つまりサテイアはここが心だと言っていたが」

「お察しのとおり。

ここは心です。だから嘘が吐けない。自分の心は本当のことを知っているからです。人は確かに自分に嘘を吐くことがある。でもそれを全く知らないと言うことはない。たとえ無意識的な嘘であつても潜在意識の中のどこかでは認めている。だから無意識的な鬱屈がある。

厳密な意味で自分の心に嘘を吐くことはできないのです」

ヨセフが驚いたように口を挟む。

「ちよつと待ってくれ、もしかしたら罪人が受ける責め苦とは」

「そうです。自らの良心です。」

人は皆自分の罪を知っている。罪を知るとは既に罪に責められているのです。罪が重いほど良心の責め苦も重い。だから行為には報いがあると言えるのです。

ゴドブリンの存在が閣下らの心であるように閣下らの存在もあの罪人の心であり、彼の良心として彼を責め、彼の良心が神軍兵となって彼を永劫に責め抜くのです。人は自らを裁き、自らを責める。罪人は自ら

欲して自らの創つた地獄に赴く。そうです。

罪を犯すことは既にそれが罰なのです。愚かなる者は現実を知らない。よつて正義に生き、正義に死ぬこそ幸福なのであります」

ニコライ以外は皆感歎した。いや、杏佳だけは呆然として聞いている。ニコライが憂鬱な表情で頷いた。

「やはりそうか。

しかし彼を罪へと赴かせたものは何だったのだろう。自らを罪へ赴かせ、以て自らを裁かずにはいられさせず、それが自分自身を罰することになるとはあたかも絡繰りのようじゃないか。

それが正義の精神だけを抛りどころとして何も無いところに杭を打

つて秩序の美と云うものを築き上げることなんだね。

その絡繰り全てが」

アパロンは黙ってお辞儀をした。

ヨセフは醒めたように何も言えなくなった。エステーラも黙った。ジヤコの興奮も冷めて行つた。杏佳が言う。

「ねえ、余計わかんなくなったわ」

軽やかにアパロンが笑う。

「さあさあ、種々を考えて煩うのはおやめください。

私は閣下らの叡智に感銘いたしました。早くも聖なる最高裁判員殿はその天叡を示された。偉大なるかな！ 讃えあれ。

扱はれたる偉大なお方に讃えあれ」

すると聖歌隊席から丸天井に響くように賛美歌が湧き上がった。光の差す天井窓から数知れぬ薔薇の花びらの雨が降る。高貴な馨りが漂う。

「さあ、次は善人です。

さほど重要でもない、軽度な善行を扱びました。慣例から言えば最高裁判に相応しからぬ案件ではありますが、どうかお赦しを。

さあ、お疲れかともおもいますが、偉大なる責務でございます。ご了承くださいませ。

では始めましょう」

再び扉が開いた。

現れたのは白地に金の蔦葉模様の装飾の入った天蓋のない二頭立ての馬車で、そこには三十代とおぼしき丸眼鏡に口髭の男が乗っていた。ポロシャツに白いスラックスを穿き、薄っすら緑がかったブレザーを着ている。驚いたように眼を丸くしていた。

アパロンが取ってつけたように気取って説明する。

「さて。では語ってもらいましょう。人間とは自らについて語る生き物ですから。いや、存在する者は全て自らを語っているのです。自らを存在者たらしめるために。」

さあ、彼はZ I P A Gから来た男です。さるすべりはるあき 百日紅春昭、自らを語りなさ

い」

馬車がフィールドの中央に向かって駆け出し、一気に階段を上るとシヤボンが弾けるように消え、百日紅と呼ばれた男だけが召喚された者の席に立っていた。

「さあ、どうぞ。事情は説明してあるはずです」

百日紅はおずおずと応えた。

「私は」

彼は息を飲んだ。

「犬を助けました。それで呼ばれたと聞いています。

いつもの散歩道を歩いていました。

私の住んでいるところは過疎となった田舎です。古い廃屋の傍を通る

と犬の声が聞こえたような気がしました。私にはそれが助けを求めているように聞こえたのです。声をたどって今は人のいない荒れ放題の敷地に入ると、泣き声は井戸から聞こえていました。どうやら涸れた井戸に犬が落ちたらしいのです。どういうわけでそんなことになったのかわかりません。井戸は縁が大人の腰の高さぐらいになっていましたが、犬はそれを乗り越えて落ちたらしいのです。蓋は朽ちて落ちているようでした。

私は走って家に戻ると消防署に電話し、レスキュー隊を要請しました。しかし署員はそれは我々の管轄ではないと言いました。保健所に連絡してくださいと。

私は何度も強く訴えました。生命の尊さや人道や動物愛護についてです。そしてもしよろしければ費用は私が負担すると申し出ました。

私は財産家ではありませんが、黙っていられなかったのです。

そして遂にレスキュー隊は出動しました。犬は無事救助されたのです。それだけです」

言い終わると男は不安げに裁判員席をおどと見回した。

アパロンが言う。

「どうでしょう。

素晴らしいではありませんか。裁判員閣下、彼にどのような報奨が相応しいでしょう」

杏佳が声を上げた。

「素敵だわ。いい人ね。」

彼をお金持ちにして上げたらいいんじゃないかしら。もし救助にお金を払っているなら少なくともその倍ぐらいは与えてもいいはずだわ」

しかし百日紅が応えた。

「いいえ、結局、費用は請求されませんでした」

杏佳が笑う。

「正直な人ね」

アパロンが咳払いする。

「ここでは嘘はありませんから」

ジャコが言葉を挟んだ。

「僕の考えは杏佳とは少し違う」

アパロンが微笑みながら驚いた顔を作る。

「ほう。そうですか。閣下はいかがお考えですか」

ジャコは言わなかったが、ヨセフが語った。

「その行動は正しいとおもう。けれども彼は普段、何をしていただろうか」

「私は普通に静かに暮らしていました。近くにある大手メーカーの製造工場の人事や労務を管理する主任として日々働いています」

ヨセフは頷く。

「あなたには安定した収入と或る程度の余暇と経済力があつたはずだ。自由の国の大人だから様々な行動を取ることが可能であつたはずだ。つまりは先ほど伺つたような行動力があるならばもつと違うことが普段からできたのではないか。犬の救助を訴えたように政府や大使館や国際連合に訴えて貧しい人や虐げられた人々を救うための努力も、実るかどうかは別にして、できたのではないか。

犬にそれだけの力を注ぐならばもつと人間に対してすべきではなかつただろうか。犬を救うことは尊い。しかしそれ以上に重要なことがある。人間は善いことの全てではできない。当然優先順位があつてしかるべきだ。犬よりも人間ではないか。犬も救えればなおよい。だが現実には常

に選択を迫る。全てに善くはできない。どちらも正しくとも、どちらかを扱ばなくてはならない。

あなたは同じ人間が死ぬよりも辛いめに遭っていることに無関心だった。残酷な言い方をすれば見殺しにしていた。もつと言えばあなた方の繁栄が蹂躪された国の上に成っていることを無視していた。

罪とは言わない。

しかし僕は安直で感傷的な感涙エピソードに疑問を感じる。一部の狭い世界しか見ていない。全てを見ていない。

僕は人間が全てに善くすることはできないと言った。だが恵まれた環境にあれば全てを見ることは可能だ」

ジャコが決然と言う。

「僕もあなたを責めない。

むしろ褒め称えたいとおもう。

けれど実際、ヨセフの言うとおりだ。

現に僕は、間違った考えであることはわかっていたけれども、僕らが悲しみの涙に暮れ、苦しんでいるのに情報のあふれた豊かな国の人々が笑って暮らしているのを憤り憎んだことがあった。

そう、間違った考えだとはわかっていてもね」

杏佳は唇を噛んでいる。

エステーラも言った。

「ジャコ、私も同じよ。犬にそれだけの力が傾けられる話を聴くと複雑な気持ちになるわ。彼を責めるつもりはない。何もしない人に比べれば凄くいいわ。でも何かがおかしいと云う感じが拭えないのよ。」

別に犬の命がどうでもいいって言うんじゃない。犬の命と人間の命とのどちらが尊いかと訊かれれば答えられない。でも自分にできる範囲で扱ばなくてはならない場面に際すれば私は間違いなく人間を扱う。

これはもう理屈じゃないわ」

杏佳が反論した。

「あなたたちの考えは勝手よ。」

犬すらも助けられない人も多いのよ。（ここでジャコとニコライとが苦笑

した。ヨセフとエステーラは眼を見合わせて笑った。何がおかしいの？
ちゃんと聴きなさい。

エステーラも言ったけど、何もしない人の方が多いのよ。だったらこの人は優しい、いい人じゃない。

それとも眼の前に死にそうな犬がいるときに助けないでわざわざ大使館とかに行くわけ？」

ジャコが困った顔をする。

「いや、そうじゃないよ。もちろん、助けるさ。

ただ犬でさえそんなに大事にされるのに、僕らは何だったんだって感じてしまうんだ」

「だってね、わかっていて、近くにいて、それなら何とかしたいっておもうわよ。しょうがないじゃない。私たちは知らなかったし、遠いんだから」

「そうかしら。ZIPAGだってよく捜せば可哀想な人が一杯いるんじゃないかしら」

「たぶんね。でも今までそんなこと考えつかなかった。仕方ないでしょ、おもいつかなかったんだから。」

あなたたちはそう云う国に生まれたからそう考えられるのよ。でも私にはできなかったわ。気がつかなかったのは悪かったとおもうよ。でもね、あなたたちだって私と同じような国に生まれて育っていればきっと

私と同じようになつていたはずだわ」

ヨセフが静かに微笑む。

「僕は豊かで平和な国に生まれた」

杏佳が眼を陰しくする。

「あんたは特別よ」

アパロンが間に入つた。

「最高裁判員閣下、どうか冷静に。」

ご覧あれ、おやおや、善人殿はすっかり青ざめてしまつております。可哀想に。どうあれ、彼は善行を為したのです。これでは、いったい、彼は何のためにここまで呼び出されて来たのでしょうか」

しかしヨセフは冷たく言い放った。

「知ることができる環境にしながら努力を怠り、知らないでいることは既に罪だ。

僕はそうおもう」

だがニコライが反論した。

「ヨセフ、確かに君の言うとおりだ。しかし君がそのように明敏なのは君の才能なんだ。そして才能は君が創ったものではない。確かに君の知識や考えは君の努力だけれどもそれが可能になった天賦の才は文字どおり君が創ったのではなく、生まれつき与えられたものだ。まさか君も自分が生まれたときにその才能を自ら築き上げたとは言えないだろう。

君がそれを全てあたかも自分の努力であるかのように誇って他人を批判するのはおかしい」

ヨセフが笑った。

「君の言うとおりだよ、ニコライ。

だが僕の言ったことの全てが間違いではない。よって彼、百日紅氏への褒授は過大であつてはならないとおもうが、どうか。

アパロン、僕らには善を以て召喚された人たちに対する報奨がどのくらい用意されているかを知らない。どう裁定を下すべきだろうか」

「ランクは無数と言ってよく、かつ相当に裁量が認められ、いかようにも調整が可能で融通が利きます。最高裁判員閣下らが定めればそれが法

です。と言つてもお困りでしょうから敢えて言わせて戴きますが、検察省の主張する報奨の一ランク下の報奨としてはいかがでしょうか。

検察省は百日紅に与えるに相応しい報奨として彼に生涯に渡る健康を要請しています」

ヨセフが考える。

「では生涯において大病はしない。それでどうか」

エステーラが言った。

「少し可哀想な気もするけれども、仕方ないわね。杏佳、あなたは不服じゃないの」

杏佳は膨れ面をしていた。

「別に。」

それでいいわ。関係ないもん」

ジャコがなじる。

「そんな言い方は酷いな。無責任だよ。」

君は最高裁判員なんだ。関係なくはない。責任がある。はっきり考えを言えよ。僕はヨセフの考えでよいとおもう」

杏佳がジャコをにらむ。

「あら、そうなの。」

別に何も無いわ。そう言ったつもりよ。考えがなくちゃいけないの？

何もおもいつかないもん」

ジャコは黙つてにらみ返すだけ、ヨセフが肩をすくめ、エステーラが言う。

「そう。それなら仕方ないわね。あなたは賛成でも反対でもない。で、ニコライ、あなたはどうかの？」

ニコライは考え込んでいたが、

「僕は。

そうだね。ヨセフの提案でよいとおもう。実は何もなくてもよいんじゃないかともおもうんだけど。善行に報いがあれば人は報いのために善行をするようになるし、そうなればそれはもう善行とは言えない。

金儲けみたいなものだ」

杏佳は首をかしげた。

「そうかしら。」

それでいいことをする人が増えればいいんじゃないの」

ヨセフが結論した。

「僕は二人の意見はどっちも正しいとおもう。」

だから時々報い、時々報いなければよいとおもう。今日の百日紅氏は報いられた場合の人なんだとおもえばよい」

ニコライが皮肉な笑みを泛べた。

「ふうん。」

そして図らずも現にある今の人間世界の現実と同じような結果にな

つたと云うわけだ。僕は善行をしても報いられる人と報いられない人との
がいることを理不尽とはおもえなくなってきたよ」

ヨセフもおもいをめぐらせながら言う。

「そうだ。僕らの思惟は過激なようであつても結果として自然の運用に
近くなつてきている。素晴らしい。

またそう云う意味では百日紅氏にとって報奨はなかったようなもの
だ。自然な状態でも報いられたり、報いられなかったりするんだからね。
つまり結果的にはニコライの意見のとおりになつたとも言える。

ともかくも裁きは決まつた。そのように執行してくれ」

アパロンが音声する。

「最高裁判かくのごとく決せり。さにしあらばさのごとくしあれ」

一息し、告げた。

「さて。

閣下らの練習はここまでです。これからは本格的にお仕事をして戴くことになります。

検察省から送致され、最高裁判まで上げられてきた案件は現在のとこ
ろで優先順位を附され、一万件余りございます。

全案件は書類にされ、閣下らの調査研究機関に既に送付されておりますので、閣下らにおかれましては各々の補佐官に諮問して順次、お裁きを戴きたく存じます。次回の開廷は明日でよろしいか。

よろしければ明日お集まり戴き、優先順位に従って時間の限り案件を処理して戴きたく存じます」

だがエステーラが烈しく訴えた。

「待つて。」

私たちには検察省からの要請がなくとも召喚する特権があるはずよ」

「そのとおりでございます」

「私は召喚を要請するわ」

「畏まりました。何者を召喚いたしましょう」

「アゼンよ！」

今すぐアゼン將軍をここへ牽いて来て。いいえ、私がここへあいつを

牽いて来たいわ」

アパロンが困った顔をした。

「しかしながらエステーラ閣下、最高裁判員殿は皆様そろそろお疲れでございます。またお時間も既に過ぎております。最初にレクチャーがありましたので、本日のお時間は終わってしまったのです」

エステーラは引き下がらなかった。

「どうして！ 私は疲れていないわ！ ここには無限の時間があるんですよ？ 私が牽いて来るまでの間、皆は休んでいればいいじゃない」

ヨセフがなだめた。

「エステーラ、君の気持ちはわかるが、僕はアパロンの勧めに賛成だ。それに僕自身で調べてから開廷したいし。」

君自身がアゼンを拘束しに行くのも賛成できない。余りに私情が絡み過ぎてゐる。裁判と言うよりは私怨による復讐だ」

「復讐のどこがいけないの。」

誰しも罪人を裁くときに求めているものは復讐だわ。そうよ。被害者もその家族も世間も皆それを求めているはずだわ」

「確かにそう云う趣が現実的にはあるかもしれないし、それが民意の大勢であればその民意に従うのが民主主義かもしれないが、本来はそう考へるべきではない。わかるだろう」

「いいわ。私がだめならジャコに行つて欲しい。

少なくとも神軍兵にお役目で行かれるのは嫌よ」

「悪いが、ジャコもよろしくない。或る意味で君とは境遇が似ているからね。もしどうしても云うことであるなら、ニコライ、君はどうか」

ニコライが顔を顰める。

「構わないけど、何で君じゃないんだ」

「いや。次の展開を考えるとどうしてもそうなるのさ」

「次の展開？」

ヨセフが声を低くして言った。

オーソドックス

「君はイスペゴ人でイージャア教正統教会だ。クレストス教とはいずれ

ぶつかる。

明叡な君のことだ、僕の言わんとすることはわかるだろう」

ニコライが歎息する。

「ああ、いいよ。わかった」

そう言ってから向き直って尋ねる。

「では僕でいいかい、エステーラ」

エステーラは哀しみと憂いとを湛えた優しい表情で頷いた。

「いいわ。ごめんなさい。お願いするわ」

ヨセフは安堵し、尋ねた。

「ところでアパロン、一つ訊いていいか。

先ほどエステーラも言ったが、ここでは時間が無限だと聞いていたけれども、今日と云う日の終わりがあり、明日と云う日があり、最高裁判の開廷時間に限りがあり、まるで時間が有限であるように感じられる。

これはどう云うことか」

「閣下、お答え申し上げます言葉はいつも同じです」

ヨセフが歎息する。

「秩序の美か。すなわち意味はないんだな」

アパロンが燃え盛る卍を見上げて左右の手を組んで印契を結んだ。

「さにあらばさにしあれ」

こどもたちはそれぞれの秘書に伴われ、法廷を出た。正面の大階段を

下ると、各々二匹立ての龍車が用意されていた。乗り込むと城内を風のように早く疾駆し、それぞれの最高裁判員を各々の邸へ案内とした。

天叡の城は人間世界の一国家よりも巨大な複合施設とも言える。最高裁判員の邸宅は城の高所に附帯していた。庭までついてあたかも山上にある空中庭園の様相である。

「素敵。」

これが私のものなのね」

杏佳は既に先ほどまでの論争をすっかり忘れていた。車体を触りなが

ら言う。

「きれい。黒なのに鏡みたいにピカピカしているわ。漆みたいね」

ヒューレーが言った。

「むろん、漆でございます。

それから螺鈿、孔雀石。ところどころ金粉を塗^{まぶ}して漆で固めております。

ご覧ください。龍を繋ぐあの赤い綱には金糸を撚^ねって作った紐が交じっています。

それにこの龍も由緒正しい龍の一族の生まれで全身に白檀や龍涎香を薫^かじて清めています」

「本当に凄いわね、ここは。」

お城の中は天井が空のように高くて壁はビルディングみたいで廊下が広くて彫刻だらけで、何か街みたいだわ。あら、こんなところを曲がるの、階段だわ。まるで迷路みたいね。

ああ、これ、凄い！」

そこはちょうど館へ続く長い廊下で右方が無数のアーチになっており、その向こうは外の景色が展望され、イデアンブルグの街並みが遙かな下に広がっていた。まるで飛行機の窓から地上を俯瞰するかのようである。龍は紅と金糸との絨緞に脚をつけずに疾走する。

「閣下、あちらがお邸でございます」

幾つもの尖塔が聳える白いお城が遠くに見えた。それは山の岩棚に建てられた城砦のようにも見える。まるで天叡の城の城壁に備えられた胸壁でもあるかのように突き出した邸であった。

「これわ凄いわ。」

あのお城に名前はあるの？」

「白鷺城でございます」

「素敵！　って言うか、鷺って鳥だったわけ？」

廊下の行き止まりに門があり、装飾的な意味合いの濃い胸壁があり、長い槍と大きな楯とを持った衛兵が立っていた。

「あれも閣下の兵士でございます」

「私の兵隊！ 私の命令で闘うの？」

「むろんです」

「凄おい、最高つ。戦争してみたあい。

なんてね。こんなこと言っているとまたエステーラが怒りそうだわ。本当、ウザいわ。ふん、どうでもいいけどね。おもうことは止められないし。勝手に出てくるんだもん。仕方ないじゃない。どうしろって言うの？ まるで平和な国に生まれたのが悪いみたい。僻みよね。

ニコライは冷静だわ。知らないのが罪なんて、本当にヨセフって嫌な奴。でもニコライが言ってくれた。そうよ、ヨセフには才能があっただけじゃん。才能があるのは自分の力じゃないわ。

ああ、どうして帰りたいなんて言ったのかしら。もう私、おかあさんの顔もおとうさんの顔も忘れちゃったわ」

敷地に入る門が開かれ、広い森のような庭園に出た。しばらく行くと三つの盤を重ねた噴水のあるロータリーが現れ、放射状に白い路が伸びている。噴水盤を迂回すると邸の全景が正面に見えた。頭上には広々とした空があり、天叡の城の上部がその四分の一を占拠して威高く聳えている。

頭上には白雲だ。

車寄せに停まると玄関に続く大階段があり、絨緞が敷かれ、華やかな衣装の召使たちが並んで出迎えに立っている。杏佳は得意満面で階段を

上った。

「では閣下、しばしお部屋でお休みください」

案内された部屋は広く、縹子張りのソファや椅子やクッション、荘重なカーテン、背丈よりも高い壺や花であふれた鉢があり、嵌め木細工の抽斗に暖炉や大鏡が設けられ、金の額縁に嵌められた数々の絵画、壁画やタペストリー、壁の漆喰細工、第二帝政時代の室内装飾のような豪華絢爛さがある。

独りになった。興奮してあちこち移動しながら触り、見つめ、うつとりと微笑み、自分に向かって様々なことをしゃべる。

やがて疲れて窓際の椅子に坐った。ぼんやりとどこまでも続くイデア

ンブルグの街並みを俯瞰する。

寂しくなつて涙が出た。

ジャコは部屋に入るとすぐに着替えを頼んだ。

「寛げる服を、だよ。本当の普段着をね。

それなの？

いや、だめだよ。違う、もつと粗い感じの奴だよ、どうでもいいような軽い奴、つて言うか、ああ、何て説明すればいいのかなあ」

「ではもつと簡素な服をご用意いたします」

白髪で穩健そんな執事が慌てて出て行くと、秘書のイマヌエルが苦笑していた。

「閣下、寝巻きを用意させましょうか。少しお休みになられた方がよいですよ」

「ああ、ありがとう。そうするよ」

「閣下、アゼンに関するデータをまとめておきますが、いかがいたしますか」

「もちろん、読むよ。読むさ。エステーラのためにね。」

彼女、可哀想だったな。

少し寝たら勉強したいから資料を寝ている部屋に持って来ておいて。

ねえ、ところで寝られる部屋はどこかな」

「その扉を開けて三つめの部屋を左に曲がって二つめの部屋です」
ジャコは溜息を吐いた。

ヨセフは着くや否や正面階段を上がりながら命じた。

「ミカエロ、執務室はどこだ」

「ですが、閣下、執事のラファエルがご挨拶に来ましたよ」

「後で執務室にすればいい。レオナルド、すぐにアゼンに関する文献資料全てを執務室に運ばせてくれ。僕のリサーチ・センターに命じて二時

間以内に奴の履歴の詳細を報告書にまとめて提出するように伝えてくれないか。

それから君の見解も聴く」

エントランスに入ると立ち止まった。

「それとも図書室があるのかな。ならそこで打ち合わせた方が早い。文房具を運んでおいてくれ。まさかパソコンとかはあるまいね」

「閣下、ございますとも。図書室にはホスト・コンピュータもござい
ます」

「何だ、ネット・ワークまであるのか。それなら執務室でいい。データ化されていない資料だけ運んでくれ。それからポット一杯のコーヒーとチ

ヨコレートだ。

あ、待って、レオナルド。ついでに検察省からの案件全てを件名と簡単な概要とでリストにして持って来ておいてくれ。

ともかく着替える。これじゃあ、仕事にならない。いや、そうじゃない。執務室に持って来てくれ。そこで十分だ」

執務室は二階にあった。着替えをすますとチヨコレートを頬張り、コーヒーを飲んだ。「ところでミカエロ、ここには法務省のような役所はないのか」

「ごいません。裁判官が法なのです。閣下はその最高位を委嘱された裁判員です。何か気になることがございますか」

「いや。

自分の権威がどれほど制限のないものか確認したかっただけだ」

「いや、大丈夫だよ。もうそれは要らない。

ああ、どうやら既に奇蹟は始まっているらしいね。

ご覧、僕は今はもう自分独りで歩けるよ」

執務室で背もたれの高い椅子に坐り、机上の書類の山を眺めた。一つ一つを手に取り、素早く、かつ丁寧にめくる。

「ありがとう。これがアゼンの資料だね。先ず文献カードがあれば見せ

てください。自分で扱います」

しばらく資料を読んでいたが、疲れたように眼を擦った。

「酷いものだね。気分が悪くなってきたよ。

エステーラの憤りはもつともだ。

それから、フランスス」

彼は秘書に向かって言った。

「内偵はできるのかな」

「もちろんです。調査も仕事ですから」

「ではヨセフとエステーラとに何かやり取りがあつたら報告してください」

「はい」

「最高裁判員閣下を見張るのですか」

「そうさ。知っておきたいんだ。だめかい？」

もしかしたら派閥で分裂する惧れがある。動きを知っておきたいんだ」

「畏まりました」

「用心してね。ヨセフが僕の考えを予測している可能性があるから」

「細心の注意を払います。ジャコ閣下や杏佳閣下についてはしなくてよろしいのでしょうか」

「ああ。彼らは予測できる」

エステーラは興奮が収まらなかった。

「何か飲むものが欲しいわ。お願いします、冷たいものを」
秘書のエルニストが辞儀をした。

「それからお風呂に入って着替えたい。

ねえ、ニコライに連絡を取りたいんだけど、どうしたらいいの」

「電話かメールがよろしいかとおもいます」

「ああ、よくわからないわ。教えてください」

「慶んでお手伝いいたします」

ノートパソコンを抱えた補佐官のアルハンドロスが言った。

「アゼンに関する資料をお揃えいたしますが」

エステーラが烈しく眼を怒らせる。

「見たくもないわ。死ぬよりも辛いめに遭わされたのよ。ああ、とても待ってられないわ。」

「ごめんなさい。資料はいらない。あいつのことならよくわかっているの。八時間くらいはしゃべれるわ」

ニコライは空が昏いうちに眼を覚まし、ランプをつけずに執事の用意した風呂に入った。香で薫習された理髪師を呼び、髪を整えると前日に

用意していた着替えに取りかかった。パソコンを立ち上げて昨晚エステーラから来たメールを読み返す。

『親愛なるニコライへ

先ずあなたに大きな負担をかけてしまったことをお詫びします。赦してください。

それからお願いを書きます。アゼンを捕らえるときは周辺の兵士に目撃させてください。

深夜に神隠しのように誰にも気がつかれずにさうのではダメです。それから、』

ニコライは歎息し、青く燃えるような大振りのタイを締め、ラピスラズリの大きなブローチで止めた。昨晚のうちに自分が行使できる『権威』について基本的なレクチャーを受けていた。それを反芻し、振り返る。

「行こう」

今や自らこそが正当なルワーダの大統領であると主張するアゼン將軍は首都キャシヤを離れ、自分の勢力範囲である辺境地の自然の要害に築いた堅固な砦にいた。ニコライは武装した二名の神軍兵を両脇に随え、砦の中の庭に忽然と現れる。

まだ日は昇らず、薄暗い。兵士の姿は門や砦の壁の上で見張る者だけ

であつた。ニコライは左右を見渡し、神軍兵に、

「しばらく姿を消していてください」

と頼み、独り進んだ。

アゼンがいる家屋はすぐにわかつた。扉の前に二人の衛兵が立っている。眠たげで、歩み寄るニコライにしばらく気がつかないようであつた。

「アゼン將軍はここですか」

流暢なルワーダ語で話しかける。兵士はぎよつとしてニコライを見た。

「やい、小僧、貴様どこから入つて来た。いつからいたんだ」

ニコライは物憂げに肩をすくめる。

「さあ。

どこからでも入れますから」

「何だと、ふざけるな。こっちへ来るな、さあ、出て行け！ 將軍はお休み中だ。でかい声を出させるな」

ニコライはそれを見殺して訊いた。

「あなた方は善人ですか？」

「は？ 何だと？」

「あなた方は人を殺しましたか。こどもを兵士にしましたか」

「何を言っていやがるんだ。つべこべ言わず出て行けよ。出なきやあ、おめえも兵隊にして前線に立たせてやろうか」

「残念です。やはりやったんですね」

兵士の背後に神軍兵の大きな姿が現れ、一瞬で殴り倒す。ニコライは言った。

「とりあえずはこれが罰です。少しでも罪を償っておいた方があなたのためでもある。若干の越権行為かもしれないが、最高裁判所には特権があるからね」

扉には鍵がかかっていた。

「法の名の下に命ずる」

扉は辞儀するように自然と開いた。

中に入ると驚いた顔をした兵士が数人、椅子に坐っている。酒瓶やコップ、炙り肉の載った大皿がテーブルの上にあった。そして数人の女性。

一人の少女は服が破れ、泣いていた。ランプの灯が煤けたような光で照らしている。

ニコライは歎息した。

「なるほどね。見るのは初めてだけれどもよく聞く話だ。オリジナリテイがないね。どうしてどこもかしこも同じような罪しか犯さないのか」その言葉を聞いて兵士らは漸くニコライの存在に気がついたようだった。神軍兵の方に気を取られていたのである。一人の兵士が立てかけていた銃を取った。

「それをどうするつもりですか」

兵士は応えず引き鉄を引いた。弾丸は神軍兵の鎧に吸収されて痕も残

さなかつた。

「莫迦な」

銃口をニコライに向け変える。

「やい、下手な真似するとガキを撃つぜ」

「これ以上、罪を重ねるとは。どうして好んでそんなことをするのか理解できない。不利になるばかりなのに。あなたは正義に齒向かおうとしているのですよ」

数発の弾が発射された。しかし弾丸はニコライの前でゆっくりと幾つかに裂け、花卉のようにはらはらと落ちた。

「お、おい、何だ、おまえら」

兵士らは震え出した。ニコライは額に手をあてた。

「わからないの？」

あなたたちは天に逆らっているのです。好き好んで自らの苦しみをわざわざ捻出しているんですよ。愚か過ぎて何も言えない。

好きにしてください。ともかくもアゼンはどこです？」

「そ、それは」

「アゼンを怖れるんですか、この期に及んで！」

呆れましたね。地上の権威なんて天上の権威に比べたら埃のようなものでしょう。今見ていてそうおもいませんか。お金や肩書きを翳してどうにかこうにか取り繕っているだけの脆弱な権威です。

夢から覚めなさい。現実を見てください」

震え始めた兵士が指差す。

「こ、この廊下の奥の扉が、しよ、將軍の、へ、部屋です」

「ありがとう。あなたは生きている間に少なくとも一つは善いことをしました」

薄暗い廊下を進んだ。扉があつた。静かに開いた。部屋は暗かったが、ベッドで何かが蠢いているのを感じる。

「どうか。灯を」

神軍兵の掌に青い炎が灯った。それは厳めしい白い鎧をさらに冷厳に見せた。

「誰だ」

驚いてベッドから飛び起きた裸の巨漢。両脇に一人ずつ裸の女性がい
て両手と膝とで体を隠そうとしている。

「ああ、やはりこうなんだね」

ニコライは自らの眼を手で蓋った。

「何だ、貴様らは。おい、ロルフ、こいつらは何だ」

「誰も来はしませんよ。」

「あなたがアゼンですね」

巨躯の将軍は疑り深そうな眼でニコライをにらんだ。

「知るか、貴様は何だ」

その眼はぎらぎらとニコライをにらみつけた。神軍兵を怖れる様子もない。

「あなたはアゼン將軍です」

「だったら、どうした？」

「一緒に来てください」

「ふざけるな。おまえごときが。」

来いだと？ ふん、やれるもんならやってみろ。おおい、ロルフ、アドリシ、いったい、どうしたんだ！ 畜生、俺の兵隊どもはどうしたんだ」

「かかわり合いたくないのでしよう」

「何だと！」

「面倒臭い人だなあ」

ニコライは手を挙げ、それを下ろした。

外に閃光が走り、窓が一瞬、白光して部屋中の影がなくなる。大爆音とともに建物が激しく揺れ、女の悲鳴とともに部屋の一角が崩れて夜空と暗い庭とが見え、外で大騒ぎが起こった。

「雷霆です。わかりますよね？」

あなたの権力など儚い夢のようなものです。愚かな慣習に縛られて夢を現実だとおもひ込み、あなたは取り返しのない罪を犯してしまつたのです。

さあ、来て戴けますよね？」

法廷は開かれた。

五人のこどもたちが席に着く。天井からの光が強く差し込む。

アパロンが現れ、深くお辞儀をした。

「ここに召喚する。

悪辣非道の権化、天をも恐れぬ暴虐者、アゼン、遂におまえに裁きの
ときが来たのだ。連れ出せい！」

壁面に木霊するような大音声をする。

扉が開かれた。

エステーラの体が強張り震える。

両腕を神軍兵につかまれた巨魁なアゼンが現れた。興奮して両眼をかつと開き、顔面は怒りでどす黒くなっている。

「何だ、ここは。これは何だ、どう云うことだ、いったい、何の権利があつて貴様らは」

「被疑者を席へ牽けい！」

アパロンが神厳な声でアゼンの喚きを打ち消す。

翼ある兵士は召喚された者の席へアゼンを一気に運んだ。そして消える。アゼン独りが席に立っていた。エステーラが怒りでかっと眼を睜つ

た。ふてぶてしく立つ巨漢、何度も写真で見た悪逆の男が今ここにいる。耐え切れなくなり、立ち上がって席を倒し、叫んだ。

「この男を殺して！ 殺してください！」

今すぐ細切れの肉になるまで切り刻んで！ 一晩中、焼けた鉄の上で生きたまま肉を炙って！ こいつがやったように、この男を苦しめて！

いや、だめ！ この男は何の罪もない人々にそんな苦しいおもいをさせたのよ、数え切れないくらいの家族を裂いて絶望させ、虐殺したのよ！ 何も悪いことをしてない、小さな幸せに生きていた人たちを！

おもいしらせてやってください！ 今までどんな人間も味わったことがないような激しい痛みと苦しみとで永遠にこいつを責め苛んでく

ださい！」

嗚咽で言葉が続けられなくなった。激しく泣きながら訴える。

「こいつが、この男がとうさんもかあさんも兄さんも弟も皆殺しちやつたのよ、村の人も、皆、皆殺しちやつたのよ！ 幸せだったのに、こいつが殺したの！」

一瞬その凄まじい憎悪と怨嗟の言葉にアゼンでさえ青ざめた。ほかの最高裁判員も何も言うことができなくなってしまった。杏佳も真っ青になつて固まつた。

ヨセフが咳払いし、言う。

「落ち着きたまえ、エステーラ。」

被疑者に自らを語らせよう。

さあ、真実を言え」

「もう聴きたくもないわ！」

「エステーラ、落ち着いて。これは裁判だ。皆で審議するんだ。席に着きたまえ」

エステーラはしばらく立っていたが、漸く坐った。まだ身体は小刻みに興奮で震えている。

「さあ、真実を語れ」

ヨセフは再び促した。

アゼンは一国の最高権力者の威厳を以てふんぞり返り、最高裁判員ら

を蹴るよう、にらみながら見回す。そして顎を上げた。

「ふん。」

いったい、これは何の芝居だ。何の真似だ。どこの企みだ。

莫迦らしい、貴様らこどもじゃないか」

「いや、僕らはこどもでもなければ大人でもない。

最高裁判を委嘱された最高裁判員だ。おまえこそ何者か。ルワーダ革命軍の将軍、それが何だと言うのか。架空でしかない地上の権力など水泡に等しい。

自分自身の真実について語れ」

ヨセフがそう言ってなお促しても軍服姿のアゼンはせせら笑った。

「ままごとか、坊や。」

誰が貴様にこんな愚かな戯れをさせているのだ」

ニコライが呆れて言った。

「愚かはあなただよ、アゼン。まだ理解できないのかなあ。これはあなたが普段考えているような偽りの常識じゃない。何の根拠もないでつち上げじゃない。」

僕が雷霆を落としたのを見たはずだ。もし権力というものがあるとすればあれこそ権力じゃないか」

「確かに雷は落ちたな。雷はいつだつてある。それにさつきの翼の男だつてトリックさ。それとも俺に薬でも飲ませたか」

「ええ、稲妻を落としたの？ そんなこと、できたの？」

アゼンが言うのと同時に杏佳が素っ頓狂な驚きの声を上げた。厳粛な雰囲気は台なしだった。エステーラが憤る。

「あんたは黙っていて！」

「あら、何よ、私だって最高裁判員よ。」

あなたにそんなこと言われる理由はないわ」

「彼は火で炙ってもこれはまやかしだと言いたいそうだな」

ニコライが憂いを含んだ表情でそう言った。

ヨセフは表情を見せずに、

「だったら炙ってみるか。」

だがそんな必要もあるまい。真実を語るさ。ここは真実の世界だ。真の現実の世界だ。あるべき世界、本当の世界だ。心は心自身に向かつては真からの嘘は吐けない。吐けるはずもない。

アゼン、おまえの人生を語れ。誰しも畢竟は自分を語っているに過ぎないのだ。だから召喚された者よ、被疑者は真実を語らずにはいられないのだ。光よ」

天井からの光がさらに強くなった。ヨセフはなぜ自分がそんなことを言ったのかはつきりと意識していなかった。ただそれが必要であることを直観したのである。そして自分の『権威』を考えれば当然できるはずであるという感覚が現に身体に漲っていた。棧敷席からざわめきが聞こ

えてくる。アゼンは光のせいで白く見えたが、影の部分は平坦な黒であった。まるで始めて教会に入ったときのような顔で口を開け、見上げている。上には到底人工とは思えない燦々たる灼光があふれていた。

ヨセフは皮革装丁の羊皮紙ノートを秘書に持って来させるとめくる。「アゼンよ、おまえは少数部族の家庭に生まれた。貧しくて学校には行かなかったが、植民地軍の雑役兵として採用された。

今おまえにはその頃のことが見えているはずだ。この永遠の世界では過去も未来も差別の意味を失う」

将軍は口笛を鳴らした。

「そうさ、ガキのくせによく調べたな。この瞬間にもありありと眼に泛

ぶ。屈辱的だった人生があのと看開けたんだ。自分は何かやれるとずつと直感していたが、それが真実であることがあのと看にわかつた。

それに誰が見ても俺は戦闘向きだったのさ。俺は十四歳で既に身長が二m近くなつていた。とは言つても所詮、雑役兵は正規兵ではないのだ。だが俺は格闘技で常人ならぬ力量を発揮し、二十一歳で正規兵になつた。その頃既に女を三人孕ませていた。そして三十歳で曹長になつたが、それ以上は出世できなかつた。現地人はそう云う決まりだつた」

「おまえの転機は独立運動だつた。

おまえが曹長になつたその同じ年に隣国スルダンは激烈な戦闘の末、独立を勝ち取つた。宗主国ドオーチエは疲弊し、まづとうな植民地維持

より独立させて経済的に支配した方が安上がりなことに気がついた」

「そうだ。」

そして幽閉されていた国王クルテは解放された。帰還して各部族の王を部族王国の統治者と認め、連邦制を布告し、総選挙を行ない、大統領となった」

「そして首相にはクンダ族のオルデが選ばれた」

「そうさ。しかしオルデはクレストス教徒でしかも社会主義者だった。奴はクルテが部族偏重の人事を行なうのに反発し、公然と大統領を批判した」

「だがしかしオルデだって正義派じゃない。彼は未だ独立運動の戦火の

治まらぬ隣国ゴルダに武器の密輸を行い、巨万の富を築き上げた」

「ああ、貴様、よく調べたな。それとも外国じゃよく知られたことなのか。確かにオルデは理想主義者であつたが、自分に関しては赦されるとおもっていたようだ。クルテはこれを告発し、一気に失脚させようとしたが、オルデは逆にクーデターを起こした」

「自分に限っては赦されるとおもっているはオルデばかりじゃないさ。どうやら悪事を為す者の共通点らしい。その話はいずれしよう。その時間が許されればだが。」

さあ、それでおまえはオレデについた。そこで頭角を現し、とうとう軍の総司令官にまで登りつめたと言ふわけだ。

だがなぜ傭兵を集めたんだ」

「ルワーダには戦争のプロフェッショナルがいなかった。これが掌中にあり、俺の命令で動くならば実質的に国内で最強になれる。いつ誰がクーデターを起こしても不思議はなかったからな。

だがオルデは俺が傭兵を集めていることを知ると反逆罪で告訴しようとした。俺はそれを逆手に取って傭兵隊中心の革命軍を蜂起させた。傭兵はロレンス共和国の外人部隊にいたロルフがその手腕と人脈とで集めた精鋭で、我が革命軍は圧勝した。しかもオルデは無策で民衆からの支援がなかったからな。俺の人気は相当だったぜ。奴のお蔭で国は酷い状態だったからな」

「おまえに言えた義理か。ともかくもそうやって血の粛清が始まったわけだな。おまえの艦綱は権力の掌握とともに解かれ、その巨軀に宿っていた膨大な精力と植民地政策時代から鬱屈し、抑圧されていた心傷は残酷性の奔流となって現れた」

ニコライが言葉を挟んだ。

「心傷だって？」

ヨセフは嘲るようにそちらへ顔を向けた。

「そうさ。」

人間の行動は至って個人的、人間的な動機によって衝き動かされている。人民がいつの時代もいい迷惑を被る自然の仕組みだ」

「だがもしそうなら」

ニコライはそう言いかけて止めた。

「その問題は今言うときではないよ、ニコライ。僕らは何もないところに礎を置こうとしているんだ。それが法だ。

ともかくもアゼンの残虐性は解き放たれたんだ」

再び巨漢が身体を揺すってせせら笑う。

「ふ、残虐だと？　ふざけるな、俺は正義の裁きを行なったんだ。今おもし出だしても気分がよくなるぜ。どうにでも言うさ。俺は元首相の協力者を徹底的に粛清した。ケビン川の水が赤く変わるくらいにな。俺はクーデターによって事実上の最高権力者になった。

俺の台頭は歴史の必然性だったのさ。

古代の王らとどこが違うんだ？ 奴らの権威の源は何だ。少なくとも正義や慈善じゃなかったはずだぜ」

「そして一時は栄え、いずれは滅びる。

おまえは悪の帝国と呼ばれ（まるでコミックだな）、イスペゴの攻撃の的になった」

「石油のせいさ。俺はルワーダのものをルワーダの自由にしようとしたまでだ」

「そうだ。それはおまえの考えにも一理ある。もともと隣の国にまで手を出さなければね。それにおまえはテロに加担した。少なくともそう言

われた」

「あれはクレストス教徒がやったんだ。どこの国のクレストス教徒か知らんが、どうであれ、俺じゃない。だがどうせそんな疑惑は大義名分に過ぎなかったんだ」

「そうだな。要はおまえが邪魔だったってことさ。おまえの政権は一度イスぺゴに倒された」

「しかしすぐ復権したぜ。イスぺゴは混乱を招いただけだった」

「そう。確かにそうだった。しかし混乱に乗じてクレストス教徒で、かつオルデ派の将校だったボクワサがおまえの軍事政権に対する反対勢力をまとめて各地で反アゼンの戦闘行為を行なった」

「ああ、愚かな忌々しい奴だ。俺は容赦しなかった。ボクワサに協力した村を次々に焼いた。捕らえては拷問し、皮を剥ぎ、時間をかけて炭火で炙り、俺は発見した。人間は時間を幾らかけて炙ってもなかなか死なないことを。骨が晒されるまで肉が焼けても死ねないことを」

「おぞましい、何度も繰り返された醜悪な人間の暗黒史の一つだ。おまえは自らの責任において一晩で七つの村を灰燼とし、罪もない非戦闘員を、女や子どもまでも含めて二千人もの人間を虐殺したことがあった」

エステーラが声を殺して言った。

「そうよ。そして私もその虐殺の現場の一つにいたわ！

家族を殺されたのよ。わかっているの？　あなたが私の家族を殺した

のよ。

こんなに酷いことを、あなたは何千も何万もしたのよ。本当にわかってるの？

私の家族だけでもこんなに辛くて悲しくて胸が裂けるくらいなのに、あなたはそれを何千倍も何十万倍もしたのよ、本当にそれがわかってるの！」

「ふ。

勝って生き残るためさ。そして俺は自らの力で大いなる権力を掌中に入れたんだ。偉大な運命を持つ者なんだ。強者だ、生きる権利がある者さ」

エステーラはまたも憤りが抑えられなくなつた。

「生き残ることがそんなに偉いの？　生きるために罪もない人を殺すくらいだったら死になさい！

あんた独りが生き残るために何十万人もの人の幸せを引き裂くなんて！　私だったら死ぬわ！　その方が幸せよ！」

ヨセフは手でエステーラを制した。そして厳肅に告げた。

「はつきり言っておこう。民衆の恨みを買う権力者は続かない。これは永遠の真理だ。人間を力や恐怖で抑え続けられる権威は神にしかない。人間は神ではない。いずれその弱さで滅ぶ。人民の支持なくば独力ではどこまでも持ち堪えられるものではない」

アゼンはやや声を荒げた。

「へっ、俺はどこまでも力で抑えてやるさ！ 実在するものは **FORCE** だけだ。

何百万の難民があふれようと俺は構わない」

「構わないだと？ しかしおまえはその対処に困ったはずだ。難民は虐殺を逃れるために国境を越えて隣国に流出し、近隣諸国やエウロペア諸国やイスペゴの非難がさらに激しくなったはずだ。おまえは各方面によい口実を与えたんだ。またも墓穴を掘った」

「そうともさ。だが良い考えが泛んだ。国境を越えさせなければいい。国内であらかた片づけければいい。

俺は始末が悪いこの非戦闘員どもを片づけるために、まだ無事に残っている村の人間にデマを流し、難民どもを殺させた。簡単だった。

人間は勝手な生き物だ。不安を煽ればいい。餓えた難民が流入して村を襲うぞとな。

俺は武器まで貸してやったものさ」

エステーラが再び震えて立ち上がった。

「酷い！」

あれもあなたのやったことだったのね！」

ヨセフはまたも制さねばならなかった。

「エステーラ、気持ちとはとてもわかる。

だが結局それは私事だ。突き詰めれば虐殺する側の論理と同じになつてしまふんだよ」

驚愕した眼でエステーラはヨセフを凝視した。

「どう云うこと？」

「聴いていなかったのか。」

奴らは個人的な動機で暴虐を行なう。正当性を主張する全ての弁明は捏造だ。言葉や概念などどうにでも取り繕える。

いや、当の本人も真底の部分については自覚がないのかもしれない。ともかくも私心は悪への路に繋がっている。以後、自戒したまえ」
エステーラは青ざめて坐わり、呟く。

「わからないわ」

杏佳が微笑む。

「あら、私もよ」

エステーラは憎悪の眼でにらんだ。

ヨセフが肩をすくめ、アゼンの方に向き直る。

「おまえは莫迦だ、アゼン。それで反って国際的非難が激烈に巻き起こったんだ」

「確かにな。ふ。」

全部あいつらのせいだ。薄汚い商売だ。記事で儲けるためにイスペゴやエゲレスやドオーチェやロレンスのジャーナリストどもが俺の国で

うろうろしていやがった。

俺はもう我慢すべきではないと感じた。奴らに何の関係がある。人の国に入り込んでネタを漁りやがって！ 卑しい蛆虫どもが！

俺は社会正義を気取った外国人ジャーナリストどもを殺す計画を立案した。国家の最高権力者に敬意も払わぬ、おもい上がった者どもに天罰を与えるためにな。だが残念ながらそれは参謀長に止められたよ。諸外国全てを公然と敵に回すに気かとね。ふ。

ボクサワが有利になるばかりだ、とな」

「おまえもボクサワとともに外国の力を借りていて、軍事力は均衡していたらしいからな」

「ああ。

ボクサワはクレストス教徒だから反クレストスのイレエスル共和国が奴を警戒している。社会主義者だから宗主国だったドオーチエも毛嫌いしている。必然的に二国の支援が俺にはある。だがリセヤ共和国やヴードウ王国は同じ理由で奴を援助しやがる」

ジャコが歎息した。

「どこの国も利害ばかりだ。正義のために動くところはどこにもないんだな」

ニコライが言う。

「そんなことをすれば選挙で負けるからね」

アゼンが高笑いする。

「いいことを言うな、坊や」

エステーラも力なく言った。

「そうね。皆自分のことだけなのよ」

ヨセフが咳払いする。

「さあ、もういいかな。時系列的に供述は取れた。

審議に入りたいところだが、罪状については議論の余地はないな。一人の人間が負い切れる罪を遙かに超えている」

アゼンが怒鳴る。

「歴史上繰り返されたことだ、なぜ俺ばかり罵るか！」

その形相は赤黒く膨らみ、眼が憤りで爛々としていた。杏佳は震え上がる。エステーラは眉を動かさず凝視していた。ジャコが眉を顰め、ニコライは歎息し、言った。

「罵ってなどいない。

被害妄想だ。わかったよ、ヨセフ。これが心傷と云う奴の現れの一つなんだね」

「そうさ」

ニコライの憂いの表情をうとましげに眺めながらヨセフはそう言い終えてから再びアゼンに眼を向け、冷ややかな蔑みの眼差しで見下ろす。

「さて、意見を叙べよう。僕はエステーラの案に全面賛成だ。

もう一つ提案しよう。アゼンを人間世界に戻す。そして僕らは反革命軍の総司令官ボクサワに一時的な援助を与え、アゼン革命軍を潰滅させ、その協力者をことごとく屠らせるが、アゼンだけを逃れさせ、逃亡生活を送せよう。

そして最後は惨めで恐懼に満ちたまともな寝場所もない生活の果てに捕らえられ、辱められ、罵り嘲られ、異国の裁判で死刑を宣告され、墓所もなく遺骸が野晒しにされ、獣の胃腑に収められる、そう云う運命を与えよう。人間世界での永遠の汚名を着せてやるんだ。

さてその上でこの真実の世界でエステーラ案による永劫極限拷問の生活に入る。

「どうか」

アゼンが必死で怒鳴った。演壇を烈しく叩く。

「何だ、俺を愚弄するか！　ふざけるな、貴様らに何ができる！　何様なんだ、何の権限があつて！　おもいしらせてやる」

將軍が憤り極まつて決然として言うなり、五人の神軍兵が頭上より降りて巨漢を赤子のように取り押さえ、烙印を入れた。將軍は叫んだ。

杏佳は眼をつぶった。ゴドブリンのときは見える場所ではやらなかったのだ。エステーラが冷ややかに言った。

「それだけでそんなに喚くようじゃあ、その後が大変ね、アゼン將軍。でもそれは全部あなたのやってきたことなのよ」

杏佳はそれを聞いてぞっとした。

横目で見ながらニコライが溜息しつつ言った。

「僕は異存がないけれど、悪事を為せばともかくもこう云うことになるんだと云うことを世界中の人間に知らしめられないものかな。そうすれば悪は滅しないだろうか。少なくとも滅りはしないだろうか。

この救いのなさが理不尽に感じられるんだ。

こう云う結末になるとリアルにわかっていれば悪事を為す者がいるとはおもえない」

アゼンが叫んだ。

「そうだ、知らなかったんだ」

しかしヨセフに妥協はない。

「知らなくとも限度がある。おまえはもう赦されない」

巨漢の將軍は牽かれ、最高裁判員を罵る喚きと非難の訴えとともに開いた扉の奥に消えた。扉が閉じられる。

ヨセフがニコライの方を見て言った。

「よし。君の提言を容れよう。今度の裁判を公開方式でやるんだ」

「今も公開じゃないか」

「いや、人間世界に公開するのさ」

アパロンが問うた。

「では次も罪人ですね。いかがいたしましょう」

ヨセフが皆を見回し、言った。

「誰か特に案がなければ検察省から順次上がってきた審議要請の優先順位に従おう。」

それでいいかな」

放心していたエステーラが声を上げる。

「待つてよ、ジャコ、あなたはそれでいいの」

ジャコは口ごもった。

「僕は」

ヨセフも頷いた。

「そうだな。ジャコ、シヴィロは確かに裁くに価するとおもう。」

では僕に任せてくれ」

「しかし」

「大丈夫だ。遠慮することはない。これはけして私情ではない。晰らかに世界レベルで見てこれは汚い犯罪だ。どんな言い訳をしようとそれは人間世界でのみ通じるごまかしであつて真実の世界では通用しない」

エステーラが言った。

「それからもう一つ提案があるわ」

眉を顰めながらヨセフが質した。

「何だい」

「杏佳は最高裁判員に向いていないわ。辞めるべきだとおもう」

「罷免要請か」

杏佳が席を立った。

「何よ、それわ！ どう云うことよ！」

「どうもこうもないわ。あなた自分でそうおもわないの？ 呆れたわ」

ヨセフが考え込みながら言う。

「止めたまえ。」

幾ら何でもまだ早過ぎるし、エステーラ、具体的に、憶測を含まない明解な理由がなくてはならないよ」

エステーラは腕を組み、頬を膨らませた。

「どうしてそんなに面倒臭いのかしら。あなたたちだって見てもうわか

るでしょう」

杏佳が顔色を真っ赤に変える。

「どう云うことよ！ 全然わからないわ。具体的にはつきり言っ頂戴！」

ヨセフは物憂げに手を振った。

「静粛に。ともかくエステーラ、そんな曖昧じゃだめだ。裁決できない。ともかく今日は閉廷だ」

皆戻る。

邸に戻ってから杏佳はふりふり起こっていた。

「いったいなんなのよ、あの女！ マジ頭に來たわ」

ヒューレーがお茶を持って来た。

「さあ、閣下、お気を静かに。どうぞお茶でも飲んでお怒りをお鎮めください」

「きつとやる気よ、あの女。どうしたらいい？」

「今それについてはエイドスが至急検討しております。杏佳閣下におかれましては心静かにお待ち戴ければよろしゅうございます」

「わかったわ。早く教えてね」

ヒューレーが退こうとすると杏佳は止めた。

「待つて。」

ねえ、あのピンク色した車がまた見たいわ」

「キャディラックのことですか」

「たぶんそれね、私がイデアンブルグまで乗って来たあの車のことよ」

「これはいかがいたしました閣下」

「何でもないわ。」

ただあのときの幸せな気分にもう一度戻りたいの」

そう言つて少しだけ下を向いた。

ヒューレーは黙つて辞儀をし、出て行つた。

その頃ヨセフ邸ではいつもどおり速やかな指示が下されている。

「シヴィロの今後一ヶ月の全日程を分刻みで調査し、報告してくれ。それから法廷つきの神軍兵を一時的に増やす手続きを取りたい。時期は未

定だ。

何か言いたいことがあるか」

「いえ、実は最高裁判員の杏佳閣下の件はいかがいたしましたでしょうか」

「ううん、エステーラの主張はもつともだとおもうが、しかしそれで係争していたくないなあ。

調査だけはしておいてくれないか。彼女の動き、生活等についてね」

「畏まりました」

「待て」

「は」

「ついでにニコライもだ」

「畏まりました」

そのニコライ邸では秘書フランシスから受け取った報告書を読みながら言う。

「ふうん。」

そうか。

では今日までのところ、ヨセフの動きはなかったんだね。予想外だったよ。いや、今日の法廷でのことさ。内偵の必要ななかったんだ。何しろ、今日、公然と罷免請求が最高裁判員全員の前であつたんだ。それをヨセフが困惑したように制御した。と云うことから推測して、全く突発的でヨセフにも予想外のことだったらしい。何の陰謀もなかったん

だ。

いずれにせよ、今日、晰かな分裂の兆しが露呈した。

そう云う意味ではともかくも予想どおりになったわけだ。別に望んでいたわけではないけれどもね」

フランススが言葉を挟んだ。

「しかし閣下、実は報告書には間に合わなかったのですが、つい先ほど気になる動きが確認されました」

「何かあったのか？」

「はい。」

どうやらヨセフ閣下が杏佳閣下に関する調査を始めたようです。そし

てニコライ閣下、こちらの動きも調査するよう、ヨセフ閣下の指示が秘書に対して出された様子です」

ニコライは日課となった歎息をする。

「やはりそうだったか。」

適当に情報をリークしよう。僕が自分の権威を高めるような最高裁判員制度の改革を図っているとかね」

フランススは青ざめた。

「そんなことをしては」

ニコライは物憂げに優しい微笑を泛べた。

「構わないんだよ、フランスス。まさしく僕らは何も無いところに杭を

打っているんだ。

内紛は早い方がいい」

内乱の治まらぬヴィーゴ連邦のスラヴィ国議会議長が定足数を確認し、開会を宣言するとシヴィロ大統領の演説が始まった。数台のテレビ・カメラが設置され、受信可能な連邦各地放送局に向かって配信され、同時放映されている。

「しかるにエウロペア州諸国の軍事介入は我が民族の悲壮なる歴史の経緯を無視した侮辱的行為であり、これに乗じてコシイヴオにおける反

スラヴィ、反ヴィーゴ主義者たちが再び息を吹き返すことを回避するためには、更なる強硬路線、徹底抗戦こそが聖なる民族的使命であり、歴史的使命でもあり、かつてゴルデスの地で戦われたパルシアン帝国との闘争において、七百年前のその日、クレストス教徒たちが我々に何を為したか、……」

そのとき突如、会議堂の丸天井全てが轟音とともに一斉に崩れ落ち、光の洪水があふれた。

あちこちで悲鳴や叫び声が上がる。

逃げ惑って渦を做す議員たちは出口に向かった。しかし天井から落ちてきた瓦礫は光によって白熱し、次々と花卉に変じて叫喚は甲斐もなく、

かすり傷の者すら出ない。議員や撮影クルーや議会警備官、要人警護の特殊警察警護官、関係各官僚、筆記者等々、ただ呆然とするばかりであった。信じられない光景である。大きな穴となった天井には見えるはずの天井裏、若しくは空がなく、爛々たる光があるばかりであつた。

だが再び叫び喚きが巻き起こつた。激しく動揺する人々のうち何人かが天井を指している。

燦々と輝きながら降り注ぐ光はやがて光そのものようなまばゆい壮麗な甲冑に身を固めた神軍兵に姿を変え、すり鉢状になっている会議堂の壁に沿つて塀のように並び、内周を完全に制覇した。驚愕の声すら上らず、人々は行き場を喪う。

警備官の数人が反射的に銃を構えたが、たちまちそれは熱のない白い光に変じて溶けた。それを見た警護官らは信じられないと云った表情をするも互いに眼で合図し合い、銃を使うことをあきらめ、様子を窺うことで暗黙に合意する。

会議堂の扉が外から激しく叩かれた。テレビ放映を観ていた者らが会議堂の内の変事に気がつき、外で騒ぎ始めたらしい。やがて騒ぎは扉を打ち破ろうとする音に替わったが、すぐに止んだ。中にいる者にはわからなかったが、会議堂の壁の外側全体がオレンジ色の滾る炎と化したからである。その炎の中には人の背丈よりも大きな神聖文字が金色に泛び上がり、心拍のように動いていた。怪異を見て皆すくんでしまったので

ある。

神聖文字が鳴り響くような言葉をしゃべった。

「これは不可侵なり。触れる者あらば大いなる罰を受ける。近づくことなかれ」

言葉とともに会議堂の外の廊下に雷霆が落ちた。屋内であるにもかかわらず屋根も破らずにその鉄槌は下されたのである。人々は驚き、畏れ、声すらなく、跪いて祈る者さえいた。

さて、そのような騒ぎを遠く聞きながらも会議堂の中は相変わらず茫然自失の状態であつた。大剣や槍や楯を持った巨漢の神軍兵の厳肅さには人間を根底から罪の意識で畏怖させる何かがあるのである。

「武器を捨てよ」

音声が轟いた。警備官や警護官らは銃を捨てる。我に返った議員らが再び騒ぎ始めた。

「静粛にせよ」

騒ぎが収まるはずがない。むしろ声を聞いて反って騒がしくなるばかりだ。

すると静かな音楽が流れ始めた。それとともに静かに聖歌隊の合唱が地から湧くように聞こえ出してくる。堂内の光の強度は収まり始めた。ただ天井が光でできた穹そらとなつているだけだ。

静かな讃美の響きにつられて人々は自ずから鎮まった。空気の質が変

わる。

眩しく燦めく白さの装束の裾を引きずって歩く少年がいつの間にか
会議堂の中央通路を歩いていた。人々は息を呑んだ。その裾の長さは身
長の五倍にも達し、金糸の刺繍が複雑精緻な徴を大きく象り、白地を豪
華に飾っている。

ヨセフであつた。

「議長、席を降りたまえ。

そこに最高裁判員席を設ける。

何度も同じことを議論する気はないので初めに言っておくが、僕は普
通のこどもじゃない。言うとおりにしないと最悪の場合は地獄同然のと

ころに墮ちることとなる。

退くかどうか、応えたまえ」

「何だと、いつたい、貴様は何者だ。……それともこれは神の御業か」
みわざ

「少なくとも人間にできることではないぐらいわかるな。僕は至高の権威を委嘱されて今ここにいる。さあ、相応しい者に席を委ね譲れ、儂き無為の者は去れ。

それからこの場にいる全ての撮影者たちよ、僕が今から言うことをよく聴け」

今度はカメラに向かってしゃべり出す。

「さて、言うまでもなく今もこの状況を撮り続けているとはおもうが、

撮影している者は引き続きこの模様を撮影し、関係者はこの映像を全放送局に配信すること、またこれを受けた放送局は全てライブで放映すること。

もしこれを違えばその者には大きな災厄が今すぐ落ちる。それでも放映しなければさらに大きな災いがその者を襲うであろう。

だがこう言っても頭の固い愚か者たちは信じられないのだ。そして後悔する。そうならないように僕は最善を尽くしたい。僕の力を信じざるをえないような明晰な権威を見せよう。

これから五秒間、エウロペア州諸国の大地が揺れる。

僕の指の合図で始まり、止まる。

むろん放映がエウロペア全土でないことはわかっている。しかし後々のことを考えて敢えてそうしておくのだ。すなわち後になってほかの国の人たちがスラヴィイ国の人間、もしくはヴィーゴ連邦の人間が夢を見ていたのだと主張できないようにするためだ。

では、いいかな。そら」

台地は大きく揺れ、驚嘆の聲が上がった。会議堂の外で悲鳴が聞こえる。

「では鎮まれ、大地よ」

止まった。堂内を声にならぬ驚愕の表情が満たし、震える者さえいた。

「わかったかな。」

もし抵抗しようとしたり、放映を中止したりしたならばどんな災難が訪れるか、想像がつくだろう。

僕がここにいながらにしてどこの放送局が放映を中止したかが察知できることも概ね察しがつくだろう。報道関係者らが自らのために自らの為すべきことを遂行することを祈ろう、彼ら自身のために。さあ、続行したまえ。さて、と。

ああ、議長を降ろしてやってくれ。腰が抜けているらしい。さぞ愕いたのだろう。エウロペアは地震のないところも多い。州全土が揺れるなど未曾有のことであつたろうから」

最高裁判員席が神軍兵のよつてたちまち組み立てられ、ヨセフは独り

で坐ると議会議堂内を見下ろした。

「さて、あなた方もご着席願おうか」

会議堂内にざわめきが起こったが、椅子を引く音とともに静まった。
「警備警護の方々も適当に坐りたまえ。無駄な抵抗はするな。

いや、演壇にいる大統領、シヴィロ、あなたはそのままでよい。そこに立っていなさい。

さて。

僕は裁きを行なうために真実の世界、その天叡の城にある最高裁判所から来た最高裁判員です。これから公開裁判を開廷する。

あなたたちにはこれから裁判の証人となってもらおう。たとえ人間世界

で辻褄が合い、言い分として成り立つても、歪みなく一直線な天の見解に妥当しなければ憚るべき刑罰を受けることを明確に認識してもらいたいために僕は敢えて公開裁判に踏み切った。公開の機会がないから今までは誰もこれを知らなかったのだ。

だからそれを知らしめる。これは親切だとおもう。

では僕以外の最高裁判員にも来てもらおう」

炎の車輪を廻す四台の二頭立て龍車が光の穹から舞うように現れ、しばらく頭上を戯れるように行き交い、やがて各々の最高裁判員席の上で停まり、儀装した神軍兵が偉大なる裁判員を車から降ろした。各人は兵に伴われ、羽毛のように軽々と揺れながらそれぞれの席上に落ち着く。

しかし車は四台でも降りた者は三人であつた。一台は空車だったのである。

降り立ったのは厳しい表情のエステーラ、放心した物憂い表情のニコライ、表情を固まらせているジャコ、杏佳がいない。ヨセフが訝しげに周囲を見回す。。

最高裁判員の降臨で起こったざわめきは厳肅なる雰囲気のためにもたもたに止んだ。

「いったい、誰を裁く気だ」

漸く意気を取り戻してシヴィロが眼を怒らせて大声を上げた。

ヨセフが冷厳と言ひ放った。

「愚か者、尻尾を出すとはこのことだな。

言いか、よく聴け。罪の意識があるから逆上して訴えるのだ。すなわちここで裁かれるのはあなただ、大統領スロヴォ・シヴィロ、意識しているかしていないかは別にして、あなたはあなた自身の罪を認めている。いいか、どんな理由であれ、罪を犯していない人間を殺せば痕跡が必ずその心に遺される。それが自らを裁くのだ。たとえ仕方ない状況であっても容赦はされない。それは真っ直ぐで妥協がない。自分自身の本心だからだ。妥協なく自分自身をあからさまに知り、ゆえに責め続ける。常に責められているから罪人は敏感に反応するのだ。

さあ、被疑者は既に所定の席にいる。その演壇こそが被疑者席だ。

シヴィロ、これからあなたを裁く」

大統領は不敵に笑った。

「貴様が私を裁くだと。何の罪で、どんな理由でか。貴様らも西方の論理に与するものか。

私は聖王の遺骸を元のあるべき正統な場所に戻し、我が民族の悲劇を敵の血で贖い、民族の偉業を遂げた者だ」

そのときである。議会議堂外の廊下で人々の大騒ぎが始まり、再び雷鳴が轟いた。今度は壁が崩れる。堂内にまたも起こった助けを求める叫び声をファンファーレとしてその崩壊した壁の穴からピンク色のキャデillacが飛び込んで来た。

「最高裁判員、杏佳閣下である！」

ヒューレーが車窓から身を乗り出し、少し赤面しながら高々と叫んだ。運転手が降りて扉を開く。傲然とした表情で杏佳が降り立った。

「さあ、私よ！　最高裁判員よ！」

誰もが呆気にとられた。ヨセフが我に返り、苦虫を潰した顔になる。

「あの莫迦が！」

台なしだ」

エステーラが怒鳴る。

「杏佳！　あなた、いったい、何やっているの！」

ニコライが笑った。

「これも予想外だ」

ジャコが声を張り上げる。

「壁をふさいで。邪魔が入らないように」

ヨセフが落ち着きを取り戻す。

「大丈夫だ。神軍兵が壁のごとく護っている。核兵器を五百ダースそろえたって入り込めないさ。

反ってより多くの人に生で傍聴してもらえる。結果的には好都合だ」
杏佳が気取って大声を張り上げる。

「さあ、シヴィロ、あんたを裁いてやるわ」

ニコライが肩をすくめ、ヨセフが呼ばれる。

「杏佳、もういいからこつちへ来てくれ」

唇を尖らせて応えた。

「ふん、わかつているわ」

人々が笑うべきか騒ぐべきかも定かならぬまま、裁判は開廷された。
アパロンがニコニコして空気の中から現れる。

「では罪を叙べよ、被疑者シヴィロ」

「何だと！ 誰が被疑者だ！」

烈しい勢いで雷霆が堂内に熾り、シヴィロの前に落ちて炎と煙とを上げた。アパロンが冷ややかに言う。

「つべこべ言うな、罪人。いいからしやべれ。わかったか、罪人」

歯噛みしてシヴィロはしばらく黙っていた。天井からの光によつて堂内に次第に爽やか気が霞のように漂い始める。真実の世界の空気が流入しているのだ。

ヨセフが神々しく宣告した。

「存在者は自らを語る。自らを現象させる。それが存在だ。

シヴィロよ、自らを語れ」

突如、大統領の脳髓がスイッチを入れた幻燈機のようになって脳裏に様々な出来事を映像する。

「何だ、これは」

ニコライが代わって言う。

「あなた自身さ。あなたの心だ」

「私の？」

ああ、ありありと泛ぶ。そうだ。あれは私がまだ黨員だった頃だ」

当時のその日、彼はポリノイヤの地方大会に党本部から派遣されて赴いていた。

「クレストス教徒の多い地域だった。スロヴィ人リセヤ聖教徒はそこでは少数派だった。大会の会場となった市会堂の外には正統教会の信徒たちが団体で押し寄せ、抗議運動を始めた。警護官らは彼らを抑えていたが、私はそれを弾圧であると断定し、止めさせた。

『待て。私は彼らの話を聴く。こう云うことのために私は本部から来て

いるのだ』

私は十数時間に渡って虐げられた人々の声を聴聞した。彼らの受難の話を聴き入った。スロヴィ讃歌が自然と歌われた。私は民族の聖なる使命を感じた。以来、ナシヨナリストとなった」

ヨセフが欠伸をした。

「おまえは民族感情を煽ることが政治的に有効な手段であると以前から考えていたんだ。そうであろう」

シヴィロの顔に奇妙な苦悶が泛んだが、やがて唇がしゃべりだした。

「民族としてのアイデンティティは人を根源から揺さぶる。誇りを奪われ、心傷ついた者ほどそれが顕著だ。宗教のようにアヘンだ。」

私はその効用に気がついた。人を炎の塊とし、狂信的なクレストス教徒のようにする。私は民族主義のマントを羽織り、たちまち権力の座に就いた。

私は望んでいた地位を手に入れたのだ。悪いか」

そこまで一気に捲くし立てると慌てて口をふさぐ。

ヨセフは肩をすくめ、カメラに向かって言った。

「今のは少なくともスラヴィ国の各地に流れただろうね。

つまりあなた方は騙されていたのだ。偉大なるスラヴィ国、偉大なるスロヴィ人の苦難の歴史に僕は最大の敬意を払う。悲劇の歴史に深い理解を示したい。しかしこの男はその民族でありながらこれを利用し、自

らの権力のために隣人である無辜の他民族異教徒を虐殺し、自らの出生たる偉大な民族、偉大なる歴史を汚したのである。

その上、あろうことかこの男は聖なるリセヤ聖教をアヘンに喩えた。ついでクレストス教徒をも狂信者と呼び、愚弄した。

悪魔。

おまえを一言で言うならそれだ」

シヴィロは顔色を赤みを帯びた恐ろしいどす黒さに変え、眼をぎらつかせる。

「虐殺だと！ 奴らは我々を滅ぼそうと企んでいたんだ」

「おまえらがでっち上げたプロパガンダさ。ナチスと同じ手口だ。民衆

の危機感を煽る常套手段だ」

「私たちは受難の報復をする正統な権利を持つ」

「そうだろうか。いつでもあなたたちが全ての局面において被っているばかりだったであろうか。厳密に見ればなかなかそうはいかないだろう」

「我が民族の歴史を侮辱するか！」

「僕はスロヴィ人の歴史を偉大で悲壮で勇敢であると見做している。

おまえの民族を辱めたのはおまえ自身だ。おまえの推奨した行為を世界がどんな眼で見たか考えてもみないのか。『民族浄化』、その忌まわしい言葉を世界がどのような眼で見たかをおまえは考えたことがある

か。恥ずべき集団レイプだ。

僕の研鑽によれば男の性的欲望の基本形は攻撃性だ。攻撃状態の中でその高揚は性的に迸る衝動とシンクロする。

おまえはそれを利用しただけだ。どう考えてもレイプが民族浄化に繋がるものか。強姦して生ませたこどもがスロヴィ人などと云うプリミティブな考えをする人種だとスロヴィ人を世界に誤解させてしまったことだけでもおまえは充分に自らの民族を汚している。

聴け、シヴィロよ。絶対に理性でなければならない。

仲間うちで自分を称揚することはどうにでもできる。そんなものは勝手なでっち上げだ。真の理性的判断は自己のうちに留まっては為せない。

一般に通用する客観的基準でなければ理性的ではない。理性的なものは常に脱自的だ。脱自的であることが崇高なのだ。それが人間の精神の発展史から如実に推察される唯一の結論だ。

僕ら人間はそれ以外の方向を持たない」

だがシヴィロは嘲笑った。

「愚論だ。外国の連中に何がわかるのか。民族が負った使命、民族の崇高、私たちの崇高な、民族的な行為の真意が、悲愴にして崇高な、聖なる民族的高揚の感情が貴様らにわかってたまるか。

辱めを受けた我が民族の怒りは正義だ。民族が受けた凌辱は民族へ返す」

そのときジャコが叫んだ。

「どうして民族なんだ。クレストス教徒の誰かがあなたの家族を傷つけたら全クレストス教徒が報復の対象になるのか。

あなたは逆の立場だったらそうおもえるか。もしスロヴィ人の誰かがクレストス教徒の誰かを傷つけ、そのクレストス教徒が復讐のためにその件には何の関係もなかったあなたの家族を傷つけたとしたらそれを正当な行為だと納得できるか。

ましてやそれが過去の人たちに起因することであつても納得できるのか」

ニコライも言う。

「そうだよ。」

大原則論に立ち返るべきだ。報復は当事者に為されるべきだ。また報復する権利も事件の当事者のみにある。そうでなければ永遠の血の連鎖があるばかりだ。身に覚えのない罪で自分や家族を殺傷された者がどうして恨みを擁き続けずにいられるものか」

ヨセフが宣言した。

「明解である。シヴィロの罪は決した。自らの欲望を満たすために民族を汚し、裏切り、罪のない人間を殺し、殺させ、誤った方向へと復讐を煽り、謳い、正義を汚した。」

ここではつきりと言おう。

罪は当事者のみにある。復讐は当事者のみが当事者のみに対して為すべきである。復讐に関しては当事者にのみ限られるのが理性的判断である。それによつてしか永遠の平和はない。

ただし様々な事例が想定できることからこのことは飽くまで大原則としなければならないが

シヴィロが憤怒し喚く。

「なぜ我々ばかり裁き責めるか。蔑みだ。不平等だ。だったら、なぜアヘン戦争は裁かれなかったのか」

ヨセフは傲然と言い放った。

「なるほど、アヘン戦争は恥ずべき戦争だった。だが恐らくもう裁きは

終わっているだろう、真実の世界においては。

それにしても我々ばかりだと言うか？　僕らが今責めているのはおまえだけだ。国家が為した罪は当事者である為政者か、為政者を動かせる金持ちか、それに関与できる地位や立場にあった者にも問われる。必ずや当事者個人、若しくは限定された特定の集団がいるはずだ。

けして国単位、民族単位、宗教単位に対して恨みを擁くべきではない」
シヴィロはヨセフを指して罵詈した。

「貴様はエウロペアの平和な国で生まれた人間だろう。平和な国に生まれて何もされていないからそうおもえるのだ。呑気な戯言だ！」

ジャコが声を高ぶらせる。

「僕は違う。僕の家族は殺された。」

あなたの指導の下に動いた国家権力によつて殺されたんだ。あなたに殺された。酷い死に方だった！　僕にはあなたに報復する権利がある！」

ニコライも声を上げた。

「僕はイス・ペゴ人だが、けして安穩ではない。シヴィロ、あなたが言うような、復讐とは縁のない呑気な境遇ではない。家族を殺された。」

僕の父はクレストス教徒のテロリストに殺された」

一瞬、恐ろしい沈黙が蓋った。誰も言葉が途絶えた。ジャコは眼を睜いてニコライを見た。

ヨセフすらも混乱した。

エステーラが言う。

「ニコライ、あなたはジャコを憎んでいるの？」

「いや。」

そう云う意味で言ったんじゃない」

ニコライの言葉にヨセフの眼が鋭くなった。ニコライはさらに言う。

「僕はジャコが好きだ。第一、彼が僕の父を殺したんじゃない。だから彼には関係ないさ。僕の考え方はさっき言ったはずだ」

しかしジャコは何かをおもい、黙っていた。

エステーラがまた問う。

「ジャコ、あなたはイスペゴを憎んでいるの？ 正直に言つて。私にもそう云うときがあつた。でも今は違ふわ。全ては理性で判断しなければならぬからよ」

しかしジャコは応えなかつた。

ヨセフが困惑しながらも厳しく告げる。

「裁判に関係のない話は止めたまえ。

シヴィロは自らが人類へ為した罪を全て同じように永劫に受ける。それは死後だ。

異存あるか、諸君」

ともかくも四人が黙つて頷く。ヨセフは急いで促した。

「裁きは決した。よし、アパロン、閉廷だ」

大きな閃光とともに全てが消え、杏佳が残した壁の穴以外は全て元どおりとなった。

帰還する龍車の中でヨセフは腕を組み脚を組んで繻子のクッションに埋もれるように深々と革張りのベンチ・シートに坐り、考え込んでいた。イデアンブルグの天叡城に着くと御者が恭しく降車用梯子を置いてシルクの絨緞を敷く。随行車から降りて来て深く辞儀するミカエロに言った。

「明日の会議に使いたい。至急に例の要請書の草案を見せてくれ。各最高裁判員の都合がよければ是非とも明日の案件の一つにしたい」

その翌日、会議の席に皆が着くと進行役のアパロンが促した。

「さて、次回の裁判で審議すべき案件ですが、検察省から小・中・大裁判を経由して上がってきました審議要請案件がだいぶ溜まっております。そこで」

ジャコが口火を切った。

「いや、僕には裁判にかけたい人がいる」

皆黙ってジャコを見た。

「僕はイスペゴの大統領を裁きたい」

ニコライが声を上げた。

「何だって！　なぜ？　彼がそれほどの罪を犯しただろうか」

ジャコはニコライをにらむ。

「彼は戦争犯罪人だ。彼の政策は不平等で自己中心的だ。自国の利益、自分の権力への欲望、自らの抱いた勝手な理想の実現、イスペゴの大義はイスペゴ人の大多数にとっては誇りだろう。大半のイスペゴ人にとっては自明で理性的、民主的な判断だろう。彼らは自国の国民の犠牲者が増え始めるとたちまち反戦運動をする」

ニコライが苦い顔で反駁する。

「そんなのはどこの国も一緒じゃないか。それに犠牲者が増えなくても反戦運動をする人はいる」

「それこそどこの国も一緒だよ。いつでもどこの国でも一部の人は反戦

運動を継続している。

僕が嫌なのはイスペゴ国が自分たちの価値こそが世界のスタンダードだとおもっていることだ。イスペゴの特徴は他の国の文化や価値観を理解しようとしらないことだ。信仰厚いクレストス教の国でイスペゴの女性兵士がノースリーブで闊歩する。神聖な大聖堂に入ろうとする。それを咎めると迷妄だとか、非理性的だとか、女性蔑視だとか言う。

たとえ受け入れがたくても他国の歴史や文化を軽々しく自分たちの価値観で批判すべきじゃない。真に理性的な者は脱自的でなくてはならないはずだろう」

「君の意見には一理ある。だが僕の国は人種や文化の坩堝だ。多様な価

値観に対して他国以上に認識を持っている。

それに君の批判にあたる国はどこにでもあるよ。大概皆同じじゃないか」

「いや、イスペゴは自分たちの価値観を押しつけて他国を侮辱している。なぜなら彼らには巨大な **FORCE** があるからだ。イスペゴが軍事介入する国は限られている。国益や権力基盤のために偏った特定の団体の味方をしている」

「それこそこの国も同じじゃないか。それが政治さ。確かによくはないかもしれない。もつとも貧弱な未開の国の一部には例外もあるかもしれないが」

「それだ。その言い方だよ。

イスペゴはその巨大な武力に驕り高ぶっている。

アゼンやシヴィロは申し子に過ぎない。この世界情勢の罪はイスペゴにある」

しかしさすがにヨセフも言った。

「待ちたまえ。その手の問題はいつの時代も平行線だ。

永遠の平和は夢だね。どちらかが滅ぶまで、止まないのか。だが民族殲滅なんてことにはなりはしない。偉大なイスラエル民族の栄光と苦難との歴史がその証明だ。苦渋の時代もあったが、今ではアメリカ合衆国にさえ大きな影響を持っているじゃないか。それを見ても晰らかだ。い

かなる災厄や受難があろうとも一つの民族が滅びることなどない。そして生き残る限り闘いは続く。

とすれば民族紛争はどうしても永遠の不幸、永遠の血の連鎖だ。誰もがわかっていながらどうにもならない。

いや、こんな大風呂敷な話を始めては余計に收拾がつかなくなるな。

ジャコ、君の言うことに一理あることはニコライ自身も認めているが、ニコライの言うとおりの問題はイス・ペゴの大統領一人に限ったことではあるまいし、罪と言えるかどうか微妙だ。

なぜなら多かれ少なかれ大国はその罪を犯している。いや、或る意味では大概の国家が本質にその要素を持ち、潜在させている。

だから罪を現今一代のイスペゴ大統領に帰することは到底できない。誰がどう考えても不当だ。

多くの国の政治家が特定団体のために動き、事実上の背信行為をしている可能性は極めて高い。イスペゴの今の大統領にもしそれがあつたとしてもアゼンやシヴィロのような極悪人とまでは言えない。第一、君はそのことについて詳細な調査したのか」

「いや、調べてはいないさ。だが晰らかだ。そうでなければどうしてクレストス教徒が命懸けで闘うものか。晰らかに僕らは差別され、搾取され、宗教や価値観や文化を侮辱されている」

ニコライが厳しく尋ねた。

「では君はテロリズムを肯定するのか」

ジャコも強く言い返す。

「肯定などしない。」

だがイスペゴの行為は合法的テロリズムだ。『合法』と云う意匠にくるんだあからさまなテロリズムだ」

「そうかもしれない。だがそれをテロリズムとは言わないよ。守るべき倫理が守られている。爆弾で人を殺しはしない」

「いや。迫撃砲やミサイルで人を殺しているさ。百年以上前から諸民族を辱め、武力を振るい、数え切れない人々を殺し、また軍を駐在させて児童をレイプしている。」

しかもイスペゴは一度も裁かれていない」

エステーラも言った。

「そうね。確かにイスペゴやエウロペアは様々な罪を犯しながら一部の国を除いては一度も裁かれていないわ。

彼らは常に傲慢だった。私たちは平和な国々の犠牲者でもあるわ」

ヨセフが再び入る。

「なるほどね。そうかもしれないが、誇張だ。それはイスペゴに著しく見られるだけであって本質的にはほかの国々も歴史上数々の場面で行なった犯罪だ。

ジャコの論で言えばほかにもたくさん裁くべき国の権力者や実力者

がいるはずだ。それを厳密に質し、その根源を溯れば小さな社会にもその構造は及び、むしろ全世界を裁くべきだと云うことになるだろう。

最も僕はその意見に賛成なのだが。いずれはそうすべきなのだ。全世界は一度は神の鉄槌なる雷霆で肅清されなければならない」

杏佳が驚いて叫んだ。

「ええ！ 世界中を裁くの！ 疲れちゃうわね。でもZIPAGは何もしていないとおもうわ」

ニコライが眼を丸くした。

「莫迦な。君の国は戦争犯罪で裁かれたことがあるはずだ」

杏佳も眼を丸くした。

「ええ、知らないわ。いつそんなことがあったの？」

ヨセフが言う。

「七、八十年くらいまえだよ」

「何だ、そんな昔のこと」

「何言っているの、杏佳。シヴィロはアヘン戦争の喻まで出したのよ。それとも戦争犯罪に時効でもあるの」

「知らないわ。へー、アヘン戦争って随分と昔のことだったんだ」

ヨセフが冷たく告げた。

「僕は今はつきりと言おう。」

杏佳は不適任者だ。今の発言を聞いただろう。君たち全員が証人だ。

ほかにもシヴィロの裁判のときの逸脱行為がある。僕は彼女の罷免案を提議したい。そして決議の上は最高裁判員の決議としてサティアに対し、杏佳の罷免を要請したい。

「どうだ」

「ちよつと待ってよ、何よ、それわ。私がクビってことなの！」

「賛成よ！」

エステーラがすぐ言った。そして、

「ジャコ、あなたの意見はどうなの」

「どっちだっていいさ」

「ニコライ、あなたは」

「僕は反対だ。

杏佳のような人がいていい。僕らは様々な境遇から集められている。その主旨を忘れたのかい？

一人の見解や一地域の見解のみを聴いてはならないとおもう。僕らは知らないことは既に怠慢の罪だと断定した。もし僕らが相反する様々な見解を聴かず、それによつて考え方の偏りや無知が生ずればそれは自己責任だと云うことになる。それでいいのか。

確かに杏佳の発言は呆れるようなものが多い。だが現にそう云う人間も多いのだ。それはそれで人間の一つのあり方として意見を聴いておくことが最高権威の判断を要求される僕らには万全でよいのではないか。

理性は脱自的だと云う定義にも適合する」

「でも限度があるわ」

「ちよつと私に言わせてよ、私にだって言いたいことがあるのよ！」
杏佳はそう言うどブリーフ・ケースから書類を取り出した。

「えーと、時下益々ご清祥のこととお慶び申し上げます」

ヨセフとエステーラが顔を顰め、ニコライが吹き出した。ジャコはきよとんとする。杏佳は構わず続けた。

「諸賢らにおかれましては我が敷衍するところの大演繹をご静聴戴けますことと、深く激しく感謝いたす次第でございます。

さて、広く公衆の意見を聴取せんとしてこの度、究極真実奥義サティ

アが布かれました最高裁判員制度ではありますが、この主旨は衆から偏らず人選し、また作為なき年少の人を集めて最高裁判の業務を委嘱し、より客観一般の論議に到達せんとするとともに、従前の慣例停滞を打破し、新風を吹き込み、より高く深く大きな超越を実現せんがためのものであります」

エステーラが言葉を挟んだ。

「杏佳、いい加減にしてよ。あなた、補佐官の作った原稿を棒読みしているだけじゃないの。そのことは今論議したばかりじゃない。自分の言葉でしゃべって欲しいわ。まどろっこしい」

ニコライがその批判をさえぎる。

「いいじゃないか。

補佐官が説明文を練ったって罪じゃない。杏佳、続けておくれよ」

「言われなくたってわかっているわ。

えーと、しかしながら誠に遺憾ではありますが、一部最高裁判員におかれましてはこの制度を私情の復讐に用い」

エステーラが叫んだ。

「どう云うこと、私たちを非難しているのね。

そうよ、復讐だわ。でも正義の復讐よ。けして自分のためだけじゃない。アゼンもシヴィロも世界が認める共通の悪党よ。それが私的な復讐ですって！」

ヨセフも言った。

「ふ。杏佳の言うことも一部は妥当であるが、全部ではない。

世界の敵は一個人の敵でもある。その逆は真理ではないが、一個人が常に世界の構成員である以上、世界の敵と個人の敵が合致することは不条理ではない。

すなわち個人の復讐が世界一般の裁きと合致するならば個人の復讐は私情の復讐と云うことにはならない。

だとすれば復讐であることを必ずしも非難の対象とすべきではない。多かれ少なかれ、刑罰はその感情に復讐を含んでいる。世間が極悪人の死刑のニュースを安堵と歓呼とを以て迎えるのは自然な感情であり、そ

ここには人間矯正の情は微塵もない。それでもけして非情とは言えないのだ。相手が暴虐非道なら止むをえない。

人の感情は建前はどうかあれ、晰らかに罪の償い、報復を求めている。死刑が残酷なら被害者の運命は残酷ではないと云うことだ。結果的にはそうなる。現実が必ずや選択を迫るからだ。どちらかを択ばなければならぬ。非道な犯罪者の人権を守ったがために被害者が再び被害を被ることなどが如実な事例だ。

何度も言うが、人権は絶対不動ではない。全てには根拠が必要だ。人権を維持する根拠を失った者に人権はない。原因のないところに結果は生じない。

僕は公正な義に基づく復讐を否定しない。非道な行為を為された当事者が非道な行為を為した当事者に対して為す復讐は自然だ」

杏佳はその言葉が終わるのを待つて続けた。

「そして復讐の妥当性を認めることは動物性への回帰であり、それを公義として運用すれば必ずや過剰に利用され、その趣意を失い、残虐非道の人間性否定、剥奪に道を開くでありましょう。なぜなら全ての、いや、多くの人、国家、民族、宗教は自らを義しいとおもうからです。この自己肯定癖を改めない限り民情に従う復讐の肯定（或る意味での人間性主義）は非常に危険なものであり、論旨としての確であつても実践にあたつて不適合であり、運用に難があると言わざるをえません。

また復讐の妥当性は誰が批判するのでしょうか」

ヨセフが声を荒げた。

「そのために僕らがいるんだ」

「妥当性を缺いた復讐は当事者から当事者へであつてもさらなる報復を生むことでしかない。否やたとえ正当な復讐であつても被害者側にそれを正当とする認識がなければやはり連鎖を生むことでしかない。そして普通それが起こりうる。どこの世界で復讐を果たされ、『善哉』と嘯いて手を叩き、頷き納得する者がおりましょうか。かようにヨセフ最高裁判員及びエステーラ最高裁判員の義とすると、大いに過ちておると存ずるところであります。

全ての人は自己を肯定する、それに貫かれた塊でしかない。これが諸悪の根源です。非脱自的では。

いみじくも過日、ヨセフ最高裁判員が言われたとおり、脱自が人間の精神発展史の志向だとすれば両最高裁判員の論調はこのテーゼに抗い、虚しく獣化を進捗させるものと言わざるをえません。

繰り返します。人を誤らせるもの、それは自己肯定であります。非脱自的な自己への肯定は古今東西世界に蔓延しています。

この真の敵をこそ討ち果たすべきなのです。

不肖、杏佳・衣斐^{えびわら}笑わ、かくのごとくに思料いたします次第でござ候。

まったし

完」

杏佳は原稿を攔くと訊いた。

「意味わかった？」

ニコライが言う。

「それは君に訊きたいよ。」

いや、意味は充分にわかった。僕は反省したよ。

杏佳よりも不適任者はヨセフ、君だね」

「裁判で審議を経た裁定は皆の合議による結果だ。なぜ僕だけに問う。当事者から当事者への論を最初に定義したのは君だ」

「そのとおり。だが事実上、君が多くの場面で決定を下している。裁判記録を廻すから見るか？」

「責任転嫁か。わかつていたね、こうなる運びが。だから用意がいいんだ。」

しかし僕が罷免要請するのは杏佳ばかりではない。最高裁判に批判的な態度を取るニコライ、君もだ。君は内服して議論を尽くさず、ただ批判的な態度を取るばかりで士気を曇らせ、僕らの進歩を大いに妨げている。

僕の方こそ裁判記録を廻させてもらうよ。君の罷免要請書に添付する理由書として裁判記録から事実を抜粋し、説明及び批判理由を附した」「君は熱心に裁判記録を読んだらしいが、少々解釈が強引なようだね。最高裁判に自浄力があって何の問題がある」

「君のは批判ではない。虚無的で、揶揄するかのごとく皮肉な態度を取っている」

「虚無的な思想の君からそう言われるとはね。

僕が時節をみて意見を開陳するつもりだったと言えはどう責める気か」

「未だないことが何の根拠になるか」

「ふ、ヨセフ、未来は常に存在しないものだよ。僕の心が見えるわけでもないのに簡単に批判されたくないね。わからないのか、ここは真実の世界だ。自由意志を与えられた僕らであつても自分自体には嘘が吐けないはずじゃないか。」

くだらない議論だよ。おっと、これがニヒリスティックなのかな？

しかしヨセフ、そもそもニヒリストの君にどうしてこうも虚無的だと僕が責められているのかな。

それに君が虚無に杭打つ秩序の美になぜこうも魅せられているのかも疑問だ。虚無主義へと君を導くモーゼはどうしたのか。まるで彼がシナイ山に登っている間に偶像崇拜をしてしまう民衆のようじゃないか。だがわかる。僕は君に権力への意志を読むよ。それは自己肯定の一形式だ。

君は全てが無空だと云う結論に到達している。それは美しい結論だ。脱自性に^み盈ちている。それなのに君は虚空に杭打つ秩序の美しさに惹か

れた。ヨセフ、恐らく君は余りにも燦然たる眞実奥義の光に眼が眩んだのさ。違ふかな。

僕は君に対する杏佳の批判は妥当だとも思う」

ヨセフが静かに、慎重に言った。

「しかしそれでは眞実の世界やイデアンブルグをも否定することになるが」

「そうかもしれない。

だがそれが必要じゃないか。常に批判によつて自己超越を繰り返し、革まるものが正義であり、理性であり、自然の摂理や神の法に適うものだとも思う。僕らが集められた主旨もそこにある。その意味ではこの選

扱がけして的外れではないこと示唆するようにおもわないか。

だがそもそもサティアが言っていたはずだ。全ては無空である。気にすることは無い、とね」

エステーラが訴える。

「ねえ、あなたたちは雲の上で闘っていてこっちには少しもわからないわ」

ジャコも言う。

「何か、本旨から随分外れているような気がする。虚しい空論だよ」

だがヨセフはその言葉を無視し、熟考していた。杏佳はただ自分が起こした波紋の結果を得意げに待つ。

沈黙の時間が流れた。アパロンでさえ晦渋な表情である。その深い沈黙の後にヨセフが言った。

「和解しよう。」

ここで意地を張るのはまさに自己肯定でしかないし、僕も自己の肯定が諸悪の源泉であることを明確に認める。

エステーラ、いいね」

「何だかわからないわ」

だがヨセフは構わずおもいを吐露するように熱を帯びた口調で続けた。

「そしてもう一つ提案したい。僕らは脱自的傾向を強力に増大させる。

これこそが空莫に打つべき真の杭だ。サン・パラが言うような秩序の美は世を是正するが消極的だ。僕らはむしろ虹のような空架の秩序を破壊し、ときに創造もする、そうであるべきではないか。それがサティアの言う委嘱の主旨を真に充たさないか。

だから僕はこれを杭と言うよりは剣と呼びたい。自己肯定を削ぐ正義の剣だ。無空は無空でしかない。無味乾燥を哀しむのは自己執著があるからだ。脱自的であればそれすら光だとおもう。

なるほどニコライ、君は調べたのか、看破したのか知らないが、君が言うとおり僕はニヒリストだ。

だがこの真実の世界の権威に眼が眩んだのではない。

美のために美を打ち立てる。そう云うニヒリズムさ。だがそれも終わりだよ。究極の脱自を目指そう。それは無空だ。正義の剣が全て削ぎ落とし、清らかで舜かで睿らかなる爽快の自在に歓楽しよう。先ずは心に永遠の平和をもたらしよう。

僕はさらに提案したい。罰するより前に、また正義を褒奨する前に、悪に挫ける心を助け、善のみを胸に芽生えさせ、驕り高ぶる人々の情をあらかじめ抑え、また不幸に挫かれる人々を救い、悪を為す人を止める手段を講じるべきだ、と。

結果を裁くよりも前に悪と不幸との原因に対処したい」

エステーラが言った。

「そうだわ。私たちが望んでいるのは裁くことよりも救うことよ、私だつて救つて欲しかった。家族を救つて欲しかったわ。」

終わつてからでは、そうよ、死んでしまつてからでは取り返しがつかないのよ。本当に必要なことが真実奥義じゃないの？　そうじゃなきゃ真実奥義つて何なのよ。意味ないわ。

裁判なんかやっついていられないわ。この力をそう云うことに使いたい。サティアに交渉しましょうよ。

もしそれで報奨を失つても構わないわ。正義のために生きて正義のために死ぬ。それが真の幸せじゃないかしら」

その強い言葉にしばし沈黙が起こつた。皆或る種の名状しがたい決定

的な衝撃を覚えたのだ。

ヨセフが頷く。

「そうだ。それこそが最後の結論だ。そしてその正義は義しく虚しいのだ。しかし僕らはそれゆえにそれを望む。無空こそが脱自だからだ。そこにこそ永遠の光輝があるからだ。

さあ、始めよう。

ともかくも裁判は結果を裁くことでしかない。未来のために裁くことは可能だが、積極性が強いとは言えない。結果を裁いて見せしめにするか、賠償をさせるかでしかない。いずれにせよ、間接的に未来に寄与することではないんだ。

交渉しよう。そして脱自的な進化を促進させるんだ。脱自的な人間を大いに応援し、自己肯定的な人間を自他とも破滅から救い出そう。僕らはたとえそれでこのイデオログの不興を被るとしても、けして後悔はしない。そうだろう、皆。

さあ、これで根源的な問題への方向性が明らかとなった。

僕らは最後の結論に達した」

ニコライが少し寂しげに言った。

「僕はまた君に批判されてしまうかもしれないが、憂鬱だ。

ヨセフ、いったい、これで解決なのだろうか。しかし死した者は帰らない。不本意なまま死した者はこれで救われるのか。惨めな、悲惨な、

惨たらしい無念の横変死には甲斐があつたのか。

まだ本当の答じゃないよ、ヨセフ」

「わかつている。焦るな、ニコライ」

ニコライは首を振った。

「焦るさ。もし報奨を失うなら僕には時間がない。このチャンスを使つて人類に最大の利益を^{りやく}もたらしたい。

僕もエステーラやジャコのように死に直面せざるをえない人間だからよくわかる。死は人間にとって真にリアルだ。生とは死への抵抗と言つてもよいほどだ。

僕らは死の虚無になることに本能的な畏怖を感じるよう構造されて

いてそれから逃れられない。

なるほど正義のために死ねた者は幸せだ。悪を為さずに死ねた者も不幸ではない。だがそれを享受するには智慧が必要だ。既に不幸のうちに死してしまった者たちをどうしたらよいか。この悼みの気持ちをどうしたらよいか。

幼子のうちに死してしまった者たちの不幸をどうしたらよいか」
誰もが沈黙した。

かくしてその日の会議は終わった。

杏佳は嬉々としてピンク・キャデラックに乗り、エステーラは炎のように意気揚々と龍車に乗り込む。ジャコは彼らしからぬ瞑想に耽る。ヨセフは疲れ切っていた。龍車を走らせられずにいる。

ニコライがその隣に停めた自らの龍車の席に深々と坐り、呟いた。

「まだ終わったとはおもってはいないよ」

それはまだ停まっている龍車で半ば思考し、半ば放心状態のヨセフに對して言ったものだった。

「何のことだ、ニコライ。」

いや、そうさ。むしろ、これからだ。僕らは未知の領域に行こうとしているんだ。全てがこれから始まる。

僕らが歴史を創るんだ。恐らくは全ての価値が顛倒させてね。

今までは善悪を為してから裁かれた」

ヨセフは眼を瞑りながら反芻するように語る。

「僕らは善行を創り、悪行を停止させ、撲滅しようとしているんだ。

いや、様々な宗教の説話や伝承でそう云うことを神や聖者が為すと語られていた。だが実際には善人を窮地から救い、悪人を打ち滅ぼしていただけだ。善も悪も既に為されていた。行為主義の世界だった。飽くまで果報だった」

「そうだね」

「理想であるべき説話の中でさえそうだったんだ。

現実はどうか。現実はやりたい放題だった。

ただ要領のよい者が勝つ、頭のよい者が勝つ、力の強い者が勝つ、そう云う獣的な汚い世界だった。倫理や道徳によらない。だから欲しいままに利己に走る。

だがそれはそれで脱自的な世界だった。生き抜くためにより複雑化し、過去の自分を超越して行ったからな。

だからこそもっと上が要求される。

さらに究極の脱自を目指すためには自己肯定を超越しなければなら

ない。そうさ、人間は自己肯定を欣求するように構造されている。いや、

全ての生命は同じだ。

だから制止がなければ皆、ひたすら只管に自己肯定に走る。当然だ。

もうそんな世界は脱自的な歴史の中で限界に達している。

この世は空だ。ただ現象が縁り起こつて風に波紋做す砂のように定義もなく到達もなく現れては消えるだけだ。その都度、因果によつて現象するに過ぎない。その意味と言うか、理由と言うか、本質と言うか、実体と言うべきか、そんなものは欠片もない。

真実と言うべきはサティアが言つたような、無空と云う自己矛盾した考概のごとくにある存在（非存在？）だ。つまりわかり易く言えば真実

はない。ただ現実がある。

現象がただ起こるばかりだ。だから道徳は廃れ、倫理は戯れ言におもえる。世に悪人が多いのも彼らが現に自分たちが置かれた状況を正しく認識しているからだとも言える。

そして今、満潮に達しているんだ。あふれ氾濫する川が堰を決壊させるように臨界点にきている。僕らが次に目指すべきはより高次の脱自性だ。

それは人間の例で言えば自己を犠牲にする正義、たとえ虚しく杭を打つことでしかないとしても自己肯定を超越する他者への愛だ。

だとすれば結果を裁くことは完全なことでは足りない。より高い愛の

世界を考えれば僕らが為すべきは善を生み創り、悪を構築しない世界だ。最初から問題がなければ裁判なんか要らない。本来そうあるべきところへ僕らは逝くんのだ」

ニコライはしばらく応えなかったが、漸く言った。

「むろん、そうさ。どうやら君と僕の意見が漸く一致を見そうだね。

だから僕は言ったんだ。最高裁判はまだ終わっていない、と。では、また。」

さあ、出発してください」

御者が手綱を引くと龍は雄叫びとともに立ち上がると飛ぶように車を牽く。去って行くニコライを眼で追いながらヨセフは呟いた。

「どう云う意味だろう。相変わらず見えない奴だな。何を考えているのかわからない奴だ」

さて、ジャコは邸に着くなり、執務室に入り、机に向かった。

「閣下、お疲れでしょう。少しはお休みになられては」

「嫌だよ。」

体中から炎が上がつている気分なんだ。とても休んでなんかいられないよ。心配ない。以前に比べれば遙かに幸せで、つまり有意義なんだ。僕にはニコライやヨセフの言う意味はよくわからない。だけど事前に善を育て悪を育たせないと云う考えには共感する。胸がすつきりしたよ。裁いていて憤りは晴らされるけれどもなぜかわだかまりが残っていた。

今は爽あきらかな気分だ。

ねえ、帰りながら色々考えたんだ。

人々を監視するこれだけの膨大精緻なシステムがある。これを矯正と育成とに時々刻々注げば不可能ではない。見ているだけじゃない、手を出すんだ。そうさ、そうすれば創れるんだ。できるよ。

真実の世界が、本当のあるべき真実の世界が。もう誰も泣かない。苦しみも辛さもなく、憤りも憎悪もない。光のように軽やかな微笑の舞い躍り翔ける世界が。自由な飛翔のような世界が。歓喜と叡智とに満ちた世界が。

ああ、理想とは何て素晴らしいんだろう。

それをおもえば魂を喪うとは何と云う不幸なんだろう。それこそ本当の死だ。生命を失うことだ。神の書物に記されているとおりなんだ！」
エステーラは寢室に独りこもって祈っていた。

「神様。

ありがとうございます。

私は本当の幸せを知りました。私は幸せです。ああ、私にはただ祈ることしかできない。あとは与えられた力の限り努力するだけです。けれどそれは神様が私をそう仕向けてくれたからできること、私はただ身を任せているのでしかない。

私は世界から不幸をなくしてみせます。このような崇高なことに関わ

ることがこんなにも幸せに感じられることだとは夢にもおもいませんでした。

ああ、偉大なる神に讃えあれ。そしてこの大地に永遠の平和を」
杏佳は豪勢な客間のソファに驕慢に坐っていた。

「ああ、エイドス、あなたは最高だわ。何だかよくわからないけど、何もかもがうまく行ったみたい。

ヤバイところを脱した、って感じね。

でも何だか面倒なことにわ、なったわねえ。

だって今までやっていたことを全面的に変えるんでしょう。しかも報酬を失うリスクがあるのよ！

ちよつと、とんでもないことだとおもわない？

ねえ、今度はこれを止めさせるよい手がないの、エイドス。あなたならきつと考えつくわよ。どう？

やってくれるわよね」

補佐官は凄い渋面を作った。

「しかし杏佳閣下、本日の会議結果は素晴らしいものでした。歴史的な第一歩です。私には到底ご要望にはお応えしかねます」

「あら、どう云うこと！ あなたは私の補佐官なのよ」

「残念ながら杏佳閣下、正義は何よりも偉大なのです。閣下のお望みとあってもこればかりはご容赦を」

杏佳は鼻の周りに皺を寄せる。

「そう。」

仕方ないわね。ボーナスの査定に響くわよ」

「そんな査定制度はございません」

「そんなことないわ。何もないとところに杭を打つのが私の仕事なのよ！
制度が何よ。これが現実だわ。何もありませんよ？ 身も蓋
もない私の発言があなたの現実なのよ」

「ご名言です。アゼンやシヴィロも泣いて悦ぶでしょう。事実、感銘い
たしました」

杏佳は高らかに笑った。

翌日、五名の最高裁判員は天叡の城の大広間で究極真実奥義サティアに謁見した。白く眩い輝きは以前にも増して燦然としている。

その日、サティアはなぜか物憂げだった。

「それで？」

諸卿が余に陳情したいこととは。それはいかなることか。申し叙べよ」
ヨセフが厳かに前に出た。数日前に比べて何と堂々としていることだろう。長く裾を引く衣装も黒地に金糸で象られた二匹の龍が玉を奪い合つて戯れるの図だった。燦然たる冠を被つて太陽のような輝きの緋色の錫杖を持っている。靴には翼がついていた。

「申し上げたい義は至って簡単です。

最高裁判の改革です。と言うよりか裁判制を廃止し、裁くのではなく、そもそも初めから悪を為させず、善いことだけを為すようにさせる、そのように替えたい、そう云うことです」

サティアの表情を窺った。何もない。相変わらず放心したように物憂げなだけである。続けた。

「すなわち行為が為されるのを待つてそれからこれを捉え、裁くのではなく、行為の前行為を方向づけ、悪を為させず、善を為させるために全存在者の行為に関与すべきだと考えたのです。人間を完全にするのです。

どうですか」

「それで？」

「そうすれば善は栄え、悪は滅し、裁判は不要となります。なぜなら悪事は起こらず、善い行いを特に褒める必要がなくなるからです。現在既に僕らが駆使している神軍兵の員数と体制とを利用すれば技術的に問題がありません。全てをクリアできるかと考えています。

どうでしょうか」

「ふむ。可能だな」

「それからまだ具体的手法は考えていませんが、もしできれば森羅万象の運行を精緻で完璧なものに変えたい。

すなわち人間だけでなく、世界の存在そのものもあるべき真実に変え

たい。現状で一切の現象が小裁判から最高裁判までのどれかに裁かれて
流転するならばそれも可能かと考えます。完全なる真の理想世界を実現
したい。

これが幸せであり、憂いも苦しみも煩いもない清らかで爽やかで睿ら
かな欣びに盈^みちあふれているのであるならば即実践すべきです。全てが
架空なのはどうして躊躇する必要があるでしょうか。理由など要らない。

是非、僕らのこの大改革を行なわせてください。最高裁判員を辞して
この新たな仕事を始めたい。報奨を失つても構いません。皆で意見が一
致しました。

報奨を欲するとは私欲です。自分の欲するがままに願いを全てかなえ

たいと希望するのは利己でしかない。不死を乞い願うことなど執著でしかない。

生命は生存ではないのです。高次の脱自こそ幸福です」

サティアはやがて力なく、相も変らぬ微笑を泛べた。

「卿の言うことは卿の常用する論理と云うものに従って解釈するならば矛盾を起こしている。無空ならば敢えてそれをするのが何か異なることなのだろうか。

裁くことも育成することと何も変わらない」

しかしヨセフの自信は揺るがなかった。

「変わらないことが何でしょう。全ては空なのですから。僕らは僕ら

の真にある声に従う。空莫に杭を打つのです」

サティアの微笑が空々しい哄笑になった。

「ならば為すがよい。ただ繰り返し言おう、この世に選択肢はなかったのだ、と。成るものは成り、成らぬものは成らない」

「そういたしましょう。」

では僕らは総辞職いたします。僕らの最高裁判は終わりです」

突如、ニコライが言った。

「いや。まだだ。まだ終わっていない」

少女少年らは驚いて彼を見つめた。

ニコライが決然と言う。

「僕は諸悪の根源として告訴したい」

ヨセフが声を上げて尋ねた。

「誰を？」

「むろん、サティアだ」

驚愕が起こった。エステーラは「まあ！」と叫んだ。杏佳はあんどりと口を開けたまま、ジャコは眼を丸くする。ヨセフが反駁した。

「君は何を言うのか。」

なぜサティアを裁くのか」

「君にはわからないのか。」

全ての人間の心の動きをサティアが操作している。善いことを為すの

も悪しきことを為すのも全てサティアの指示なんだ。

全てがサティアの管理下にあるとすれば罪は誰にあるのか。アゼンもシヴィロも悪人に成ろうとして成ったのではない。

そもそも世界がこのようにあるのも皆サティアがそうしたからそうなっているんだ。彼が構築したんだ。現象もシステムも。だったら罪は誰にあるのか。イスpeg連合邦やエウロペア連合の国々やリセヤ連邦やZIPAGが悪かったのか。全ての設定を為したのは誰だったんだ。管理しているのは誰だったんだ。

人に罪を犯させてその罪を裁くことは罪ではないのか。そのシステムを構築したのは誰か。

そもそも誰も罪を為さない世界システムを構築すべきではなかったか。なぜ完璧な世界を創らなかったのか。なぜ悪事を為させるのか。

それを試練や修行だと説明することはできる。だがなぜそんな人間が必要だったのか。最初から試練や修行を経た者のように完成された者として創ればよかったのではないか。

改革の前に諸悪の根源を断つべきだとおもう。

だから僕はサティアを裁くべきだとおもう。世界を是正するために先んじてそれが必要だと考える。

どうおもうか」

ヨセフは息を呑んだ。エステーラの顔を見る。エステーラもヨセフを

見、そしてジャコを見た。ジャコの顔も強張っている。杏佳だけだ、呑気なのは。

構わずニコライは続けた。

「何も言わないのか。」

君らは僕のように考えないのか」

エステーラが問うた。

「つまりサティア、あなたが私の家族を殺したと云うことになるのか？」

双眸の周囲の金色をしたアラベスク模様のような刺青が滾るように輝いた。

「そのとおりだ」

「そんな！　なぜ！」

サティアはその訴えに微笑を以て応えた。それはときに美しくときに優しくときに残酷な自然のように非情性に盈ちていた。巖のような沈黙である。

ヨセフが言葉を差し挟んだ。

「待て、ニコライ。」

君は現実の大摂理に問おうとしているんだ。そもそも僕らが行使しようとしている権威は彼に由来する。実践不可能になるかもしれない。君は究極の真実奥義に対して問うているんだぞ。

僕らの倫理や正義や、いやそもそも諸概念がそれに妥当かどうかを考

えるべきではないか」

ニコライはヨセフに微笑んだ。

「だがそれはサティアが与えたものだ。

それが妥当でないならばその責任はサティアにある。それを罪だと僕は判断するよ」

「どうかな。

そこまで考えるともはやそれは論理の判断ではない。僕らの思考が対応可能かどうか、疑問がある」

「だから言った。

僕はそう判断する、と。それはもう飛躍でしかない。決断だ。

君がいつか言った。現実はいつも選択を迫る。択べなくともどちらかを択ばないことは実践上では不可能ではないか」

「そのとおりだが」

サティアが突如、謳うように言った。

「そのとおりだ。」

よってしかあれし、しくあれよ。

余の言葉に謂われはない」

ニコライが決然と言った。

「僕もそのように考え、同じように謂れを超えて強く宣言する。今ここにおいて最高裁判を行なう、と。」

ヨセフ、今日こそは究極の問いが問われるんだ。

さあ、アパロン、出よ。

ここに最後の究極の最高裁判を開廷する」

アパロンが煙のように現れた。

「命により参上つかまつりました。

ここに最高裁判を開廷いたします」

たちまち壇が下りて来て神軍の衛兵が居並ぶ。

「さあ、諸君、壇上に上がりたまえ。席に着こう。僕らの勤めを果たすんだ」

ヨセフは厳しい表情になったが、考えたのは瞬間だけで、おもむろに

段を上った。エステーラも戸惑いながらもそれに続く。ジャコは決心し、杏佳を振り向いてから上った。杏佳は肩をすくめ、

「何だかわからないけど、面白そうね」

席に着くとニコライが言う。

「サティア、真実を語ってもらおう。」

全てには謂われがない、とあなたは言う。だが僕らにはそれではすま
せられない。

すませられるだろうか、どれほど無数の、どれほど長い苦しみや哀し
みがあったことだろうか。

無空の世界に杭を打つことができるなら、悲惨のない世界が架空でき

たはずではないか。

語れ、真実を」

嚴肅に聳える最高裁判員席に囲まれたサティアは変わらぬ黄金の、自然のような無垢の無慈悲な微笑を泛べたままであった。

「余に真実を語れと申すか。

余は常に真実しか語っておらぬ。ニコライ卿、以前にも語ったとおりだ。卿の疑義への問いは既に出ている。

一切経緯などはない。全ては唐突だ。そうだからそうなのだ。選択肢などはなかったのだ」

「それが事実であることをどうやって確かめられるのか」

「なぜ確認が確認なのか証明できるかね。卿の詰問は虚しい。

確かめる必要などない。卿は無空に何を求めるのか。ただそうだからそうなのだ。そのほかの選択肢はない。

いや、諸卿の概念に準じて言えば脱自的な志向に駆るために人間に苦難を与えたとも言えるだろう。

だが同じことだ。全ては唐突、無空である。ただ現実だ。人が生き、怒り、悲しみ、喜び、幸せや不幸があり、やがて死ぬ。朽ち葉が自然に落ちるように」

ニコライは執拗に問い詰めた。

「あなたなら、そうでない世界も創れたはずだ」

「いや。」

何度も言う、それ以外の存在の仕方はなかったのだ」

「ではなぜそれ以外の存在を考えるように僕らはできているのだ」

「謂われはない。ただ唐突だ」

「堂々巡りだな。僕はあなたを有罪と考える。あなたの権威を剥奪し、僕らがそれを継承する。」

そして新しい世界を構築する」

サティアはじつとニコライを見つめた。その双眸は揺れる湖のように
燦々と睿らかに煌めき、喩ようもなく微妙で美しかった。

「よからう。そしてエステーラの不幸な弟や兄や母親や父親はどうする

のだ。ジャコの妹や母親や父親の死はどうするのか。死んだ者はもうよいか」

ニコライの顔が少しゆがんだ。

「正しい裁きによつて天国で報われているはずだ」

「そうだ。だがそれでよかったのか」

サティアは語り出した。優しく悲しげな表情で、それらの不幸を次々と再現した。それは如実に各人の脳裏に実在として3Dのように現れた。エステーラは声を上げて泣いた。ジャコは唇を噛み、涙を零した。ヨセフも蒼白であった。

『おかあさん、寒いよ。寒いよ』

杏佳は烈しい衝撃を受け、涙があふれた。この世にこんな不幸があったのだ。

「諸卿よ、しかしながらこれは人類の不幸の一部でしかない。

この数億倍の不幸が長い歳月に渡って続いているのである」

ニコライは身を震わせながら、

「だからこそじゃないか。それを変えてやるんだ」

「よろしい。変えたまえ。その権限を委譲しよう。

ただし条件がある。過去は変えられない。しかし過去をも救え。

それが究極真実奥義サティアからの条件である。

でなければ彼らの死はただ悲惨で無為であったことになる」

ニコライが声を上げた。

「不可能だ」

「なぜ？」

「過去が変えられないならば不可能だ」

「過去を変えたまえ。」

ただしこの裁判は存在しなかったであろう」

ニコライは言葉に詰まった。

ジャコがニコライを励ますように大きな声で言った。

「できるよ、ニコライ。」

僕の妹の死は無駄じゃないんだ。そうじゃなくっちゃならないよ。こ

の裁判がその証明だ。過去は義しい。今があるからだ。変えなくてもいいんだ。僕は祈るよ、妹やかあさんが僕にとって一番清らかで義しい」
エステーラも言う。

「そうよ、弟の死は可哀想だったけれども弟のその生きた人生のは義しく真実だったのよ、彼の生涯は神聖だった、清らかな正義、絶対そうだわ！ そうじゃなくっちゃいけない！ そうよ」

杏佳が泣きながら言った。

「ごめんなさい、エステーラ、ごめんなさい、ジャコ。

私は幸せだったんだわ。どうしたらいいの？

私はあなたたちに謝らなくちゃいけないわ。私を赦してくてれる？」

エステーラが席を立ち、泣きじゃくる杏佳の肩に手をおいた。

「杏佳、あなたが自分を責める必要はないわ。不幸に生まれた人もいるし、そうでない人もいるのよ。」

私こそ謝るわ、あなたに酷いことを言った。赦してね」

二人は抱き合って泣いた。ジャコももう顔を上げていられなかった。

しばらく啜り泣きと沈黙とが続いた後、ヨセフが静かに言った。

「過去は義しいのでも義しくないのでもない。ただの現実だ。それが最も厳かで神聖なんだ。真実なんだ。終わってしまったことを誰にも変える権利はない。」

それを変えてはいけない。

ニコライ、サティアが究極真実奥義と名乗る意味が僕にはわかった。

彼こそは現実そのものだ。僕らが問うべきではない」

ニコライはそれに応え、歎息して言う。

「そうらしいね。」

サティアへの裁きを取り下げだ。

アパロン、閉廷を告げてくれ」

「畏まりました。大いなる最高裁判に栄えあれ」

法廷の備品は全て霧となって床に消えた。

ヨセフはしかしサティアに向かって燦らかに言った。

「しかしサティア、僕の最初の提言は承諾して戴きますよ。」

世界に革命を起こしたいんだ」

サティアは大笑した。

「然り。為せるところまでは為すがよい、こどもらよ。未来はまだない。事は成るべくして成るが誰もそれをあらかじめ知ることはできない。逝くがよい、善き者たち。往くがよい。最後に諸卿に真実の言葉を贈ろう。これは現実そのものだ。すなわち唐突である。意味を問う莫れ。

羯帝羯帝波羅羯帝波羅僧羯帝菩提沙婆訶

さて、以て諸卿の委嘱は今解かれた。その苦勞をねぎらおう。余は約

束どおり諸卿に報奨を与える。遠慮なく受けよ。

さて、その前に確認するが、報奨の内容は先に諸卿が要求したとおりでよろしいな」

しばらくは皆、あ然としていた。考えていなかったのだ。当然辞職とともに約定は失効し、喪われるものとおもっていたのである。エステーラがきつぱりと言った。

「何も要らないわ」

ジャコがそれに続いた。

「僕もだ。永遠の命も全ての望みがかなうことも要らない。ほかの人と同じがいい。それが聖なる義しさだから」

ヨセフは呆れて彼らを眺めていたが、

「ああ、僕も爽あきらかなる人生を望むよ。

いつかエステーラが言った。正義に生きて正義に死ぬる者は幸せだ、と。脱自的なそれこそが最もリアルな幸福だ。

僕も真の幸福を選択しよう」

ニコライも大らかに宣言した。

「ああ、僕もだ。

死に雄々しく立ち向かいたい」

ジャコが駆け寄った。

「僕はこの任務が終わったら必ず生き延びて安全で平和なところへ行

く。そして、すぐにお金を貯めて君に会いに行くよ。行ってみせる。必ず方法があるはずだ。それまで毎日、君のために祈る」

エステーラも寄って手を添えた。

「私もよ。私も生き残ってあなたを援けに行くわ。必ず救ってみせるわ」
ヨセフも頷いた。

「ああ、僕も約束する。未来はまだない。必ず方法はあるよ。任務を終えて家に戻ったらその日のうちに渡航の手続きをしよう」

杏佳も大声で言った。

「私だって行くわ。おかあさんに言って行かせてくれなきゃ、死んじやうって言うわ」

それを聞いてエステーラがとがめた。

「莫迦。そんなこと言うもんじゃないわ」

「ごめんなさい」

杏佳が舌を出す。

ニコライは初めて涙をこぼした。

「ありがとう。皆」

サティアがどこか迷惑そうに手を振る。

「いやはや、諸卿は何か勘違いしてはいまいか。余は既に言った、過去は変えられない、と。」

ニコライ、卿は今病気なのか」

呆然としてニコライが応えた。

「いいえ、とても元気です。まさか」

「どうして余に過去が変えられようか。また変えようものか。事実、卿は既に全快しておる」

皆が狂喜の歓声を上げた。

「おめでとう、ニコライ」

それをしばらく眺めていたサティアはおもい出したように言った。

「さて、杏佳。卿の望みをまだ聞いていなかったようにおもうが、皆と同じでよいか」

杏佳はすまし顔で言った。

「私は違うわ。」

でも、もう『全ての望みをかなえて』なんて言わないよ。よくわかったもの。せいぜい、最新のD.O.C.O.M.か、プレイステーションくらいにしとくわ」

窓

